
白い鎌と夢物語

夕菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い鎌と夢物語

【Nコード】

N0062U

【作者名】

夕菜

【あらすじ】

恐ろしい夢をみた次の日、私の目の前に現れたのは夢のなかに出てきた彼だった。

彼は私の全てを知っているかのような銀の瞳で、こちらを見据えていた……。

現実世界と夢世界が絡み合う、少し不思議な物語。

第1話「奇妙な夢と奇妙な転校生」

「学校のどこかに、開かずの間があるんだって」

この噂は、学校中に広がっているようだった。

もちろん、平野^{ヒラノ} 朝菜^{アサナ}のいる、1年7組の教室にもだ。

朝菜は、授業の終了のチャイムが鳴るとパタンと漫画本を閉じた。

「朝菜〜。また授業中に、漫画読んでたでしょ？」

「！」

朝菜が顔を上げると、そこにはにやにやした遥香^{ハルカ}の顔があった。

どうやら、遥香は授業中、朝菜のことを観察していたらしい。

遥香の席は、朝菜の斜め後ろ・・・つまり、観察するには一番適した位置にある。

朝菜は、遥香に適当な笑いを返すと、漫画を机の中に押し入れた。

「ほら！また笑って誤魔化す！」

「はははは」

遥香は、半ば強引に朝菜の机から漫画を引っ張りだした。

その表紙には、黒の洋服を着た女の子が箒に乗って、空を飛んでるような絵が描かれてある。

朝菜にとってはお馴染みの漫画の表紙だ。だってこの漫画は、朝菜の大好きなシリーズの第一巻。

遥香は、その表紙を流すように見た後、パラパラとページを捲る。

「その漫画、おもしろいよ！遥香も読んでみれば？」

朝菜は、ファンタジーの漫画が大好きだ。

家には数えきれないほどあるし、漫画を読まない一日など朝菜にとってありえないことだ。

「私はこういうのより、恋愛とかのほうが好きだなー」

遥香は、ため息交じりにそう言うと、漫画を閉じて机の上に置いた。

朝菜は、予想していた答えだったので、そのことは気にせず言葉を続ける。

「・・・ねえ、遥香。あの噂知ってる？」

「あー・・・。開かずの間があるとかないとか・・・」

朝菜は、遥香の言葉に頷いた。そして、笑顔で言った。

「何か、面白そうだね！」

遥香は、朝菜の言葉に眉を寄せる。

「えー。別にどうだっていいじゃん。ただの噂だし。開かずの間なんて、ないって」

「えー・・・」

朝菜は、遥香の言葉にガツカリした。

何で、遥香は簡単にそんなこと言うんだろう？

朝菜は、開かずの間は絶対にあると密かに思っている。

開かずの間には、一体何があるんだろう。考えただけでも楽しい。しかし、そのことはあえて口には出さなかった。否、出したくなかった。言っただとしても、遥香に軽く聞き流されて、終わってしまうのがおちだ。

遥香は、自分と違いきちんと現実を生きている人だ。

一方朝菜は、いつでも漫画のような場面に出くわすことを期待している。

とその時、授業開始のチャイムが教室に響いた。

「あっ・・・遥・・・」

しかし、そこには遥香の姿はない。

朝菜が肩越しに振り返ると、遥香は既に自分の席に着いており、次の授業の準備をしている。

他の生徒もまだ騒がしいが、ほとんどが着席しているようだ。

（私もやらないと・・・）

朝菜は、次の授業はまじめに受けようと決めて、机の中から日本史の教科書を取り出した。

・・・まだ、先生は来ない。

朝菜は、さきほどの漫画の続きを読もうと思い、机の上に置きっぱなしの漫画に手を伸ばした。

「1年7組 平野 朝菜。職員室に来るように」
校内放送がそう言った。

(――・・・また呼び出しか・・・)

朝菜は、浅くため息を吐いた。

朝菜にとって呼び出しは、別に驚くことではない。呼び出しなんて、日常茶飯事だ。

漫画のことは、ばれていない自信がある。だとすると・・・。

朝菜は、席から立ち上がると、騒がしい教室を後にした。

「平野。どうしたんだ？その髪は」

「・・・これ自毛なんです」

今、朝菜の前にいるおじさんは、先ほどの授業担当の池田先生だ。

朝菜の髪の色を見た先生は、大抵そう言う。確か、このことで呼び出されたのは、これで三回目。

池田先生は、眉をよせて朝菜の髪をじっと見る。

「本当なのか？」

「・・・はい。これ遺伝なんです」

朝菜は、いつもと同じように淡々と説明した。

池田先生の目つきからして、どうやら今回はただでは帰してくれなそうな予感がする。

朝菜の髪の色は、黒ではない。金色だ。外国人でもないのに。それに瞳の色は、普通の黒だ。

池田先生は、不服そうな表情を浮かべた。

「・・・それでは目立つから、黒く染めることはできないのか？」

「・・・」

どうやら、朝菜の予感的中したようだ。

朝菜は、困ったように微笑んで一回だけ頷いた。・・・一応は、頷いた。

この髪の色は、母から受け継いだものだ。朝菜は、この髪色を70

%は気に入っていない。理由は、単純に目立つから。しかし、あとの30%は気に入っている。理由は・・・”母から受け継いだもの”だからだ。

先生が、行ってもいいという素振りを見せた。

朝菜は内心で、安堵のため息を吐くと、先生に軽く頭をさげてから職員室を後にした。

朝菜は次の授業も、その次の授業にも身が入らなかった。

一応、シャーペンは持っているものの全く手が動いていない。

考えているのは、”開かずの間”のこと。

開かずの間。響きの、とてもいい感じだ。いかにも漫画にできそうな・・・。

その噂が、朝菜の学校に流れているのだ。

朝菜は嬉しかった。そして、はらはらした。

本当にあったらいいのに。もしかしたら、本当にあるかも。だって、噂があるんだから。きっと何かはあるはず。

朝菜は開かずの間を開いてみたかった。否、開けなくてもいいから、見てみたかった。

朝菜は、その日の授業が終わるとすぐに家に帰った。・・・訳ではなかった。

朝菜の自転車が向かう先は、本屋だ。

今日は確か”BLACK DOG”と”クルム”の発売日。

朝菜は本屋に入ると、迷わず漫画売り場まで足を運んだ。新刊のスペースに、それらはきちんと並んでいた。

(よっしゃ・・・)

朝菜は漫画に手を伸ばす。

「おっ！朝菜だ」

「！」

振り返るとそこには、朝菜の兄Ⅱ平野 翼の姿があった。

「あ・・・お兄ちゃん」

翼は、朝菜より二つ年上の兄だ。

翼は朝菜と同じ高校に通っているが、生徒の人数が多いためか、ありがたいことに学校内ではほとんど合わない。

翼も制服を着ているので、朝菜と同じく学校帰りにこの本屋によったのだろう。

「あ！また漫画買う気なのかよ？家に何冊もあるだろー」

翼は、目の前に並んでいる漫画本の山を見ながら言った。

「家にはない本だからいいの！」

「・・・ふーん」

「・・・」

どうやら翼は、朝菜の話を真剣には聞いていないようだ。

朝菜はイライラしてきた。

「いいよなー。お前らは。俺たちは受験、受験って大忙しなのにさ」

「ふーん。それじゃ、何でこんなところにいるんですかー？」

「参考書選び！朝菜と違ってえらいだろ？」

「あー！いいからあっち行ってよ！」

翼は朝菜が大声を出すのを聞くと、にやにやしながら「わかった、わかった」と言っってこの場から立ち去った。

「・・・はー」

朝菜は、翼の姿が消えたのをしっかりと確認すると、先ほどの二冊を手取る。

とその時、朝菜の隣に来た人の手が、朝菜と同じ”クルム”の漫画をとるのが見えた。

（あっ・・・私と同じだ・・・）

朝菜は何となく気になり、その人の顔をちらっと盗み見た。

その青年（見た目的には朝菜と同じくらいだ）は、男なのにさらさらな髪。そして、黒に近い茶の髪色しており、肌は透き通るような白さだ。

朝菜がその青年ことをチラチラ観察していると、その青年がこちら

に振り向いた。

「!・・・」

朝菜はドキリとして、反射的に下を向く。

「この漫画、面白いよね」

「!」

朝菜は、驚いて顔を上げた。

そこには、微かに微笑んで朝菜を見ている先ほどの青年の姿があった。

どうやら朝菜に話しかけたらしい。

「あっ・・・うん」

朝菜は突然のことに驚いた。

知らない人に、店の中で声をかけられたのは初めてだ。

朝菜はここから早く離れたかったので、自然にこの場から立ち去ろうとした。

が、青年に背を向けた瞬間、空いているほうの手首を軽く掴まれた。

「え・・・?」

肩越しに振り返ると、先ほどの青年が、落ち着き払った表情でこちらを見据えている。

「君・・・いい夢を持ってるね」

青年の声は、小さくて薄い声だったが、朝菜の耳の奥で確かに響いた。

朝菜が目を見開いて、青年のことを見ていると、青年は朝菜の手首からゆっくりとその手を離れた。その顔には、謎めいた微笑みが浮かんでいる。

（一体・・・何・・・）

朝菜は、表情を引きつらせたまま、何とかこの場から離れることができた。

後ろがかなり気になったが、どうも振り向く気にはなれない。

あの青年は、気味が悪かった。

掴まれた手首に、まだその感覚が残っているように感じた。

朝菜は素早く会計をすませ、店からでた。

出来るだけあの青年のことは、頭の隅に追いやるように努力した。それに、家に帰れば漫画を読むという楽しみが待っている。あんなことは忘れられそうだ。

朝菜は、自転車にまたがるとペダルをこいだ。そして、スピードを上げ自宅にむかった。

家に帰って、茶の間を覗くと、朝菜の父親Ⅱ平野 明が夕食を並べているところだった。

「ただいま」

朝菜が声をかけると、明は顔だけをこちらに向けた。

「おかえり。朝菜。今日の学校はどうだったかい？」

「別に、普通だよ」

「そうか」

これが、いつものお決まりの会話だった。

「もう夕食にするから」

「うん」

朝菜は、それだけ言うと、茶の間を後にして、二階へと続く階段を駆け上がった。

父は家事もやって、仕事もこなしている。平野家の母と言っても過言ではない存在だ。

まあ、たまには朝菜も、それを手伝ったりしているのだが。

朝菜は、自室に入ると、鞆を机の上にドサッと置いた。

そして、電気スタンドの隣に置いてある写真に目をやった。

そこには、朝菜と翼と明が写っている。たしか、朝菜が高校に入学したときに、校門の前で撮った写真だ。

そして、別の写真から切り抜かれた、朝菜の母Ⅱ夏枝の写真がその写真に貼り付けてある。

夏枝はもうこの世にはいない。朝菜が幼いころ、いなくなってしまう

った。

夏枝は、とても綺麗な金髪をしている。そして朝菜も。しかし、明と翼は普通の色だ。

この髪色は、朝菜だけが母から受け継いだものだ。朝菜は、そのことがとても嬉しかったりする。

だって、自分の髪色を見れば、母のことを思い出す。母の髪色を見れば、自分の髪色を思い出す。

何か繋がってる。・・・親子って感じた。

母との記憶がほとんどない朝菜にとっては、自分の髪色は母を感じさせてくれるものだった。

朝菜が茶の間に入ると、明と翼はすでに固定の位置についていた。二人ともテレビを見ている。テレビには、7時のニュースが流れていた。

朝菜も自分の席に腰をおろした。

目の前のテーブルには、明が作ってくれた夕食が並んでいる。

「お父さん、お兄ちゃん。早く食べようよ」

明と翼は、朝菜の声に同時にこちらに振り返った。

「おしっ。食べっか」

翼はそう言うと、箸を手に持ち、皿にのせてあるコロツケに箸を伸ばす。

明も、ビールが入ったコップに手を伸ばした。

「頂きます」

朝菜は、小声でそう言うと箸を手に持った。

「・・・」

食べ始めた明と翼の目は、テレビ画面に注がれていた。

朝菜もつられて、テレビ画面に目をやる。

アナウンサーのお兄さんが、目を見開いてこちらに向かって話していた。

『眠ったまま意識を取り戻さなかった少女が、今日の午前八時前後に目を覚ましました。』

しかし、彼女は眠る以前の何を何も覚えておらず、両親の顔も認識できない状況ということです。専門家の話しよると……』

朝菜は、テレビ画面から目を離すと言った。

「何か変わった事件だねー」

「寝ぼけてるだけなんじゃねーの」

翼はテレビには興味を失くしたらしく、次々と夕飯を口に運んでいく。

ただ、明だけがテレビ画面に見入ったままだった。

「あっ。お兄ちゃん、ちゃんとお父さんのぶんも残しておかないと駄目だよ！」

翼は、まさにその時、最後の一つのクロッケに手をつけようとしているところだった。

「ちっ。ばれたか」

翼は、冗談っぽくにやにやしなからそう言った。

「……はっ……」

（お兄ちゃんは……ほんと元気だなあ……）

明は、テレビ画面が天気予報に切り替わると、何事もなかったかのように夕飯を口に運び始めた。

その後、しばらく沈黙が続いた。テレビだけが、明日の天気予報を伝えるために、話してしる。

「ねえ、お兄ちゃん」

「ん？」

翼は、朝菜のほうに目を向けた。

朝菜は、口の中でクロッケの味を味わいながら、言葉を続けた。

「お母さんって、こういう人だったか覚えてる？」

「……」

翼は、箸の動きをぴたりと止め、朝菜を見た。その眉間には、しわが寄っている。

「その話はするんじゃない!!」

「!!」

突然、明が大声をだした。

朝菜と翼は、目を見開いて明を見る。

明は、今までにない恐ろしい表情をしていた。

こんなに怒った明は初めてだ。いつもは、大声をだすことさえ滅多にないのに。

朝菜と翼は、茶碗と箸を手を持ったまま固まっていた。

そして少したつと、明の表情はみるみるうちに穏やかになった。もう、いつもの明の顔だった。

そして、明は呟くように言った。

「・・・すまん。もうその話はしないでくれるか？」

朝菜は、何がなんだか分らないまま、一回だけこくんと頷いた。

朝菜の頭の中は「どうして？」という疑問しか浮かんでこない。

朝菜は、自分の母親のことをほとんど知らないのに。ただ、少しだけでもいいから知りたいと思っただけなのに。

お母さん……。私、お母さんのこと、もっと知りたいよ。どんな声で話してたとか、口癖は何だったとか。自分のことをどう思っていたのかとか……。

朝菜は教室の自分の席に座って、いつものように漫画を読んでいた。

今は、休み時間。教室の中はとても騒がしい。

朝菜は、顔をあげて時計に目をやった。

授業開始のチャイムがなるまで、あと二分ぐらい。

(もうチャイムなっちゃう……)

朝菜は急いで、漫画に目を戻した。

「朝菜」

「！」

朝菜が横に振り向くと、瑠^{リュウ}が隣の席に座りこちらを見ていた。

瑠は、とても綺麗な青年だ。さらさらな銀色の髪、そして水晶玉のような銀色の瞳。

「何？」

瑠は、体ごとこちらに向けて座っている。そして、表情はいつものように穏やかだ。

「俺・・・朝菜のことが好きなんだ」

「!・・・」

瑠はそう言ってるわりに、表情をほとんど変えていない。

朝菜は、突然のことに次の言葉がでてこなかった。

「えっ・・・!？」

瑠は微笑んだ。

そして、いきなり朝菜の後頭部に手をまわすと、朝菜の唇に軽くキスをした。

そして瑠は、朝菜の瞳をまっすぐに見た。

「俺の気持ち本気だよ。俺と付き合ってくれる・・・？」

「!!」

朝菜は、反射的に頷いていた。

朝菜も瑠のことは嫌いでない。むしろ、好きに近い方だ。

「うれしいな」

瑠は、にこっと笑った。

朝菜も、瑠につられて自然と笑みがこぼれた。

「朝菜、二人だけになれるところ行こうよ」

瑠はそう言うと、朝菜の手を取り立ち上がった。

朝菜も瑠に続いて立ち上がる。

クラスの皆は、今までのことがなかったかのように、騒がしいままだ。

朝菜は瑠に促されるまま、生徒のあいだをすり抜け教室から出た。気がつくとも朝菜は、一階にある渡り廊下に立っていた。手は、隣にいる瑠の手と繋がれたままだ。

「こっち」

瑠は朝菜を促した。

そして、渡り廊下の太い柱の陰に回り込んだ。

そこには扉があった。柱に扉がついている。金属らしきものでできており、そこにはツタのような変わった模様が彫られていた。

「この扉は、俺が見つけた扉なんだ。普段は”開かずの間”なんだよ」

「・・・」

朝菜はただその扉に見入っていた。

（開かずの間・・・？）

瑠が、その扉を片手で押すと、開かずの間は意図も簡単に開いた。扉の中は・・・闇だった。まるでそこに何もなかったように、扉の中は闇で染められていた。

「朝菜、はやくこっちおいでよ」

「！」

朝菜は、誰かに手を引っ張られた。否、おそらく瑠に手を引っ張られた。

扉の中から瑠の手だけが出ており、朝菜の手を力強く引っ張る。

「はやく！」

「！！」

闇から、声だけが聞こえてくる。瑠の姿は見えない。闇しか見えない。

朝菜の手を引く力は、より一層強くなる。とても力強い。

・・・この手は、本当に瑠の手なのだろうか？闇の中から聞こえてくる声は、本当に瑠の声？

真実はすべて闇の中だ。・・・闇なんて信用できない。

「はやく！」

「っ・・・！」

（怖いっ・・・！）

心臓の鼓動が速くなる。冷汗が噴き出す。手から逃げられない。掴まれてる手が痛い。

とたん、闇の中からもう一本の手が、伸びてきた。その手は、朝菜の足をなめるように掴む。

「朝菜！」

「！！」

朝菜は目を開けた。天井が見える。

朝菜は、自室のベッドに横になっていた。

「大丈夫かよ？」

声のほうに目をやると、そこには翼が心配そうな表情を浮かべて立っていた。

「お兄ちゃん・・・」

朝菜は、ゆっくりと体を起こした。

「怖い夢みた・・・」

朝菜の心臓はまだ落ち着かなかった。ただ、とても怖かった。

「まっ。よかったな。起きられて」

「・・・」

「何怖い顔してんだよ。ただの夢だろ？」

「・・・うん」

翼は朝菜の頭をぐりぐりとなでると、「はやく下にこいよ」と言葉を残して、朝菜の部屋から出て行った。

まだ、手に痛みが残っている感じがする。冷汗もかいていた。

・・・久しぶりに恐ろしい夢を見た。

朝菜は、朝食のときも夢のことが頭から離れなかった。

あの青年は誰だろう。銀の髪と銀の瞳を持つ青年。夢の中で朝菜は、その青年のことを”溜”と呼んでいた。溜なんて人、朝菜の知り合いいにはいない。それに知らない人（夢の中では知っていたが）と、何でキスなんてしないといけないの？

それに開かずの間・・・はあった。夢の中では。その中は、本当の闇だった。何も見えなかった。

「ねえ朝菜！」

「！」

遥香が苛立ちの混じった顔で、朝菜の顔をのぞきこんだ。

朝菜は、はっとして遥香を見る。

「さっきからおはよーって言ってたのに、聞こえなかったの？」

「あっ・・・ごめん」

朝菜は教室に入って、席についてからも夢のことを考えていたせいでぼーっとしていた。

そのせいで、遥香が来たことにも気がつかなかったらしい。

開かずの間・・・銀髪の青年・・・いかにも漫画に影響された夢だと思った。開かずの間・・・夢の中では、渡り廊下の柱の影にあった。本当にあるのだろうか。今度行ってみよう・・・なんて。

「ほら！またぼーっとしてる」

「！・・・はははは・・・は」

「・・・何か悩みでもあるの？」

「はは・・・別にないよ。・・・ただ、開かずの間の夢みたからさ」

遥香は、朝菜の言葉に大きく目を見開いた。そして、笑いだした。

「・・・くくっ。朝菜って夢にまでそういうの見るの？まあ・・・学校で噂になってるけどさ・・・。漫画の読みすぎだよっ」

「えー。別にいいじゃん。確かにそうかもしれないけど・・・」

朝菜は、遥香に図星をつかれてドキリとした。

「ははは。自分でもそう思ってたんじゃない」

遥香は軽く笑うと、思いついたようにぽんと両手を合わせた。

「そうだ！知ってる？今日、このクラスに転校生が来るんだって」

「転校生？」

朝菜のクラスに転校生が来るのは初めてだ。

どういう人だろう？男子？それとも女子？もし、女子だった友達になりたいな・・・。

とその時、担任の先生がつかつかと教室に入ってきた。先生は、後ろに転校生らしき人を従えている。

ここからではよく顔は見えないが、どうやら男子のようだ。

遥香は、先生の姿を見ると、素早く自分の席についた。

先生は、教卓の前で足を止めた。

「今日は、転校生を紹介するぞ」

先生はそう言うと、転校生に自己紹介をするよう促した。

転校生は、先生に軽く微笑むと口を開いた。

「西園寺^{サイオンジ} 瑠^{リュウ}です。これからお世話になるので、よろしく願います」

その人は、緊張する様子なくさらっと言った。

「!!」

(瑠って・・・夢に出てきた人と同じ名前だ・・・)

朝菜の心臓が大きな音をたてる。

これは偶然なのだろうか。それとも予知夢？・・・否、この人は銀髪ではない。普通の髪色だ。・・・きっと名前が同じだけなんだ・・・。

その転校生の”瑠”は、男のくせに透き通るような白い肌で、髪はさらさらだった。

「・・・？」

(どっかで見たことあるような・・・)

・・・そうだ!!と朝菜は、心の中で叫んだ。

朝菜は、西園寺 瑠と会ったことがあったのだ。数日前、本屋で。

朝菜の手をつかんできた変な人だ。

クラスのみんなは、ひそひそと何かを話している。

おそらく、瑠が他の男子と違う雰囲気を持っているからだろう。

瑠は、何と言うか見た目もそうだが、どこかの国の王子様のような雰囲気を持ち合わせていた。

瑠は、生徒の注目を浴びても、相変わらず大人びた表情を崩していない。

朝菜は瑠に気づかれないように、できるだけ頭を机に近づけた。

否、この髪の色だし、気づかないほうが変だと思う。

しかし朝菜は、あの青年とかかわりたくなかった。また変なことを言われるかもしれない。

瑠は、先生に指示された席に着くために、生徒の机と机の間を通って、一番うしろの席に着いた。

生徒の目は、自然と瑠に向けられている。しかし、朝菜だけは、机ばかりを見つめていた・

（話かけられませんように・・・）

「ねえ朝菜！次、移動教室だよ！」

「！」

朝菜が顔を上げると、そこには遥香の姿があった。いつの間にか、朝のSHRは終わっていたようだ。

遥香は、手に家庭科の教科書を持っている。

「そうだ！」

朝菜は、机の中から教科書を取り出し、筆記用具を持って席から立ち上がった。

次は家庭科なので、家庭科室に移動しなければならない。

朝菜は遥香に続いて教室を出るとき、チラッと瑠の座っている席を見た。

瑠は、クラスの男子（多分、前の席の子だ）と話している。いたって普通に。

（よかった・・・）

朝菜はすぐに視線を戻した。そして、早足で遥香に追いついた。

（このまま関わらなく、済めばいいんだけど・・・）

朝菜は、懸命にそのことを心の中で祈った。

朝菜は移動中、ある重大なことに気づいた。

次、移動する教室は家庭科室。家庭科室は、西校舎の一階。渡り廊

下を通る。

夢の中で開かずの間があった場所だ。

確認するには、絶好のチャンスではないか。

朝菜は、心臓の鼓動が速くなるを感じた。こんなことは、馬鹿げていると分っている。でも、気になった。

わざわざ行くわけでもないし、太い柱の影をちょこっと覗くだけでいいのだ。

（・・・でも・・・）

そんなところを遥香に見られたら、また馬鹿にされるだろう。そのことだけは、避けたかった。

遥香が、西園寺 瑠のことを話しているが、まったく頭に入っていない。「うん」とか「そうか」などの適当な返事をして会話をしていた。

そして、朝菜は遥香に声をかけた。

「トイレ寄ってくから、先行ってていいよ」

「あっ・・・分った」

朝菜は遥香の言葉に安心すると、その場で方向転換した。とその時、遥香が朝菜を呼びとめた。

「朝菜！教科書、持って行ってあげようか？」

「・・・あっ、ありがとう」

朝菜は一瞬、どきりとして、遥香の教科書の上に自分の教科書と筆記用具を乗せた。

（ほんととは、トイレには行かないんだけど・・・）

朝菜は遥香に嘘について、悪い気がした。

朝菜は遥香と別れて、来た道を引き返した。他の生徒の流れと自分だけが方向が逆なので、少し違和感がある。

朝菜は、少しだけ歩いてまた方向転換すると、生徒の流れに乗った。渡り廊下はもう目の前だ。

朝菜は自然に早足になって、渡り廊下にでた。

（多分・・・ないけど・・・）

朝菜は生徒の流れから抜け出して、太い柱の影を覗いた。
しかしそこにあったのは、コンクリートの普通の柱だった。

(やっぱりねー・・・)

夢は夢。現実には現実だ。

少しでも、期待していた自分が恥ずかしかった。ドキドキハラハラすることなんて学校にあるはずがない。・・・毎日が同じなんだから。

「平野さん」

「！」

朝菜が驚いて振り向くと、そこには転校生、西園寺 瑠の姿があった。

朝菜は驚いて声も出なかった。

朝菜が今いる場所は、普通に渡り廊下を歩いているだけでは、丁度、柱の影になって見えない場所だ。

(・・・もしかして・・・見られてた・・・?)

瑠は朝菜の姿を見て、口元だけで笑った。

「本屋のとき以来だね・・・。」クルム”は読んだ？」

「・・・」

朝菜は適当に微笑んで、この場から立ち去ろうとした。余計なことを言われる前に、ここから離れなくては。

すると突然、瑠が柱に手について朝菜の行く手を遮った。

「!!!!」

「・・・なんで逃げるの？」

朝菜は恐怖で固まった。

瑠の強い視線を感じる。

「逃げたわけじゃ・・・」

朝菜の声は、小さくカサカサの声だった。瑠にきこえたかどうかも分らない。

「何で逃げるの?・・・キスまでした仲なのに」

「!!!!」

（いったい・・・何言ってるの・・・？）

「ねえ、朝菜・・・俺の顔見てよ」

瑠はそう言うと、柱からゆっくりと手を離した。

朝菜は反射的に、瑠の顔を見た。

「!」

瑠は、さっきまで朝菜が見ていた瑠の姿ではなかった。

流れるような銀色の髪。そして、水晶玉のような銀色の瞳。

・・・朝菜の夢にでてきた”瑠”の姿になっていたのだ。

（こんなことって・・・）

瑠は目を見開いている朝菜を見て、微笑んだ。

すると、次の瞬間、瑠の髪が毛先から流れるようにして元どおりの色になった。

瞳の色も一瞬のうちに、元の色になる。

「さっきの色じゃ、目立っちゃうしね。普段はこの色でいるんだよ」

瑠は淡々とした口調で話している。

朝菜は目の前で起こったのことがいまだに信じられず、ただ茫然と立ち尽くしていた。

「朝菜は・・・夢に出てきた”開かずの間”が本当にあるかどうか確かめに来た。・・・そうでしょ？」

「・・・」

（何で知ってるの・・・？）

まるで瑠が、朝菜の夢の内容を知っているかのような口ぶりだ。

瑠は言葉を続ける。

「凶星・・・みたいだね。・・・でも、現実にはあるわけないよ。

現実が起こることが限られている。夢の中のように、何でもありというわけにはいかないからね」

「・・・」

朝菜は瑠の言葉にカチンときた。

そんなことは分っている。

「それにその噂、流したの俺だよ」

「・・・は？」

「夢見がちな人や、好奇心が多せいな人はそういう噂を知りたがるしね。そういう人は大体”いい夢”をみるんだよ」

「?・・・」

朝菜は顔をしかめた。

(何言ってるの・・・)

瑠はそこでにやりと笑みを浮かべる。

「でも、もうそのことはどうでもいいや。・・・今までにない”いい夢”を持った人がいたんだから」

とその時、授業開始を知らせるチャイムがなった。

すでに、渡り廊下には生徒の姿は見当たらない。

「・・・授業にいかないかね」

瑠はため息まじりにそう言うと、朝菜に背を向けて歩き出した。

朝菜のことは振り返らず、瑠の姿は渡り廊下から消えた。

「・・・」

(よかった・・・)

朝菜は、意外と普通に授業に行ったことに驚いたが、今は安心感のほうが大きかった。

そして、”瑠は普通ではない”そう思った。

いい夢をみるかどうかなんて、他人から見ればどうでもいいことなのに。

それに瑠は朝菜のみた夢を知っていた。

そして、あの髪の色と瞳の色・・・。

絶対に瑠は・・・普通の人間ではない。

朝菜が教室の前まで来ると、ちょうど担当の先生が教室にはいるところだった。

(やばっ・・・)

朝菜は、急いで教室の後ろのドアへ駆けこんだ。

四人一組で座れるようになっていく机の、自分の席へ行き、始まりのあいさつをしてから席に着いた。

机の上には、朝菜の教科書と筆記用具がきちんと並べておいてあった。

「・・・」

朝菜は、別の机に座っている遥香にありがとうの合図を送ろうと思いい、遥香のほうを見たが、彼女はこちらを気にしている様子はない。朝菜は、遥香から目線を外した。

（いいや。休み時間に言おう・・・）

「・・・」

朝菜はどうしても気にせずにはいられず、瑠に目線に移した。

瑠はさっきまでのことがなかったかのように、同じ机に座っている人とおしゃべりをしている。

・・・こうして見れば、普通の高校生だ。

（いったい何なの・・・？）

瑠は、謎だらけだ。

それとも、さっき朝菜が見た瑠の姿はただの幻？

まだ朝菜は、夢の続きを見ているのでも言うのだろうか。

謎を解こうと思っても、朝菜にはとけないだろう。

朝菜は、もう瑠とは絶対に関わりたくないと思ったからだ。

「静かにしなさい」

先生がそう言うと、周りのざわめきが少しだけおさまった。しかし、まだおしゃべりに没頭している生徒もいる。

この先生はきつくは言わないということを、クラスの皆は知っていた。

先生は、それ以上は何も言わず黒板に何かを書き始めた。

「ユニバーサルデザインについて」

家庭科室に来たからといって、毎回、調理実習をやるとは限らない。今日は、教科書の内容にそって授業をやる日だ。

（あゝあ・・・）

退屈な授業だ。

朝葉は、瑠のことをできるだけ頭の隅に追いやって、教科書を開いた。

瑠は、先生が黒板に文字を書き始めると、教科書とノートを机の上に開いた。

しかし、まったく授業を受ける気にはなれなかった。

・・・今夜が待ち遠しくて仕方がない。

こんな”いい夢”を持った人に会えたのは久々だ。

今までは、くだらない夢やつまらない夢を持った奴らがほとんどだった。そんな奴らの夢は、退屈しのぎにもなりはしない。

「ねえ。瑠」

「！」

その声とほぼ同時に、トイロが瑠の隣に姿を現した。

トイロは、肩につくぐらいのしなやかな黒髪と、大きな黒い瞳の持ち主だ。そして、彼女の右肩から手首にかけて、ツタに似た黒い模様がそこに刻まれている。

「何？」スイマ”のトイロが昼間から・・・どうしたの？」

トイロは、瑠の言葉を聞くと困ったような笑顔を作って言った。

「あの・・・この部屋にいる人たちの誰か一人のでもいいんだけど・・・”気”を分けてもらってもいい？」

何か疲れちゃって」

「・・・いいよ。だけどそんなことは俺に聞かなくても、大丈夫だと思っただけだな」

「・・・うん」

・・・スイマの人々は、人が起きている間に使っている力Ⅱ”気”を自分に取り込むことによって生きている。いわば、人の気はスイマの人々にとって、生きる源なのだ。

トイロが、両手を自分の胸の前までもってくると、その手の中に等

身大の鎌が音もなく現れた。

その鎌は、トイロの髪色とは逆に、全身が真っ白だ。

スイマの鎌は、誰かを傷つけるために使うのではない。

・・・自分が生きるために使うのだ。

スイマの人々にとって、その鎌は自分の魂と言っても過言ではないだろう。

だから、トイロの使う鎌はこうも美しい色をしているのだ。と瑠は思った。

トイロは鎌を片手で持ち、身軽にジャンプすると、机の上に着地した。

・・・もちろん、トイロの姿は普通の人間には見えない。

トイロは、瑠の向かい側に座っている女子生徒に鎌を向けた。そして、彼女の体めがけて、鎌を勢いよく振り下ろした。

その鎌は彼女の体を勢いよく切り裂く。

・・・もちろん、そこから血はでていない。代わりに彼女の体からあふれ出たのは、小さな光の粒だ。

それらは、次々とトイロの体へ吸い込まれるように消えていく。

「ごちそうさま。ありがとう」

トイロは自分の姿が見えないと分っていながらも、笑顔でそう言った。

「トイロ。今夜、忘れるんじゃないぞ」

瑠は隣に着地したトイロに、できるだけ小声で言った。

「うん。分ってる」

トイロは微笑んだ。

「それじゃ・・・またね」

その言葉と可愛らしい笑顔を最後に残すと、トイロはその姿をかき消した。

「・・・」

瑠は、向かい側に座っている女子生徒に目を移した。

彼女の、黒板の文字を写しているはずの右手のシャーペンがノート

の上で止まっている。

そして彼女の顔は、下を向いたまま動かない。

スイマに”気”をとられると、大抵の人間は動けなくなる。そして、意識を保つのが難しくなる。

・・・彼女は眠ってしまったのだ。

朝菜は放課後になると、急いで家に帰った（溜から一秒でも早く離れたかったからだ）。

明日から毎日、溜と顔を合わせるようになると思うと、気がめいる。それに、溜が”普通の人間ではない”と知っているのは、恐らく朝菜だけ。仮に他の誰かに言ったとしても、軽く流されてしまうだろう。

あの時のこと話しても、誰も信じてくれる人はまず、いない。反対に馬鹿にされて恥をかくのがおちだ。

誰でもいいから、あの時のことを話したい。自分の中だけでこの気持ち閉じ込めていることは、朝菜にとって辛いことだった。

まるで漫画の中のような出来事だ。と朝菜は思った。

朝菜は漫画の中の世界に憧れていたが、実際そのような体験をしてみると、そんなにいいものではないことが分かった。

これからの毎日が不安になる。

あの溜という青年は、いったい何者だろう。

なぜ朝菜だけに目をつけた？

これから、溜と一言も話さずに学校生活を送ることはきっと無理だ。そう思った。

何が起きるか分らないという不安が、朝菜を縛り付けた。その不安が、”恐怖”に変わらないことを朝菜は懸命に願った。

朝菜は例のことを、夕食のときに思い切って話してみた。

家族の間だけなら、翼と明以外に決してこの話を聞かれることはないからだ。

明は朝菜の話が終わると、微笑んで「そうか」と言っただけだった。
・・・信じてもらえたかどうかは分らない。

翼は朝菜の話を真剣に聞いてはいたが、話が終わるとにやけた顔になって「面白い話だなー」と今にも大声をだして笑いだしそうな声で言った。

・・・多分、信じてもらえなかった。

「・・・はー」

(・・・話さなければよかったかも)

家族の反応は予想通りと言ったら予想通りだったが、いまいちしくりこない。もっと自分の話に、興味を持ってもらいたかったというのが本音だった。

今の朝菜は・・・。

自室の机に向かっていた。

もうお風呂にも入ったし、歯も綺麗に磨いた。後は、明日学校で行う漢字の小テストの勉強をやってしまったえば完璧なのだが・・・。これがなかなか進まない。

机の端に置いてある置時計に目をやった。

10時45分。・・・さっき時刻を確認した時から、三分しか進んでいない。

早く終わりにして、漫画読みたいのに。

「集中しなくちゃな・・・」

朝菜は自分に言い聞かせるためにも、そう呟いた。

朝菜の家から少し離れたところに建っているアパート。

その一室に溜はいた。

2、3人掛けのソファに腰をおろして、本を読んでいる。

トイレはベランダにでて、夜空の星を仰いでいる。

瑠が本のページをめくる音以外、聞こえる音はなかった。

瑠は壁にかけてある時計に目をやった。

午後11時。

瑠は、満足げな笑みを浮かべると、本を閉じ立ち上がった。

「トイロ・・・そろそろ時間だ」

ベランダに立っているトイロは、肩越しに振り返ると頷いた。

トイロは部屋とベランダの間にある窓をすり抜けて、瑠の隣に来た。

「今夜も”ムマ”としての仕事を完成させるぞ。今回は久々にいい夢を見つけたからな。・・・やりがいがありそうだ」

トイロは瑠の言葉に嬉しそうに頷いた。

「それじゃ、私、行ってくるね」

トイロはその言葉を残すと、その場で姿をかき消した。

・・・ムマの仕事は、スイマがいないと成り立たない。

スイマの能力で相手を眠らせその後、ムマが、眠っている相手の意思の中へ侵入する。そして、相手の記憶を夢へと変える。

スイマは人間ではないので、どこでも移動できるし、相手が普通の人間ならば姿を見られることもない。

一方ムマは、普通の人間なので、ムマ以外の能力は使えない。しかし、それでも困ることは決していない。

ムマは相手の近くにいらなくても、顔が分っていれば、いつでも相手へ侵入できる。

瑠は気合を入れるため、左の袖をたくし上げた。

そこには、トイロと同じ黒いツタの模様が刻まれている腕が見える。

この左腕は、スイマと契約した証だ。

ムマはスイマと契約しなければならない。

スイマはムマと契約しなければならない。

それらのことは、瑠たちにとっては必然なことなのだ。

トイロは、朝菜の部屋に姿を現した。

金色の髪を持った少女Ⅱ朝菜は、机に向かっていた。

トイロは朝菜の顔を覗き込んだ。

「こんばんは。朝菜ちゃん」

もちろん、返事はない。

朝菜は真剣な表情で、ノートに文字を書いている。

(よしっ・・・)

トイロの手の中に、等身大の鎌が音もなく現れた。そしてそれを、しっかりと握りしめた。

「たくさん・・・もらうね」

トイロはそう呟いて、鎌を高く振り上げた。

「朝菜！」

「！」

突然、どこことなく朝菜に似た黒髪の青年が部屋のドアを開いた。

その瞬間、トイロの手の中に握りしめられていた鎌は消えた。・・・

・スイマの鎌は、相手が特定の条件を満たしていないと使えないのだ。

彼は、部屋の中までズカズカと入ってきた。

「!!」

その時、トイロと彼の目が合った。

「・・・?」

トイロは思わぬ出来事に、彼の顔を凝視した。

(もしかして見えてるの・・・?)

しかし、彼は何事もなかったかのように、トイロの目の前を通り過ぎる。

(・・・気のせいかな)

朝菜と彼は、何か楽しそうに会話を始めた。

トイロはただそれを、呆然と眺めていることしかできなかった。

「どうしょ・・・」

どちらにしろ、このままでは鎌は使えない。

トイロは浅くため息を吐くと、いったん、溜のいるアパートに引き

上げるべく、この場を後にした。

「お兄ちゃん！」

「！」

朝菜がそう声をかけると、翼は驚いたように朝菜の顔を見た。

「さっきから後ろばかり気にしてない？」

朝菜は翼がさっきまで見ていた方に、目線を送りながら言った。

翼はにやりと笑って、そのほうを指差した。

「さっきあそこに幽霊がいたんだよ」

「！」

朝菜は疑いのまなざしで翼を見た。

翼の顔は相変わらずにやけている。

「嘘でしょ！顔にやけてるし、お兄ちゃん靈感ないじゃん！」

朝菜は、幽霊系が苦手中の苦手なので、嘘を早く認めてもらいたくて強めの口調で言った。

「いやっ、マジだし」

「嘘だ！」

朝菜は半ば叫ぶように言った。

翼はそんな朝菜の様子をしばらく観察していると、朝菜のことをからかうように、今度は反対のほうを指差した。

「あっ！あっちにも幽霊が！」

「・・・」

朝菜は我慢できなくなり、勢いよく椅子から立ち上がると、翼の背中を押して部屋から出て行くよう促した。

「やめてよっ！漢字の勉強しなくちゃいけないんだから、邪魔しないで！それに、私の部屋に勝手に入ってこないで！」

翼はいつも朝菜の部屋に、何のためらいもなく入ってくる。

入るときは、ノックぐらいはしてほしいものだ。

今日の朝だって、朝菜が寝ているときに勝手に部屋に入ってきた。

（そういえば・・・何で今日の朝、お兄ちゃん私の部屋にいたんだろ。そんなに私・・・うなされてたのかな・・・）

そのような考えが頭をよぎったが、今はただ、翼に部屋から出て行ってもらいたかった。

ドアの前まで行くと、突然、翼は朝菜のほうに振り返った。

「ちょっと待てよ！今夜、徹夜で俺と一緒にゲームやらないか？学校帰り、新しいRPG買って来たんだ♪」

朝菜は動きを止めると、翼の顔を見た。

「やりたいけど・・・明日、学校だし」

「何言ってるんだよ！明日、祝日で休みだろ！？」

「あっ・・・」

そうだ。明日は祝日だった。てっきり明日、漢字テストがあるものだと思っていた。

「じゃ、決まりだな！早く俺の部屋に来いよ！」

翼はそう言うのと、逃げるように去って行った。

（・・・まだやるとは言っていないのに・・・）

新しいゲーム・・・やりたいことはやりたいが、徹夜ということがどうも嫌だった。徹夜できたのは、大晦日ぐらいだ。

それに夜は、あったかい布団でぬくぬく眠りたい。

（まっ・・・眠くなったら寝ればいいか・・・）

翼は、一階へ続く階段を駆け下りて、居間の扉を開けた。

居間では、明がノートパソコンを開き、家に持ち帰った仕事をしているらしい姿があった。

翼は明の隣に駆け寄った。

明は何事かと思い、メガネ越しの黒い瞳を見開いた。

「父さん！大変だ！！あの時のスイマが朝菜のところに来た！！」
「！！！！」

明は翼の言葉に、スッと目を細めると頷いた。

「昨日のニュースといい、朝菜の話といい、当てはまりすぎていたからな・・・」

「・・・それじゃ、やっぱりパートナーの“あいつ”は朝菜のことを狙っているのか!？」

「・・・そのことで間違いなさそうだ」

「っ・・・」

あのスイマのパートナーのあいつ・・・西園寺 瑠、は超危険人物だ。・・・消さなくていい記憶まで消去して、それをすべて夢へと変えているらしい。自分が楽しむためだけに。

そのせいで母さんは・・・

翼は唇を強く噛みしめた。

(もう・・・絶対に母さんの時のようにはさせない)

明は翼の肩にそっと手を乗せた。

「西園寺に目をつけられるとは・・・親子そろって、同じ運命にさせるわけにはいかない・・・な」

「・・・」

翼はゆっくりと深く頷いた。

「西園寺は・・・朝菜の言ってた転校生だ。

だから、あいつ・・・朝菜が“いい夢”を持ってるって気づいたんだ」

明はただ、翼の戸惑いの入り混じった瞳をまっすぐ見ている。

「今夜は、俺が朝菜と一緒にいる。西園寺が諦めない限り、あのスイマは朝菜のところに来る」

翼はその言葉を呟くように言うと、すっと立ち上がった。

「しかし、それじゃ・・・」

明は翼が居間から出て行く寸前で、声をかけた。

「お前の体力も、朝菜の体力も持たないぞ」

翼は、歩みを止め、肩越しに振り返ると言った。

「その前に、西園寺には諦めてもらうから。それにいざとなったら“あの方法”があるだろ？」

「しかし、その方法だと朝菜はあのこと気づいてしまうかもしれないんだぞ？そのことは、絶対に朝菜には秘密・・・」

「大丈夫！朝菜は絶対に気づかない。」

俺たちが言わない限りはな」

翼はその言葉を吐き捨てるように言うと、居間から姿を消した。

「どうしたんだ？トイロ」

瑠は、数分もしないうちに姿を現したトイロにそう言った。

トイロはすまなそうに、視線を下に向ける。

「あのっ・・・朝菜ちゃんの“気”とれなかったの。なかなか条件が満たせてなくて・・・」

「・・・」

瑠はトイロの言葉に、眉間にしわを寄せた。

「大丈夫。トイロが悪いわけじゃないから」

瑠は出来るだけ、平常心を装ってそう言った。

本当は、一時も早く朝菜の夢をみてみたい。

瑠はソファにゆっくりと腰を下ろすと、トイロのことを見上げ、言った。

「もう少し時間がたったら、また行ってもらえる？」

「・・・うん。分かった」

トイロは瑠の言葉に頷いた。

午前三時・・・。

トイロは、また数分もしないうちに戻ってきた。

トイロは、瑠よりも早く口を開いた。

「ごめんなさい・・・。また駄目だったの・・・。朝菜ちゃん、お兄さんのような人と楽しそうに話してて・・・」

「・・・今晚は、無理そうなのか？」

「……うん」

トイロは、申し訳なさそうに目を伏せた。

（仕方ない……か……）

出来れば早めに仕事をしたかったが、もうすぐで夜が明けてしまう。せつかく、いい夢を持ったやつを見つけたことが出来たんだから、時間はたっぷりあったほうがいいに決まってる。

それに、チャンスはいくらでもある。

明日も明後日も。

「今夜は別な奴にするか……。トイロ、手頃な奴を見つけてこい。
・・仕事はちゃんとしないとね・・」

そして、次の日の夜……。

トイロは仕事を実行するために、朝菜の部屋にきた。

「!!」

しかし、朝菜の部屋は、昨日とは打って変わって照明が消えており、暗かった。

（もしかして……）

・・・案の定、朝菜はベッドの上で寝息をたてていた。
他のスイマに先を越されてしまったのだ。

これでトイロは仕事ができない。そして、溜も。

ムマはパートナーのスイマが仕事をした相手でないと、仕事ができないのだ。

「!……」

と、朝菜の枕元に紙切れが置いておることに気づいた。

トイロは、その紙切れを手に取ると、自分の目の前まで持ってきた。
トイロは、暗闇の中で目を凝らして、そこに書いてある文字を見た。

『

オ前タチノ

思ドウリ

二八

サセナイ

』

(・・・これって・・・)

この紙切れは、間違いなくトイロたちの仕事の邪魔をしている人物がいるということを示している。

トイロは、心臓の鼓動が速くなるのを感じた。

このスイマも、朝菜が“いい夢”を持っていることを知っているのだろうか。

(溜に知らせなくちゃ・・・)

第1話(2)

朝菜は目を覚ました。

部屋の中は薄暗い。

朝菜は、枕もとに置いてある時計に手を伸ばした。

・・・布団からだした手が寒い。今日はとても冷え込んでいる。

朝菜は、その時計を顔の前まで持ってきた。

6時32分。

(起きなくちゃ・・・)

今日はよく眠れた気がする。変な夢もみなかった。

昨日、結局は徹夜をしてゲームをやってしまったせいだろうか。

朝菜は、まだベッドの中でゴロゴロしていたという欲求をなんとか抑えて、ベッドから体を起こした。

朝菜が一通りの用を済ませて、居間に入ると、翼が席について朝食をとっていた。

「おはー。朝菜」

「・・・おはよう」

翼は、いつものように朝からテンションが高い。

翼は朝菜と違い、朝が弱いということはないようだ。

明はすでに仕事に出かけてしまっていて、家にはいない。

朝菜は、翼の前に置いてあるビニール袋に手を伸ばした。

その中には、買いだめされたパンが何個か入っている。

平野家の朝食はパン。

・・・このことは、だいぶ前から決まっていることだった。

朝菜はその中の「焼きそばパン」を手にとって、翼の隣の席に腰をおろした。

「あ！俺も、焼きそばパンだった！やっぱり兄弟だな」

「・・・」

朝菜は黙って、翼のほうを見た。

翼は既にパンを食べ終えていたが、翼の前には焼きそばパンのパッケージのはいった袋がある。

「そっか」

朝菜は素気なくそう言うと、自分の手に持っている焼きそばパンに目移す。

「なんだよ。つまらないな。まっ、朝だし、朝菜だし仕方ないか」

「・・・は」

朝菜は（心の中で）ため息をついた。

（・・・朝からテンション高すぎ・・・）

翼は、カップに入っている暖かそうな飲み物（多分、ココアだ）をグイッと飲み干すと、席を立った。

「じゃ、俺は補習あるから先に、学校行くな。

ちゃんと鍵、かけておけよ」

「うん」

翼はその後、慌ただしく居間を後にした。

朝菜はコートを着て、マフラーを巻いて、手袋をはめると自転車にまたがった。

12月の朝はとても冷える。それに加えて、自転車を走らせているときの頬に当たる風は、冷たいと言うより痛い。

それでも、朝菜の家から学校までそう遠くないということが唯一の助けだった。

朝菜は自転車で校門を通過すると、そのまま駐輪場へ向かった。
チャイムが鳴るギリギリのこともあり、駐輪場には多くの自転車が
とめてある。

朝菜はその隙間に器用に自転車をとめると、バッグを自転車のかご
から取り出した。

そして、急いで、人気のない駐輪場を後にすると、昇降口に向かう
生徒の集団に加わった。

（・・・今日もあの人と会わないといけないのか・・・）

もう、関わりたくないと思っても同じ高校、同じクラスといったら
関わらずに済むはずがない。

朝菜はローファーをげた箱に入れると、上履きに履き替えた。

「おはよ。朝菜」

「おは・・・」

朝菜はそこで言葉を詰まらせた。

朝菜の目の前に立っていた人物は、今、まさに登校しました、とい
う格好をした西園寺 瑠だった。

瑠は、親しみやすそうな笑みを浮かべている。

「・・・」

朝菜はこの場を誤魔化すため、微笑んだ。そして、瑠と目が合わな
いようにして、彼の横を通り過ぎる。

朝菜は早足で教室に向かった。

チャイムが鳴る前に、教室に入りたいという理由と、瑠から逃げた
いという理由があるからだ。

朝菜は、教室の前の廊下に入ったところで歩調を緩めた。

（・・・悪いことしたかも・・・）

驚いたからと言って、ろくに挨拶もしないでここまで逃げてきてし
まった。

朝菜は浅くため息をついた。

・・・だからと言って、瑠と普通の人と同じように会話することは、朝菜にとって難しいことだ。

朝菜が瑠のことを全く知らないのに対し、瑠は朝菜のことを、全て見透かしているように感じる。

あくまでも、そういう感じがするだけなのだが。どうも、そのような雰囲気が朝菜にとって嫌だった。

その雰囲気は直接本人に聞けば（恐らく）解消するはずだ。

しかし、その勇気が朝菜にはまだない。

朝菜は教室のドアの前で、現在の瑠の位置を確認するため、後ろを振り返った。

「！！」

朝菜は悲鳴をあげそうになった。

瑠は朝菜から、3メートルぐらいしか離れていない位置に立っていた。

「・・・何で避けるの？」

瑠は、昇降口で見た時より明らかに機嫌が悪そうだ。

「・・・ごめん」

朝菜は目を伏せて、正直に言った。

「気になってることがあるんだろ？聞かないの？」

朝菜はどきりとした。今が聞くのに、最初で最後のチャンスかもしれない。

「・・・」

朝菜はドアの前から離れて、瑠の前に立った。

ドアの前だと、人が出入りするのに邪魔になる。重要なことを聞き逃してしまうかもしれない。

「西園寺君は・・・普通の人じゃないよね・・・？」

朝菜は瑠の顔を見た。

瑠の表情に特別な変化は見られない。

「もちろん。普通ではないね。・・・見ただろ。あの時」

「・・・」

朝菜の頭に、銀色の髪と銀の瞳の瑠が浮かんだ。

「……もちろん普通ではない。」

確かめたいことは確認できた。

朝菜が次の質問をしようと、口を開いたとき、瑠が突然言った。

「朝菜さあ。俺が呼び捨てで呼んでんだから、朝菜も俺のこと呼び捨てで呼んでよ」

「……」

朝菜は思わぬ言葉に顔をしかめる。

（そんなこと……自分の勝手じゃん）

「……——瑠は何者なの？」

瑠はにやりと笑った。

待ってましたと言わんばかりの顔だ。

沈黙……

教室に入っていく人たちに、ちらちら見られている感じがする。

確かに、何も知らない人たちからみれば、珍しい二人の2ショットだ。

そして、瑠が口を開いた。

「それを言っちゃったら、つまらなくなっちゃうんだよな」
「!!」

朝菜は眉を寄せた。

（なにそれ……）

勇気を振り絞って聞いたのに、返ってきたのはふざけているとしか思えない回答だ。

朝菜はそう思いながらも、続いて口を開いた。

「……なんでっ……私だけに……そのっ……あの姿を見せたの？」

「俺にとって朝菜が“大切な存在”だからだよ」

「……」

朝菜はそれ以上、口を開くことができなかった。

（……それはどういう意味で……？）

瑠に質問をすればするほど、謎が深まっていく気がした。

瑠は、朝菜が期待しているような答えを口にするつもりはないようだ。

「全てはそのうち分かるよ」

「!？」

瑠はその言葉を呟くように言うと、教室の中に姿を消してしまった。

(・・・そのうちって・・・)

朝菜がその場で固まっていると、突然、瑠が教室のドアから顔だけをだした。

「チャイム鳴る前に、教室に入らないと遅刻になっちゃうと思うけど」

瑠は早口でそう言うと、すぐさま顔を引っ込めた。

「・・・・・・・・」

担任の先生は、チャイムとほぼ同時に教室に入ってきた。

朝菜もチャイムとほぼ同時に席に着いた。

朝菜はSHRの間中、机に額をつけていた。

担任の話は、耳から耳へと抜けていく・・・。

朝菜は落ち込んでいた。

結局、瑠のことについては、何も分からなかった。

逆に、分らないことが多くなった気がする。

(でも・・・思ったよりは、普通の人間らしいかも)

今朝の会話のお陰で、少しは話しやすくなった・・・かもしれない。何も分からなかったが、収穫があったとすれば、そのことぐらいだった。

周りが騒がしくなった。SHRが終わったんだろう。

今日の1時限目は・・・

「朝菜！更衣室いこ」

「・・・・・・・・うん」

朝菜は、頭を机から離しながら、遥香に返事を返した。

「あー、朝から体育かぁ・・・」

席から立ち上がった朝菜の声は、明らかにだるそうだ。

「そうそう・・・。」

朝菜っ速く！早く行かないと、いい場所なくなっちゃうよ！」

遥香は朝菜のことをせかすように、そう言う。

「うん・・・」

朝菜は、廊下にある自分のロッカーから、ジャージを引っ張りだすと、遥香と共に更衣室へ向かった。

「ねえ。平野ちゃん」

「！」

ジャージに着替え中、朝菜の左隣で着替えていた同じクラスの内野

千絵が、朝菜に声をかけた（右隣は遥香だ）。

千絵は、遥香ほどは仲良くないが、クラスの中では仲のいい友だちにはいる。

「今朝、西園寺君と何話してたの？」

「・・・え・・・」

朝菜は言葉に詰まった。

どうやら千絵は、溜のことが気になっているらしい。彼女の目の輝きを見ればわかる。

「・・・はは。どうでもいいことだよ・・・」

「えー！どうでもいい事なら教えてよー！」

「そういえば朝菜って、西園寺君と仲よさげ？だよね」

遥香が、自然に会話に加わってきた。

しかも溜のことで・・・。

「確かに！この前の家庭科のときも、ほぼ同時に教室に入ってきたし・・・。それに、今朝も！」

千絵はとても楽しそうに、朝菜越しの遥香の発言に乗った。

（・・・このままじゃヤバイ・・・）

と朝菜は思った。

「今朝は・・・りゅ・・・西園寺君が、ただ私に絡んできただけで・・・私は話したくなかったんだけど・・・」

とその時、授業開始のチャイムが鳴った。

「やばっ！」

千絵は、すぐさまジャージの上着を着ると、「おいていかれた」と叫びながら、更衣室を後にする。

「・・・」

朝菜は、内心で安堵のため息をついた。

とっさに嘘をつくことは、どうも苦手だ。

「はやく！朝菜！」

「！」

声のほうを見ると、更衣室の入り口に遥香の姿があった。

遥香には焦りの表情が浮かんでいる。

「あーごめん！」

朝菜は自分の格好が目に入った瞬間、愕然とした。

・・・制服のリボンを外しただけだった。

「先に行ってるから！」

遥香はそう言い残すと、更衣室に朝菜一人を残して、そこから姿を消した。

「遅いぞ！平野！」

体育館に入るなり、体育担当の先生にそう怒鳴られた。

「すみません・・・」

朝菜は先生に軽く頭を下げると、準備体操をしているクラスメイトたちの列に加わる。

（よかった・・・あんまり怒られなくて）

体育の先生は、時間にうるさい。必ず、始まりのチャイムと同時に、

準備体操の音楽をかける。

みんなの前で、ガミガミ怒られなくて本当によかった。

朝菜は体操をしながら、瑠の方に目を向けた。

出席番号順に並んでいるため、見つけやすい。

（瑠・・・体操着とかどうしてんだろ・・・転校してきたばっかだし・・・）

しかし、そこには瑠の姿はなかった。

瑠がいるはずのスペースだけが、ポツカリとあいている。

（・・・朝はいたのに・・・）

具合が悪くなって、保健室にでも行ったのだろうか。・・・いや、もしかしたらサボりかもしれない。

（まあ・・・見ため的には、体弱そうだけど・・・）

「・・・」

朝菜は自分に呆れた。

関わりたくないと思いつつも、自分は瑠のことを知りたがっている。

瑠のことを気にせずにはいられない自分が、既に出来上がってしまったのだ。

時は少し遡り・・・。

翼は一階の廊下の端にある、空き教室にいた。

もちろん一人で。

廊下は、人の通る気配と、人の話し声で騒がしい。

翼の計画だと、この廊下を朝菜のクラスが通るはずだ（体育館に行くため）。

そして、そのなかに西園寺　瑠がいる。

計画はこうだ。

西園寺が、この教室の前を通る時をねらって声をかける。そして、教室の中に引き込む。そこで、朝菜のことを狙わないよう、話し合

いで説得させる。

（よしっ……。完璧だ）

この教室は空き教室なので、誰も入って来ることはない。

翼は、そーっとドアを数センチ開いて、そこから廊下の様子を伺った。

ジャージ姿の一年生が、次から次へと通り過ぎる。

その中に西園寺が……

（いた！！）

翼は、ドアを素早く開いた。

「西園寺！！」

西園寺は、驚いたように目を大きく見開いて立ち止まり、翼の顔を見た。

西園寺以外の人にも見られているような気がするが……気にしない。

「誰？」

西園寺は眉間にしわを寄せ、ボソリと言った。

「いいからこっち来い！」

翼は西園寺の腕を掴むと、教室の中に無理やり引き込んだ。そして、教室のドアをピシャリと素早く閉めた。

「何の用ですか？平野センパイ」

「！！」

翼は、西園寺に名前を呼ばれたことに驚いた。

西園寺は、そんな翼の姿を見てニヤリと笑うと言った。

「朝菜のお兄さんでしょう？顔、似てるから」

「……そうだよ！」

翼は、西園寺に既に先を行かれている気がしてイライラした。……まだ始まってもないのに。

「俺、次、体育なんで行ってもいいですか？」

「朝菜には絶対に手をだすなよ！」

翼は怖く聞こえるように、出来るだけ声を低くしてそう言った。

西園寺は、顔色を曇らせる。

「大丈夫ですよ。俺、朝菜の彼氏じゃありませんから」

「違う!!」

翼は怒鳴った。

西園寺は明らかに、今の状況を楽しんでいるように見える。

「お前の仕事のターゲットを、朝菜にするなって言ってるんだよ!」

「.....へー」

と、その時、西園寺の瞳の色が一瞬だけ銀色に染まった。

翼はドキリとする。

西園寺のその瞳は、間違いなく“ムマ”のものだ。

「何か見覚えあると思ったら.....センチパイ、あの時のスイマだったんだ」

「.....」

「あの人の夢はとてもよかったよ。でも、朝菜のほうが、もつといいかもね」

「ふざけんなよ! 今度こそは、お前の思い通りにはさせないからな!」

「.....」

西園寺は、翼の言葉にはほとんど表情を変えず、ジャージのポケットから何かとりだした。そして、それを翼に突き出してきた。

「!」

それは、翼が朝菜の“気”をとったときに、彼女の枕元に置いた紙切れだった。

「これはセンチパイに返します」

西園寺はその紙切れを、翼に押し付けてくる。

翼はそれを乱暴に受け取った。

「邪魔はさせないから」

西園寺は、刺すような目つきで翼を見ると、教室の扉に手をかけた。

「それと.....」

「!」

西園寺は肩越しに振り返って、翼を見る。

「早く契約した方がいいと思うけど。」

契約しないまま、人間の気をとってると、分かっていると思いますが・
・・・死にますよ。平野センパイ」

西園寺はそれだけ言い残すと、教室から姿を消した。

「・・・・・」

（畜生・・）

翼は強く唇を噛みしめた。

今の翼には西園寺が去った後の扉を、睨んでいることしかできなかった。

第1話(3)

「朝菜ー。今日の放課後、暇？」

遥香がバドミントンのネット越しに、朝菜に話しかけてきた。遥香はそれと同時に、ハネを朝菜のほうへ飛ばす。

ハネは、大きな半円を描いてネットの上を通り過ぎた。

「あ・・・暇だよ」

朝菜はそう言うのと同時に、遥香へハネを打ち返した。

「悪いんだけどさ、買いたいCDがあるの！付き合って？」

「うん。OK」

朝菜は即答した。

恐らく、遥香の言っている店は近くの本屋だ。

その本屋は、CDはもちろん売ってるし、ビデオレンタルやCDレンタルもやっている。そして、漫画も売っている。

朝菜は、遥香の付き添いついでに、漫画コーナーも覗いてみようと思った。もしかしたら、面白い漫画が見つかるかもしれない。

「あ」

打ち返そうとしたハネが、鈍い音をたて、ラケットの端に当たった。そのハネは、なすすべなくネットに引っ掛かり、床に落ちる。

「ごめんっ」

朝菜がそう言うと、ネット越しの遥香は苦笑していた。

朝菜は早足で落ちているハネのところまで行くと、それを拾うためしゃがみ込む。

「あれ？西園寺君、今来たみたい！」

「！」

朝菜は立ち上がると、体育館の入口に目をやった。

丁度、瑠が体育館に入ろうとしている姿が目に入った。

（ほんとだ・・・）

朝菜は瑠が体育館に来ないわけは、さぼりの可能性が高いと思っていたので、そのことが意外に感じられた。

瑠が、体育館に入るや否や、先生は瑠に歩み寄った。そして、二人は立ち止って、何か話をしているようだった。

もちろん、その会話の内容は、ここからでは聞き取れない。

おそらく、遅れた理由を聞かれているのだろう。

（・・・どうでもいいや）

「遥香！。続きやろう？」

朝菜はハネを拾い上げた。

「そうだね」

朝菜は、適度な距離まで後に下がると、勢いよくハネをうつ。

そして朝菜は気づかなかった。

瑠が朝菜のことを見て、不気味笑みを浮かべていることに。

そして放課後・・・

朝菜は、遥香と一緒に昇降口からでた。

今日は、7時限目までであったので、今の時刻は約5時。

そして、季節は冬なので、日の入りは早く、もう辺りは薄暗くなっていた。

「さっさと行って、ちゃちゃっと買うから！」

遥香はそう言っていると、歩調を速めた。

「うんー」

朝菜も遥香に追いつくため、歩調を速める。

「あー！！自転車で来たんだ。今日」

朝菜は重大なことを思い出し、立ち止まった。

遥香は、振り返ると、曖昧に微笑んで言う。

「んーそれじゃー自転車とってきちゃえば？待ってるからー」
「うん。分かった」

朝菜はその言葉を残して、早足で駐輪場へ向かった。

朝菜は、遥香のところまで来ると、自転車からおりた。

遥香は電車通学なので、自転車には乗らないからだ。

「ごめん、遥香」

「大丈夫だよ！・・・それじゃー行くか！」

「うん」

朝菜はそのまま自転車をおしながら、遥香の隣を歩く。

「朝菜！」

「！」

丁度、校門を出たところで、誰かに呼びとめられた。
振り返るとそこに、瑠がいた。

「朝菜、今日、暇？」

「・・・あー・・・」

朝菜は、突然の瑠の登場に、内心かなり焦っていた。

今は、はっきり言うと、瑠と会話をしたくない。

一人の時ならまだいいが、自分の隣には遥香がいるし、丁度、下校
時の校門に自分はある。もちろん、人の数は、多い。

もし、この光景を千絵やクラスの人に見られたら、また嫌なことを
言われるかもしれない。

（それも、瑠は私のこと呼びつけて呼ぶし・・・）

朝菜は、遥香の顔を盗み見た。

遥香の表情には、明らかに驚きが混じっているように見える。

「ねえ。今日、暇なの？」

「あっ・・・今日は、遥香と買い物に行くんだけど・・・」

朝菜は、同じ質問を繰り返す瑠の言葉に、ドギマギしながら答えた。
た。

「西園寺君、別に私は大丈夫だよ。明日でも行けるし。だから、朝

菜は今日、暇だよ」

「え……」

陽気にそう言う遥香に、朝菜はショックを受けた。せっかく、溜の用事を断る口実があると思ったのに。

「ありがとう。神月さん」

溜は、満面の笑みで遥香にお礼を言った。

「どういたしまして！じゃね、朝菜！」

遥香はそう言うのと、可愛らしく手を振って朝菜に背を向ける。

「……じゃーね……」

朝菜は、遥香を呼びとめることもできずに、彼女の後ろ姿を見送った。

遥香が去ってから、溜はすぐに口を開いた。

「今日、俺の家に遊びに来ない？」

「えっ……」

朝菜は言葉を詰まらせる。

そんなこと、男子に言われたのは初めてだ。

「……でも、何して遊ぶの？」

もう五時だし……。あまり時間ない感じがするけど……」

そのことが理由で、遊ぶなくてすむかもしれないと思いながら、朝菜は言った。

（うちら友だちって感じの関係じゃないし……遊んだとしても、微妙なあたりになりそう……）

それなら、遊ぶのはごめんだと思った。

「俺と一緒に遊んだら、俺の秘密が分かるかもよ？」

「！……」

朝菜は、溜の表情を伺った。彼は、口元に薄い笑いを浮かべている。何を考えているかは分からない。

「……」

（簡単には、教えてくれなそうだけど……）

「あっ、それと漫画貸してあげるよ。俺、たくさん持ってるから」

「!・・・」

(・・・やった)

悪い話ではないかもしれない、と朝菜は思った。
もしかしたら、瑠の秘密が分かるかもしれないし、漫画も貸してもらえる。

「ありがとう・・・。それじゃ、瑠の家行くから・・・」

「OK」

瑠は、先頭を切って歩き出した。

朝菜もそれに続く。

「どのくらいかかるの？」

朝菜は、瑠の後頭部を見ながら言った。

「あと少しだから」

瑠は肩越しに振り返って、そう言う。

「そうかー」

「・・・朝菜はどうして、俺の隣に並ばないの？そんなに俺のこと嫌い？」

瑠は立ち止まると、朝菜の方に振り向き、不機嫌な顔で言った。

「べっ別に嫌なわけじゃないよ。・・・だって、自転車あるし・・・並んだら歩きずらいかなって思ったんだよ・・・」

「・・・」

朝菜は、無理のある言い訳だと思いつつも、言わずにはいられなかった。

人を傷つけるのは、悪いことだと思うからだ。

瑠はやっぱり、不機嫌な顔で朝菜を見ている。

「ちょっと貸して」

瑠はそう言いながら、自転車のハンドルに手を伸ばしてきた。

「!・・・」

朝菜はすぐさま手を引っ込めて、瑠にハンドルを譲る。

そして瑠は、何のためらいもなく自転車にまたがった。

「!?!」

「朝菜、後ろに乗れば？これなら歩きずらくないし、速く家に着けるし、一石二鳥だろ」

瑠はそう言って、学生鞆を前かごに入れる。

「……」

（それはそうなんだけど……）

確かに、歩きずらいと言ったのは確かに朝菜だ。それに、ここで断れば、また「嫌いなのか？」などと言われるのは目に見えている。

幸い、周りには学校の生徒はいないようだ。

「……それじゃ、お願いしますっ」

朝菜はぎこちなく、自転車の荷台にまたがる。

「つかまっていれば？落ちるよ」

「……あっ……」

朝菜は戸惑いながらも、瑠の腰辺りに腕をまわした。

そして、自転車はゆっくりと走り出す。

もう辺りはほぼ暗くなっており、車道を走る車のライトも燈っていた。

朝菜は、次々と後に流れていく景色を見ながら思った。

……瑠は少なくとも悪い人ではないと。

瑠の家に到着した。

瑠の家は、アパートだった。

瑠は出入り口付近にある小さな駐輪場に、自転車をとめると朝菜のほうに振り返った。

「俺についてきて」

瑠はそう言くと、朝菜に背を向けて歩き出す。

朝菜もそれに従った。

瑠は、アパートの一階の一番奥にあるドアの前まで来ると、歩みを止めた。そして、バッグから鍵らしきものを取り出すと、慣れた手つきで鍵を開ける。

そして、瑠はドアを開けると中に入って行った。

朝菜も小声で「失礼します」と言うと、瑠に続いて部屋の中に足を踏み入れる。

瑠の部屋は、とても片付いているようだった。

壁際にはテレビ、そしてその向かい側には小さなテーブルをはさんで、青色のソファが置いてある。

そのテレビの横にある本棚の中には、漫画らしき本がぎっちりと並べて入っていた。

「そこらへん座ってて」

瑠はそう言うと、リモコンで「ピピッ」と暖房のスイッチを入れる。「分かった」

朝菜はしょっていたリュックを下ろすと、素直にソファに腰をおろした。

一方、瑠は、部屋のカーテンをサッと閉めると、キッチンに向かう。(そうだった・・・)

朝菜は、テレビの上に置いてあるデジタル時計を見た。

P M 5:54

普通なら、今頃は家に帰ってる時間だった。

朝菜はリュックの前ポケットを開け、そこから携帯電話を取り出した。

(一応、家に連絡しておくか……。お父さんは今、仕事中心かもしれないから・・・お兄ちゃんでもいいや)

朝菜は、慣れた指使いで、携帯を操作する。

そして、電話帳の「兄」の覧を開くと、本文に文字を打った。

『

友だちの家に寄ってるから、遅くなるよ(＜|＞)

でもお父さんが帰るまでには、多分帰れると思う！

』

朝菜は、瑠の名前を出す気なんて、さらさらなかった。

男子の家にいくことは、朝菜にとって初めてだし、翼にとってもそのことを聞くことは初めてになるので、翼がどんな反応をするか目に見えている。

間違いない、からかわれるのがおちだ。

朝菜は、文が打ち終わると、「確定」ボタンをおした。

次に、「送信」ボタンを押そうとしたその時・・・朝菜の手から、携帯を誰かが引き抜いた。

「！」

見上げると、瑠が朝菜の携帯を手を持っていた。

「ちよつと・・・」

瑠は、無表情の顔で携帯のディスプレイを凝視している。

朝菜は瑠から携帯を取り返すべく、慌ててそこに手を伸ばした。

・・・兄に送るメールを見られるなんて、恥ずかしくてたまらない。瑠はくると朝菜に背を向けて、彼女の手から意図も簡単に逃れた。

「あっ・・・」

朝菜の目に映ったのは、本文の内容を取り消した後のディスプレイだった。

瑠は、朝菜の折り畳み式の携帯を閉じると、朝菜の方に向き直る。

「大丈夫だよ。家に連絡しなくても。すぐに帰れるから。・・・そんなに、朝菜のお兄さんは心配症なの？」

瑠は低い声でそう言うと、朝菜に携帯を手渡した。

「・・・んー・・・まあ・・・」

朝菜は、瑠の思いがけない行動に驚いた。

しかも何で怒ってる？ んだろう。

(・・・っていうか、私にお兄ちゃんがいること知ってたんだ)

瑠は「温かい飲み物作ってあげるから待ってて」と言うと、またキッチンに戻って行った。

第1話(4)

瑠は、適量の水をやかんに注ぐとそれを火にかけた。
数分後：

「ピ・・・」

やかんが微かに音をたてる。

瑠は、大きな音が響く前に素早く火を止めた。そして、二つのマグカップにカフェオレの粉をいれる。次に、やかんのお湯を注げば、カフェオレはほぼ完成だ。

「・・・よし」

瑠はスプーンでそれをかき混ぜた後、そう呟いた。

・・・瑠がその言葉を発したのは、カフェオレが完成したからではない。

本当の理由は・・・

(これでやっと仕事ができる・・・)

「トイロ・・・鎌は使えるよな。そろそろやるぞ」

瑠は前を見たまま、後ろに立っているトイロに出来るだけ小声でそう言った。

「・・・うん」

トイロの声が聞こえた次の瞬間に、彼女の気配は消えた。

瑠はゆっくりと後に振り返る。

すでに、ソファに座っている朝菜の目の前に、トイロの姿があった。朝菜はトイロのことに気づく様子もなく(当たり前だが)、暇を潰

すため自分の指をいじくっている。

その時、トイロの手の中に白く輝く大きな鎌が現れた。

（トイロっ・・・やれ！）

トイロは、瑠のことを一瞥し頷くと、鎌を大きく振り上げた。そして、大きく朝菜の体を切り裂いた。

それと同時に、朝菜の体からたくさん光の粒があふれ出す。

（・・・よしっ！）

その光の粒は、次々とトイロの体の中へと消えていく。

トイロは満足げに微笑んだ。

「朝菜ちゃんの“気”ってすごく美味しいんだね」

トイロは朝菜の隣に腰を下ろしてそう言ったが、彼女からは何の反応もない。

朝菜の手の動きは既に止まっており、彼女のまぶたはゆっくりと閉じていった。

「・・・また朝菜ちゃんの気もらっていいかなあ」

トイロはそう呟く。

「トイロ。また、なんて無いかもしれないぞ」

「！・・・」

瑠は、トイロの隣で小さな寝息をたてている朝菜にゆっくりと近づいた。そして、ソファの背もたれに手を置く。

「俺が我慢できずに・・・朝菜の記憶をすべて夢に変えたら・・・この朝菜は“朝菜”じゃなくなるからな・・・」

瑠は朝菜を見下ろすと、口元に不気味な笑みを浮かべた。

♪ピロピロピン♪ピロロ♪

とその時、朝菜の携帯が鳴った。

朝菜のバッグの中から聞こえる。

「トイロ。もっと朝菜の気をとるんだ」

瑠はトイロに早口でそう言うと、朝菜のバッグを何の躊躇いもなく

開けた。

トイレは立ち上がると、手に持っていた鎌で朝菜の体を切り裂く。そこからまた、光の粒が溢れだした。

朝菜は「……んー……」と声を漏らしただけで、起きるということとはしなかった。

瑠は、朝菜のバッグから鳴りっぱなしの携帯を取り出すと、それをひらく。

「!……」

ディスプレイには《着信中—— 兄 ——》という文字が映っていた。

「——……」

瑠はそれを見ると、鼻で笑い、携帯の着信を切る。

「朝菜の夢は俺がもらいますよ……」

瑠はそう呟くと、携帯を朝菜のバッグに戻した。

「何ででないんだよ……」

翼は眉間にしわを寄せ、携帯を閉じる。

いつもならとつくに帰ってる時間なのに、朝菜はまだ学校から帰っていないかった。

また本屋にでも寄っているのだろうか。

翼は、あいつのこともあり、朝菜に出来るだけ早く帰ってきてほしかった。

それに、明も既に家に帰ってきている（今日は、早めに仕事が終わったらしい）。

翼は、携帯をポーンとベッドの上に投げると、仰向けでベッドに倒れる。

もう外は夜に近づき始めている。

空の大半は闇色に染まり、翼の部屋も薄暗かった。

《早く契約しないと死にますよ。平野センパイ》

「!・・・」

ふと、西園寺の言葉が頭に浮かんた。

・・・そう。俺たち“スイマ”は人間の“気”を生きる源としている。

しかし、人間の気をとることは決してよいことではない。むしろ“悪いこと”だ。・・・たえそのことが、生きる源だとしても。

人間の気をとることは、その人間の行動を制限することになってしまう。つまり一時的にでも、その人間の行動を操れるということだ。しかし“ムマ”と契約することで、それは許される。

ムマは、気をとられた人間の中にしか侵入できない。

そして、ムマの力は人間にとっては必要不可欠な力だ。・・・ムマが仕事をしないと人間は、破れる。

つまり、スイマはムマに協力することによって、その行動が許されている、ということだ。

(でも・・・俺は・・・)

そう、自分はまだ、パートナーのムマを見つけていない。

いや・・・見つけたくない。と言うほうが、今の自分には合っているかもしれない。

自分は完全なスイマになることを恐れている。

もし、契約したムマが西園寺みたいなやつだったらどうする？

一回契約すれば、そのムマが死ぬまでその契約は解くことができない。つまり、そのムマが好き勝手やってまた、大切な誰かを失うようなことになっても、そのムマに協力し続けなければならないのだ。それは裏切りになってしまいう気がする。

記憶を失った母への、そしてそのことによって苦しんでいる父への。朝菜はもちろん、そのことを知らない。いや、知ってはいけない。こっちの世界のことを知ってしまったら朝菜は“ある運命”から逃げられなくなってしまう。・・・何も知らないほうが幸せだ。

翼は大きなため息をつくど、ゆっくりとベッドから体を起こした。そして、洋服のそでを捲くる。

その腕にはツタに似た模様が、肩から手首にかけて刻み込まれている。

これはスイマだという証。

逃げられない証。

そして・・・自分にとってこの印は、呪いの印でしかなかった。

「翼。朝菜はまだ帰ってこないのか？」

「！」

驚いて声の方を見ると、部屋の入り口の前に明の姿があった。

「・・・ああ。本屋にでも寄ってるんじゃないの？」

「・・・そうか。夕食の用意ができたんだが・・・」

「・・・」

少しの間あと、また明が重々しく口を開いた。

「翼・・・。夜はムマとスイマが支配する時間だ。もうすぐ夜はやってくる。・・・本当に朝菜は無事なのか・・・？」

「！・・・・・・」

（もしかしたら・・・！！）

翼の心臓の鼓動が一気に早くなる。そして、最悪な考えが頭を過ぎった。

・・・朝菜は西園寺と同じクラスだ。

西園寺は朝菜の夢を狙っている。

もし西園寺が「漫画貸すから」などと言えば、漫画好きの朝菜は「やったー」などと言って、何の疑いもなく西園寺の家にも行ってしまっただろう。

そう。翼たちの手の届きにくいところへ朝菜は誘い込まれてしまう。

翼は勢い良くベッドから立ち上がり、歪んだ瞳で明を見た。

「朝菜が危ないかもしれない・・・」

「さてと・・・」

瑠がそう呟くのと同時に、彼の髪がみるみるうちに銀色に染まり、

そしてその瞳も銀に染まっていた。

瑠は“ムマ”の姿になったのだ。

「じゃ・・・行ってくるからな」

瑠は後ろに立っているトイレにそう言うと、ソファで眠っている朝菜に視線を落とす。

「・・・うん」

「朝菜が起きそうになったら・・・頼んだぞ」

「・・・分かった」

トイレの声とほぼ同時に、瑠はその姿をかき消した。

朝菜は、長い列の一番後ろに並んでいた。

周りには何もなく、ただ白い空間が支配している。

朝菜の前に並んでいる人々は、大人や子供、いろいろな人がいるようだ。

「・・・?」

朝菜はおかしな点に気づいた。

この場所にはあるものがなかった。それは・・・音だ。

こんなに多くの人がいるのに、話し声さえ少しも聞こえない。

まるで、この白い空間が全ての音を吸収してしまったかのようだ。

(・・・皆、何のために並んでるんだろ)

朝菜は“音がない”ということより、そっちのほうが気がかりだった。

朝菜は思い切って、前の人の背中に声をかける。

(あのっ・・・)

しかし、声がだせない。・・・いや。口が開かない。というか・・・。

(口ってどうやったら開くんだったっ・・・?)

朝菜が口を開こうとしても、その口は軽く閉じられたままだ。

・・・まるでこれでは“口を開く意志”がないみたいではないか。

「・・・」

朝菜は口を動かすために、わざと笑ってみようと試みた。

(何これ・・・)

口が動かない。動かし方が分からない。

朝菜は恐ろしくなった。

このままずっと、口が開かなかつたらどうしよう。

朝菜はどうにかして、口の動かし方を思い出そうとした。

・・・やっぱり動かない。

どうしようもないので、朝菜は他の人々の様子をうかがい見ることにした。

・・・人々に怪しまれないように、列に沿ってゆっくりと歩きながら、後ろにそっと振り返る。

「!!・・・」

朝菜はその光景に凍りついた。

列に並んでる人々は皆、同じ表情を浮かべていた。・・・すべての人々が無表情だった。

そして朝菜は気づいてしまった。自分も無表情だったことに。

いくら驚いても、自分の表情が動いた感じがしない。

・・・まるでこれでは“全く驚いてない”ようにしか見えないではないか。

人々の表情がないと、余計に分からない。・・・この列の先に何かあるのか。

「!!」

朝菜は隣に人が立っていることに気づき、驚いてその人の顔を見た

(相手から見たら、まったく驚いていないように見えるだろう)。

彼は美しい銀の髪を持っており、そしてその瞳も美しい銀色だ。しかも、彼の右腕にはツタの模様のような印が刻み込まれている。

そして、彼は間違いなく・・・瑠だった。

瑠は朝菜のことを見て、微笑む。

(・・・瑠?)

そして、瑠は手に持っていたあるものを朝菜に差し出した。それは・
・レバーだった。

四角いコンクリートに、レバーだけがついている。

(・・・何でレバー・・・?)

レバーと言え、機械などを動かす時に、押したり引いたりするものだ。

こんなコンクリートにレバーだけがついたものが、何の役に立つというのだろう。

「・・・」

朝菜は疑いの眼差しで、瑠を見た。

瑠は相変わらず微笑んでおり、何を考えているかは分らない。

「はい。これ」

瑠はその怪しげなレバーを、手に取るよう朝菜に促す。

「・・・」

朝菜は促されるまま、そのレバーを手にとった。

そのレバーは、ずっしりと重かった。

「それ、引いてみてよ」

「・・・」

朝菜はほとんど迷うことなく、レバーの取っ手に手をかける。

このレバーを引いたらどうなるんだろう……。好奇心が止まらなかった。それに、このレバーはただのレバーではない。そんな感じがした。

(きっと・・・何かが起こる・・・!)

朝菜はレバーの取っ手を強く握りしめると、思い切り自分の方へ引いた。

ガシャン!!

「!!」

つぎの瞬間、周りの景色が一変した。

朝菜は暗闇の中、一人で立っていた。

いや、正確に言えば、ただの暗闇ではない。朝菜の頭上に広がるの

は夜空だ。しかし、月や星はでていなかった。

そして、朝菜の目の前には、大きな背の高い建物がそびえ立っていた。

それは全身、暗い色の木で造られており、何となく全体の作りは学校に似ていた。

その建物の次に朝菜の目にとまったのは、森だ。その建物と、朝菜を取り囲むようにして、夜の色で染められたその森はそこにあった。

「何・・・ここ？」

朝菜は辺りをぐるりと見渡しながら呟いた。

どうやら声はでるらしい。

そして、顔の感覚も普通に戻っていた。しかし、朝菜は怖かった。ここにいることが。

電気の燈っていない建物。そして真っ暗な森。ここには光がなかった。

しかし、光がないはずなのに、朝菜はそれを認識することができる。さっきの空間といい、ここの空間といい、何かがいつもと違う。

ここは・・・きっと現実ではない。

「朝菜。gameの始まりだよ」

「!!」

気が付くと、建物の入口にある柱に寄り掛かっている瑠が、こちらを見ていた。

朝菜は瑠の銀の髪と瞳を見て、一瞬ドキリとする。

「ここ・・・どこなの？それに・・・瑠は一体・・・」

「話をしている暇はないよ。朝菜。」

もうゲームは始まったんだ。楽しい楽しいゲームがね・・・」

「は・・・!？」

朝菜は顔をしかめる。

瑠は不気味な笑みを浮かべて、朝菜に近づいてきた。

「これは俺と朝菜のゲームだよ。」

朝菜はさっきと同じレバーを“ここ”で見つければいい。たったそ

れだけ。

でも、できるだけ早くね。早くしないと、俺が朝菜の大切なものを全部奪っちゃうから。

全てを奪われる前に、朝菜がそのレバーを見つけ、レバーの取っ手をもとに戻せば朝菜の勝ちだよ」

瑠は朝菜の前で歩みを止めた。

「じゃ・・・ゲームを始めようか」

瑠はその言葉を残して、瞬時に姿をかき消した。

「・・・消えちゃったし・・・」

朝菜は茫然と立ち尽くしてした。

（大切なものって・・・いったい何？）

命？家族？友だち？

朝菜には、大切なものが確かにある。

瑠は、朝菜の大切なものを本当に奪うつもりなのだろうか？

「・・・」

朝菜は、それが本当になってしまいう気がしてならなかった。

あの銀の瞳を歪ませて、不気味に笑う瑠の姿を見てしまったのだから。

・・・それなら早く、“レバー”を見つけるべきではないだろうか。しかしそれは、難しいことになりそうだ。

・・・なにしろ、この空間は不気味だ。

うつそうと茂る森。光のない空。そして・・・明かりが燈っていない木の建物。

（怖い・・・）

朝菜はその場で固まってしまった。

目の前にある建物の中へと続く入口を見るのでさえ、恐怖を覚える。木々の葉が風に揺られる。

真っ黒な木々たちが喋り出す。

ザワザワザワ・・・

「っ・・・」

朝菜は耳をふさぎたくなった。

まるで、多くの人間たちが囁いているみたいだ。

「これから怖くて恐ろしいことが待ってるよ」と。

（誰かつ・・・助けてっ・・・！）

「らーらー・・・らー・・・♪」

「!?!?」

（誰か・・・歌ってる・・・?）

朝菜は、鼓動が速くなるのを感じながら、その声に耳を澄ました。

「・・・らー・・・♪」

耳に届く、その微かな歌声は、建物の中から聞こえるようだ。

「中に誰がいるんだ・・・」

朝菜は、眩くようにそう言うのと、恐る恐るその扉の前まで歩み寄る。そして、ゆつくりとドアノブに手をかけた。

ギギー・・・

朝菜は丁寧にその扉を押した。

その木の扉は、古めかしい音を出しながら開いていく。

建物の中は、やっぱり暗かった。

まっすぐに続く暗い廊下と、その両側には幾つもの扉が並ぶ。そして、その扉は皆、きっちりと閉まっていた。

朝菜は、廊下の突き当たりに、階段があることに気づいた。まっすぐに続く階段。

しかし、ここからでは二階が見えなかった。

・・・やっぱり不気味だ。

「誰かいらないのー!?!?」

朝菜は怖さを紛らわすためにも、大声で叫んだ。

・・・さっきの歌声は、聞き間違いだったのだろうか。

「わ!?!?」

「!?!?!?!?」

突然、視界の下から女の子が顔をだした。

朝菜は声が出せないほど、驚いた。

「ははっ♪驚いた？」

「!・・・」

朝菜はその女の子のことを凝視していた。いや、正確には、彼女の髪を凝視していた。

彼女の耳の上で二つに結わえた髪は、自分と同じ金色だった。

この空間では、瑠の銀色以外、明るい色は見たことがなかったのに。

「ねえ。私の歌が聞こえたから、ここに入ってきたんだよね」

女の子は得意そうに、その瞳を見開いて微笑んだ。

「うん・・・」

朝菜は、戸惑い気味にそう言う。

女の子は朝菜の言葉に、ニツコリと笑った。そして、くるりと身を翻すと軽い足取りで、つき辺りの階段まで足を運ぶ。そして朝菜に振り返った。

離れた場所に立っている女の子の優しい声は、しっかりと朝菜まで届いた。

「楽しい楽しいゲームが始まった。

でも心配御無用。

朝菜は特別。

私も特別。

だって、金の髪と金の瞳の持ち主。

この空間は私たちのもの♪」

「・・・は？」

女の子は歌うようにそう言うのと、その階段を素早く駆け上がった。

そして、彼女の姿はあっという間に見えなくなってしまった。

女の子の言葉は謎めいていた。自分は、金の瞳なんて持っていないのに。

しかし、これだけは分かった。

“心配御無用”

朝菜はゲームに勝つことができる。・・・そういう意味なのだろうか。

（・・・何であの子・・・私の名前、知ってるんだろ・・・）

しかし朝菜はそのことにかんして、あまり気にしないことにした。
だったここは、現実ではない。

・・・現実界の常識で、考えてはいけないんだ。

第1話(5)

翼はかたっぱしから朝菜のクラスの人々に電話をかけた(電話番号は、クラスの連絡網のプリントを見た)。

そして見つけた。瑠の住んでいるアパートを。

瑠の家はここからそう遠くない、市内の三丁目にあることが分かった。

「早くしねえーと！」

翼は受話器をガチャリとともに戻すと、明のほうに振り返り言った。明は、翼と違い、落ち着き払った表情で翼を見据えている。

「落ち着きなさい、翼。」

焦りすぎると、思わぬ失敗を招くぞ」

「――・・・」

翼はこんな状況で、落ち着いていられるはずがなかった。

そんなの無理だ。もう大切な人を失いたくない。

すると、翼の手の中に等身大の白い鎌が現れた。

これは翼たちにとって、生きる源。“気”をとるための道具だ。

「じゃ、行ってくるから」

翼は背を向けて、その場から姿をかき消そうとする。

「待ちなさい。翼」

「！」

翼は明の声に、肩越しに振り返った。

そこには“スイマ”の明の姿があった。

人間のふりをしている明は、普通のそこら辺にいる父親だ。しかし、白い鎌を持ちスイマの姿に戻ると、“人間のふり”は解除される。そしてその姿は、青年に近い。

スイマはムマと契約した時点で、年をとらなくなる。つまり、外見の年は一生変わらない。

今の父親の姿は、翼の母親Ⅱ夏枝と契約したときのままだ。

「私も行くことにする」

「・・・分かった」

明は翼の隣に歩み寄った。

・・・翼は現在、18歳。そして19歳までに契約するムマを見つけないと、死ぬことになってしまう。

——掟を破った者として。

翼は若くなった明を一瞥すると、その場から姿を掻き消した。

朝菜は何とか最初の一步を踏み出した。

“レバー”を探しに行くためにも、あの階段を登らなくては。

広くはない廊下の両側には、何個もドアがある。

(・・・よし)

朝菜は意を決して、ゆっくりと歩き出した。

ギーギー・・・

朝菜が一步踏み出すたび、その木製の廊下が嫌な音をたてて軋む。

(ぬけちゃったらどうしょ・・・)

朝菜は出来るだけ体重をかけないつもりで、慎重に歩く。

バンっ!!

「!!!!」

突然、入口の扉が大きな音をたててしまった。

朝菜はその光景を見て、固まる。

(風のせいだね・・・?)

外にいたとき、風が森の木々を揺らしていたことを朝菜は思い出した。

・・・きつとそうだ。風だ。

朝菜は前に向き直ると、今度は出来るだけ早足で進んだ。
怖くて、後ろには振り向けない。

黙々と前進していることが、今の朝菜にとって一番良い方法なのだ。

コン・・・

「!!」

何か音が聞こえた。

朝菜は瞬時にドアのほうを見る。

廊下沿いに並ぶドア、そして今、丁度朝菜の横にあったドアの中から、確かにそれは聞こえた。

・・・まるで、誰かがドアの内側からノックしているような・・・
そんな音だった。

(気のせいだよね・・・?)

朝菜は、自分の早くなった鼓動を無視して、そうあるよう信じた。
朝菜はまた、歩きだした。いや、今度はあの階段を目指して、朝菜は走っていた。

コンコン・・・

次のドアを通り過ぎる一瞬、また聞こえた。

コンコンコン・・・

まだだ。

朝菜がドアの横を通り過ぎる一瞬、その音は、ドアの内側から聞こえる。

朝菜は必死に走った。そして、最後のドアの横を通り過ぎる。

「!・・・」

今度は何も聞こえなかった。

・・・やはり、気のせいだったのだろうか。

朝菜は階段の前で歩みを止めた。

朝菜の目の前には、先が見えない暗い階段が続いている。

(怖っ・・・)

「!!」

後ろから、誰かが立っているような気配がした。

朝菜は我慢できず、後ろに振り返った。

そこには誰もいなかった。

しかし、朝菜がさっき通り過ぎたドアが、微妙に開いている。

・・・さっきまでは、きっちりと閉まっていたはずなのに。

「っ・・・！」

朝菜は階段を駆け上がった。

もう、上に進むしか道はない。

そして朝菜は闇に包まれた。いや、確かにさっきまでも闇だったの

だが、今度は本当の闇だ。

何も、見えない。

それでも朝菜は、足を止めなかった。

ただ、階段を上っている自分の足音と、その感覚だけが足の裏に伝わる。

と、視界が開けた。

「！！・・・」

朝菜の視界に広がったのは、やはり木製の廊下だった。

そして、窓があった。

それらの窓は、先ほどのドアと同じように何個も両側に並んでいる。

しかし、それらは、ドアとは違い全開に開かれていた。

それらの窓からは、あの暗い森が広がっているのが見えた。

「・・・」

朝菜は少しばかり安心した。

何も見えないよりは、何かが見えたほうが良かったです。

朝菜は一步踏み出すと、その景色を静かに眺める。

（早く・・・しないと）

怖くて怖くてたまらない。逃げ出したい。

（でも・・・）

レバーを見つけないと、もっと恐ろしいことが起こってしまう、そんな気がした。

「はやく窓を閉めて!!」

「!？」

突然、背後から声がした。

朝菜が声のほうに振り向く前に、その声の主が朝菜の横を通り過ぎる。

彼女は朝菜に振り向くこともせず、一番手前の窓の前で立ち止まると、すばやくそれを閉めた。

短めの黒髪を持った彼女は、朝菜のほうに振り向くと半分怒鳴るように言う。

「朝菜も早く閉めて!! はやくしないとアイツが来る!!」

「・・・・・・は!？」

彼女は全開に開かれている窓を、次々と閉めていく。

「あいつって・・・・」

朝菜は眉間にしわを寄せ、呟いた。

「早くして!!」

（一体何・・・・？）

朝菜は、何がなんだか分からないまま、彼女の言うとおりに一番近くにある窓を閉めた。

（あっ・・・・）

この建物の一階に、明かりの燈っている部屋が一室だけ見えた。

それも、けっこう明るく燈っている。

朝菜はあの部屋に行かなくては、と思った。

あの明かりの中なら、朝菜を救い出す何かがあるかもしれない。それに・・・・あの明かりに入れば、この不気味な世界から脱出できるかもしれない、そう思った。

「これで安全ね」

「!」

いつの間にか、朝菜の隣に立っていた彼女が言った。

どうやら窓は、すべて閉めたようだ。

「?・・・・」

朝菜は彼女の顔を見た。顔立ちからして、朝菜と同じぐらいの年に見える。

真っ黒の瞳。

白い肌。

（誰だろ・・・この人。・・・でも、どこかで見たことあるような・・・）

「これでアイツは入ってこれないわ」

「あいつって・・・誰？」

彼女は朝菜の発言に、微かに顔色を曇らせた。

一方、朝菜は彼女の表情の理由が全く分からない。

「私も朝菜もあいつが大嫌いよ。特に朝菜の方が、苦手中の苦手ね」

（・・・私が苦手中の苦手？・・・っていうか、何で知らない人が私のこと知ってるの？）

この世界に住んでいる人は、皆、朝菜のことを知っているのだろうか。そんな考えが頭をよぎる。

「海夜^{みよ}。どうして私のこと知ってるの？」

（・・・！）

朝菜は自分の発言に、どきりとした。

なぜ、自分は彼女の名前を呼ぶことができるのだろうか。まったく知らないはずなのに。

彼女の名前＝海夜、は自然と自分の口から発せられていた。

まるで・・・彼女のことを、ずっと昔から知っていたみたい。

海夜は朝菜の表情とは対照的に、にっこりと笑うと言った。

「何言ってるの！朝菜と私は昔からの親友！！知ってて当たり前じゃない」

「・・・」

朝菜は海夜の満面の笑みに、思わず自分も笑顔になりそうになった。海夜と親友だった覚えは、もちろんない。いや、むしろ朝菜と海夜は、今日初めて出会った。

しかし、彼女の親しみやすい笑みを見ると、昔からの親友だった

た気がしてくる。現に、彼女の名前も言えているではないか。・・・もしかしたら、朝菜は海夜と親友だったことを忘れていただけなのかもしれない。

・・・このおかしな空間なら、そのことも十分にありえる。

「うん・・・。私たち、親友だしね」

朝菜は当たり前前のようにそう言っていた。

「でしょ！」

海夜は嬉しそうに、また笑う。

「じゃ、いつもの遊びしましょ」

「・・・うん」

「この遊び、本当に楽しいのよね！」

「・・・!!」

朝菜は目を見開いた。

海夜の手にはいつの間にか、拳銃が握られているではないか。

海夜は一步下がると、朝菜に銃口を向け、笑顔で言った。

「どっちが、相手に早く弾を当てることができるか！朝菜、意外とこれ、得意なんだよね。今度は負けないわ！」

「・・・は!？」

朝菜は、自分の手の中に何かがあることに気づき、どきりとした。

・・・朝菜は当たり前前のように、拳銃を握っているではないか。

「っ・・・」

朝菜は初めて持つ拳銃の感覚と、思いもしない展開にその場で固まった。

「ちよっと・・・!!」

「それじゃ・・・よい・・・スタート!!」
バン!!

「!!」

朝菜は反射的に、横に飛びのいた。

・・・大きな音。

耳を塞ぎたい。

「っ・・・！やめてよ！あたったら死んじゃう！！」

「何言ってるの。そんなことで死ぬわけじゃないじゃない！」

海夜は不気味な顔でそう言うと、また銃口を朝菜に向ける。

「やめてよ！！」

朝菜は必死に逃げた。

バン！ バン！ バン！

窓ガラスが破れる。

「朝菜も撃ってよ！じゃないとつまらないじゃない」

（このままじゃ・・・死ぬ！）

朝菜は必至の思いで、拳銃を構えた。そして、自分のうでを信じて、引き金を引いた。

バン！！

その銃弾は、海夜のすぐ横の窓ガラスを突き破る。

朝菜は初めて拳銃を使った・・・はず。

なのに・・・なんでだろう。この使いやすさは。

まるで・・・昔から拳銃を使っているような・・・そんな使い心地だった。

「さすが！朝菜。でも、最初の一発で終わらせようとするなんて、気が速いんじゃない？もっと、楽しましようよ」

「っ・・・！」

朝菜と海夜じゃ、まるで考え方が違う。

もうこうなったら・・・。

バン！バン！バン！

朝菜は、海夜めがけて銃弾を放った。

海夜はそれを素早く避けると、とても楽しそうに撃ってくる。

朝菜も必死の思いでそれを避ける。

・・・窓ガラスが破れる。

ミシミシミシ・・・

「！！！！」

嫌な音が聞こえたかと思うと、残っていた窓ガラスが物凄い音と

もに一斉に敗れた。

数えきれないほどのガラス片が、辺りに散らばる。

・・・足の踏み場がない。

そして、気持ち悪いほどの静けさが二人を包んだ。

「あいつ、が来るわ!!」

「!?!」

海夜の大声とほぼ同時に、あいつ・・・もの凄い突風が、低い唸り声とともに、破れた窓ガラスから入ってきた。

「・・・・・・・・!」

その突風は、朝菜と海夜の髪をかき上げる。

目を開いているのが辛いほどの強い風だ。

そして信じられないことに、その突風は朝菜の体を宙に浮かせた。

朝菜は、成すすべなく窓から外に投げ出される。

朝菜が驚きのあまり、目を開いた瞬間、海夜の歪んだ表情が見えた気がした。

翼は溜のアパートの前に姿を現した。

もう既に、外は暗い。アパートの廊下の灯りも灯り始めている。

「たしかあいつの部屋は・・・」

翼は迷わず走り出した。その後にも続く。

アパートに入り、廊下を進んで、溜の部屋の前で足を止めた。

朝菜は無事なのか。それとも手遅れなのか。

翼は早くなる自分の鼓動を感じながら、目の前のドアを通り抜けた。

「!?!」

そして、目に入った。

ソファに寄りかかり、動いていない朝菜の姿が。そして、その傍らに立っているスイマの姿が。

「朝菜!」

翼はそう叫ぶと、朝菜の隣に駆け寄った。

朝菜は目を覚まさない。

「翼。この姿では、朝菜に声も聞こえないし、姿も見えない……」

「じゃ、そうすればいいんだよ!？」

翼は朝菜を見たまま、明の声とは対照的に力強い口調で言った。

「人間の姿になって朝菜を起こそうとしても、どうせこのスイマが邪魔をするだろ!？」

翼はこのスイマ＝トイロのことを睨みつける。

トイロは一瞬、翼の言葉に怯えたように見えたが、翼の瞳をしつかりと見据え言った。

「……溜の仕事の邪魔を、させるわけにはいかないから……」

するとトイロは朝菜に容赦なく鎌を振りおろす。

「やめろ!」

翼がそう叫ぶ頃には、朝菜の体から光の粒があふれ出していた。それは見る見るうちに、トイロのほうに流れていき、彼女の中へと消えていく。

「っ……」

翼はトイロのほうに素早く振り向くと、鎌の柄を彼女の首に勢いよく押しつけた。そしてトイロを、そのまま強く壁に押さえつける。

「もう俺は……手遅れなのか!？」

翼は必死だった。

トイロはその黒髪で表情を隠し、俯いたまま黙っている。

「やめなさい。翼」

明はそう言うと、翼の鎌をトイロの首から引き離した。

「……この鎌は、こういうことに使うもんじゃない」

「……分ってるよっ」

翼は呟いた。

「……どうして明はこういう時にも、冷静にいられるんだ？」

翼はこうも必死で、自分でも分かるぐらい取り乱しているのに。

「それに悪いのはこの子じゃない」

「・・・」

・・・そう。こう場合、悪いのはムマのほうだ。しかし、その手伝いをこのスイマがしているのは事実。

だから翼は、自分の感情が抑えきれなかった。

「ごめんなさい。・・・私も瑠があの時、いきすぎたことをしたのは分ってるの」

「!・・・」

翼と明は同時にトイロを見た。

トイロは、いまだに目を伏せたままで、その口はギュツと閉じられていた。

「でも・・・私のパートナーは瑠。瑠は私にとって大切な存在だから、これ以上・・・のことは言えない。・・・言いたくないの」

トイロは今にも壊れてしまいそうな声だったが、しっかりとその言葉の口にした。

そして沈黙・・・。

翼は思った。

確かに誰だって、大切な人の悪いことは口にしたくない。ましてや、他人の前で口にするなんてもってのほかだ。・・・しかし、だからと言って西園寺のしたことを認めていいわけではない。

「じゃ・・・何で・・・そんなに大切な人なら、そのことがいけないことだって、ちゃんと行ってやんなかったんだよ!？」

・・・もし、お前がちゃんと行ってれば、俺の母さんだって・・・ああなることはなかったのに!!」

翼は必死に叫んだ。

もう過ぎ去ってしまったことは、どうにもならないことは分かっていた。

悔しい。過去に戻りたい。

時の流れは残酷だ。一度間違ってしまったら、一生戻れない。間違ったと分かっているながらも、引き返せない。

ただ、後悔という名の足跡を残して進むしか道は残ってないんだ。

「勝手なこと言わないで!!」

「!」

突然そう叫んだトイロに、翼と明は目を見開いた。

「あの時の瑠に、そんなこと言えるわけない……。言えるわけないよっ……。!」

顔を上げたトイロの表情は、とても苦しそうに歪んでいた。

「!……。!」

明はその手から鎌を消すと、目を伏せ低い声で言う。

「過ぎてしまったことを言うな……。ただ、自分たちが苦しい思いをするだけだ……。分かるな?」

「分かってるよ!そんなこと!でも……」

「私は今でも苦しいのっ……」

トイロは翼の言葉を遮るようにして叫んだ。

しかしトイロは俯いていた。そして、震えた息を漏らしながら、口を開いた。

「知ってる……。?過去の瑠に何があったか……。瑠は……。両親に捨てられたんだよっ……」

第2話「幼い二人の優しくて残酷な物語」

約10年前・・・

瑠（当時6歳）は、通っている幼稚園のある一室で両親の迎えを待っていた。

広くはない部屋の隅にあるテレビには、子どもたちが退屈しないよう、アニメのビデオが流されている。

「瑠君のお母さんはいつ来るの？」

瑠の隣に座っている瑠の友だちⅡ^{ナギ}風が声をかけてきた。

「僕は、お父さんが迎えに来てくれる。お仕事で遅くなるって言ってたから、まだこれないと思う。」

風君のお母さんはいつ頃くるの？」

既にこの部屋には、二人しか残っていない。他の友だちは皆、帰ってしまったのだ。

「僕のお母さんはね・・・」

「風君、お母さんが迎えにきたわよー」

先生が部屋の入口で、風のことを呼んだ。

風は勢いよく立ちあがると「じゃーなー」と言って、駆け足で部屋を出て行ってしまった。

（また僕が最後か・・・）

でも、気にしない。

もうそろそろ迎えに来てくれる時間だ。

瑠はごろんと床に横になった。

広くない部屋だが、瑠一人になってしまった今では、いつもの何倍も広く感じる。見飽きたビデオの音も、一人の時はなぜか心地よく聞こえた。

「瑠君、お父さんが来たわよー」

「!・・・はい!」

(来たっ・・・)

瑠は飛ぶようにして起き上がると、黄色の鞆を持ち、駆け足で部屋を後にした。

瑠は父の車を見つけると、後部座席のドアを開け中に乗り込んだ。

「お帰り。瑠」

「ただいま。お父さん」

瑠の父親Ⅱ^{シン}芯は運転席に座りながら、肩越しに振り返り瑠を見た。

瑠はそんな芯を見て、にこっと笑った。

そして、車は自宅へ向かって出発する。

見慣れた街並み。

いつもの車の中におい。

それらは皆、後少しで家に帰れるということを示していた。

「お父さんー。いつもこれしてると暑いよ」

瑠はそう言うと、カツラを両手で取り外した。

そのカツラの下には、瑠の本当の髪・・・銀色の髪がある。

瑠はそのカツラを鞆の中に、乱暴に押し込んだ。

芯は運転をしながら、言う。

「瑠はまだ髪色までは変えられないだろ。しばらくはそれで我慢すること!」

「・・・」

瑠は芯の言葉を軽く聞き流すと、目を二、三回パチクリさせた。するとたちまち、その瞳は透き通るような銀色になる。

「そんな色、友だちには見せられないだろ?」

「・・・うん」

もちろん、そのことは分かっている。

自分の家族はみな、変わった瞳の色と髪の色を持っている。

もちろん世の中では、変わりものはいいい目ではみられない。

だから、瑠たちの家族は、それを外では隠して生活している。

瑠はそのことをわざわざ隠すのは嫌だったが、家族の人が皆そうし

ているので、自分も我慢しようと思った。

「瑠もあと少しで小学校入学だな」

「うん」

そう、瑠はあと少しで地元の小学校に入学する。

今月には卒園式があり、来月には小学校一年生だ。

瑠は楽しみで仕方なかった。小学校生活も、もちろんそうだが、小学生になると“仕事”ができる。

瑠は前々から父や母がやっている仕事を、自分もやってみたくてたまらなかった。そして、小学校へ入学すると同時に、仕事をやるのを許されているのだ。

「ほんとにできるのかー!? 瑠にムマの仕事なんて」

その声が聞こえたのと同時に、瑠の隣の座席に父のパートナーのスイマ㇏ゼンが姿を現した。

「ゼン兄ちゃん・・・。僕、楽しみにしてるのにそんなこと言わないでよ」

瑠はムツとした顔でゼンを見る。

「ごめんごめん。ただ俺は心配なだけなんだよ」

ゼンは、はははっ、と笑いながらくしゃくしゃと瑠の髪をかきまわした。

「・・・」

「ゼン。心配する必要なんてないぞ。瑠ならできる。お父さん似だからな」

「芯のやつ、また言ってるよ! それほど自分の腕に自信があるんだな」

「俺はそんなに自惚れているつもりはない!」

「・・・おいおい。父親っていうのはなー、子どもが小さい時は自分のことを“お父さん”って言わなくちゃいけないんだぞ?」

瑠はゼンの言葉にぴくりと反応する。

「僕は小さくない!」

ゼンは瑠のその言葉に、少しばかり驚きの表情を見せた。しかし、

その瞳はすぐに幸せそうに歪む。そしてゼンは、優しい声で言った。
「だな。瑠は小さくなんてないよな」

運転している芯も、瑠の隣に座っているゼンも、楽しそうに笑っていた。

「ただいまー」

瑠は自宅に帰ると、玄関の扉を開けそう叫んだ。

「お帰りー」

居間の方から、いつものように瑠の母ナユキ奈雪の声が聞こえた。

瑠は靴を脱ぎすて、居間へどたばたとかけこむ。

後から「こら！靴揃えろ」という芯の声が聞こえたが、「分った」と言い返しただけで、瑠は奈雪の隣のソファに腰をおろした。

奈雪はとても綺麗な金の瞳と金の髪を持っている。

瑠と芯は銀色なのに、どうして奈雪は金色なのだろう。瑠はそのことを昔、奈雪に「何でお母さんは僕たちとは違う色なの？」と質問したときがあった。

奈雪はそれに「ムマの人は昔から女の人が金で、男の人が銀なのよ」と教えてくれた。

「僕もお母さんと同じ色がよかったな」

瑠は、隣で本を開いている奈雪にそう言った。

奈雪はその顔を瑠に向け、苦笑する。

「何言ってるの！瑠は男の子なんだから、そっちの色のほうが似合うわよ。それに、お母さんは瑠やお父さんみたいな色のほうが、好きなんだから」

「そうなの！？」

奈雪はにっこりと笑った。

「そうよー」

瑠は母に気に入ってもらうことができ、嬉しかった。
思わず笑みがこぼれる。

「それから、瑠！」

奈雪は本を閉じ、立ち上がると瑠を見下ろした。

「靴はちゃんと揃えてくるのよ」

「・・・はい」

瑠の期待とは逆に、奈雪の口にした言葉はそれだった。やはり奈雪は、芯が瑠に向かって言った言葉をきちんと耳に入れてたらしい。奈雪は本をソファの隣に置いてある本棚にもどすと、そのまま台所にむかう。

瑠も渋々立ち上がり、玄関にむかった。

（面倒くさい・・・）

瑠はそんなことを思いながら、裏返しになった靴を元通りにする。そして、きちんと両方の靴を揃えると芯の大きな靴の隣にそれを並べた。

「瑠、ちょっと俺と話さないか？」

「！」

横を見ると、そこにはゼンがあぐらをかいて微笑みながらこちらを見ている姿があった。

「・・・いーよ？」

（なんの話だろう・・・）

「よし！それじゃ、外で話すか」

ゼンはそう言いながら、立ち上がる。そして、ゼンは瑠の両脇に手を入れ、そのまま瑠を持ち上げた。

「わぁー・・・！」

瑠は突然のことに驚いて、思わずそう声を漏らす。

そしてゼンは自分の肩に瑠を座らせ、肩車をした。

「瑠、さっき上手に靴並べられたもんな。崩しちゃうの勿体ないだろ」

「ありがとー。ゼン兄ちゃん！」

瑠はゼンの頭をぎゅっと抱きしめた。

ゼンの髪は自分と違って真っ黒で、顔を埋めると目をつぶっている

ときみたいだ。

「おいおい。これじゃ前が見えねーよ！」

どうやら、瑠の腕がゼンの目を隠してしまっているらしい。

「あははは」

瑠は、ゼンの目からぱつと腕を離した。そして、ゼン首の周りに腕をまわす。

「こいつ、笑いやがったなっ」

「笑ってないよ！」

「こらっ。嘘つくな」

「ははっ」

ゼンは苦笑すると、玄関の扉をゆっくりと開ける。そして二人は外へでた。

既に外は夕焼け色に染まり、家の庭にも淡いオレンジ色がかかっている。

ゼンは庭の隅にある、手造りのブランコに瑠を座らせた。

このブランコは、瑠がもっと幼いときに、父が作ってくれたものだ。今では、ロープの色もすっかり色褪せてしまっており、板の部分もロープと同様すっかり色あせている。

しかし、太いロープで、父が太い枝にそれをしっかりと括りつけていたのを瑠は見えていたので、壊れることはないだろうと瑠は思った。ゼンはブランコが括り付けられている木の幹に寄りかかると言った。「瑠、ムマの仕事をするには、パートナーのスイマと契約しなくちゃいけない、っていうのは分かってるよな？」

「うん、知ってるよ」

瑠はロープを握りしめ、靴下の足をぶらつかせる。

ゼンは瑠の言葉に頷くと、言葉が続けた。

「・・・パートナーを誰にするか決まってるのか？」

「うーん・・・と、お父さんとお母さんが決めてくれるんだって」

ゼンは少しだけ目を見開いて瑠を見た。

「じゃ、まだ決まったわけではないんだな!？」

「うん」

瑠はゼンの声色が変わったことに気づき、足の動きを止め彼の顔を見る。

ゼンは真剣な声色のまま言った。

「瑠のパートナーさ・・・俺の妹にしないか!？」

・・・妹さ、そろそろ15になのに、まだパートナーを見つけられないんだよ・・・」

「・・・うん。いいよ」

「ほんとか!？」

ゼンは身を前に乗り出す。

瑠は少しばかり眉間にしわを寄せる。

「でも、お父さんとお母さんに聞いてみないと分からない・・・」

「・・・」

ゼンはどうしても、自分の妹のトイロを瑠のパートナーにしてやりたかった。

トイロは消極的な性格で、人と話したり人と仲よくなったりするのも得意な方ではない。そんなトイロが、19までにちゃんとパートナーを見つけれられるか、ゼンは心配でならなかった。

・・・それに、パートナーが自分のパートナーの子どもだったら、トイロも少しは安心できるだろう。

「・・・それじゃ、俺がお父さんに聞いてくるからな」

「・・・うん」

「俺がなんだって？」

「!」

いつからそこにいたのか、木の影から、芯がずっと姿を現した。

芯は真剣な眼差しで、ゼンを見る。

「・・・」

ゼンは突然のことに驚いたらしく、その口を閉ざしている。

瑠はとっさに口を開いた。

「僕の仕事のパートナー、ゼン兄ちゃんの妹さんがいいの」

「そう。さっき俺が、瑠にそう言ったんだ。瑠のパートナー、まだ決まっていなくて聞いたからさ」

ゼンは一歩、芯のほうに歩み寄りそう言った。

「・・・」

「・・・」

瑠とゼンは沈黙のなか、芯の答えをじっと待った。

芯は口をきゅっと閉じ、何かを考えている。そして、腕組をすると口を開いた。

「・・・ゼンの妹はちゃんとした子なんだろうな？」

「・・・トイロは、優しくていい奴だと思うけど」

ゼンは思った。

少なくともトイロは、芯が思っているような“ダメな子”ではないと。しかし、トイロは全てがちゃんとしていると言ったらそれは違った。だから、ゼンはそう言うことにした。

「わかった。・・・その子を瑠のパートナーにする」

「本当か!？」

ゼンは目を見開く。

芯はそんなゼンの姿を見て、微笑むと言った。

「ゼンの妹なら、きちんとやってくれそうだしな」

「おう。トイロならきつと上手くやれるよ!」

「よかったね!ゼン兄ちゃん」

瑠も嬉しかった。きっとゼンの妹は、ゼンと同じように優しい人に違いないだろう。そのお陰で、もっと仕事をするのが楽しみになった。

すると芯は、そっと瑠の頭に手を乗せた。

「もうそろそろ夕食だ。家に入りなさい」

「はい」

瑠は芯の顔を見て、にっこりと笑う。

「それじゃ、芯。仕事するときにな」

ゼンは明るくそう言って、瑠に笑いかけた後、その場で姿をかき消した。

もう、庭全体はオレンジ色から、暗闇へと染まりつつある。

瑠と芯は、そんな庭を後にして、光が溢れる家のなかへ入った。

第2話(2)

そして・・・
卒園式。

「瑠君と同じ小学校でよかった！」
「！」

記念写真を撮り終えた後、隣にいた凧がそう言った。

今日は卒園式なので、親も子もピシッとした格好をしている。

女の子はひらひらのスカート。男の子の首にはネクタイ。

「うん！よかった！小学校でも一緒に遊ぼうね」

「うん！」

そう、瑠と凧は家が近所のこともあり、同じ小学校に入学することが決まっているのだ。

そのことが瑠にとっても嬉しいことだった。

「瑠。そろそろ帰るぞ」

「！」

見上げると、そこには凧の姿があった。

瑠が辺りを見渡すと、体育館にいる人々はもうだいぶ少なくなってきた。

「うん」

瑠は芯にそう言うと、凧のほうを見た。

凧は芯のことを一瞥すると、瑠に笑いかける。

「・・・今度一緒に遊ぼうね！」

瑠も笑顔で頷く。

「ばいばい！」

「ばいばい！」

そして瑠は凧に背を向けると、芯とともに体育館をあとにした。

「疲れたー」

「今日は頑張ったな」

瑠と芯は幼稚園の駐車場を歩いていた。

辺りに人の姿はなく、駐車場はガランとしている。

今日は、みんなで舞台の上にあがって歌を歌ったり、楽器を演奏したりしたので、いつも以上に疲れてしまった。

「歌、上手く歌えたな」

「・・・やったー」

瑠の瞳に映る芯の表情は、満足そうだ。

しかし瑠はそうもいかない。無事に卒園式を終えた安心感で体が疲れ切っていた。

そのせいで、いつもは何ともない頭の上のカツラも重く感じる。

（いいや。・・・とっちゃえ）

既に、芯の車も目の前だ。

瑠は頭の上のカツラをとると、バッグにしまい込む。と、その時、頭をこぶしで軽く叩かれた。

「こら。まだ早いぞ。瞳の色も黒に戻しなさい」

瑠は芯を見上げると、眉間にしわを寄せる。

「だって・・・疲れちゃったし」

「瑠君！！」

「！」

瑠が後ろに振り向くと、そこには凧の姿があった。

凧は表情を引きつらせて、こちらを見ている。そして凧の手には、二本の花束が握られていた。

そうだ。すっかり忘れていた。

先生に一人一本、花束を持ち帰るように言われたんだった。

一本は、持ち返るのを忘れしまった瑠のために持ってきてくれたんだろう。

「風君・・・ありが・・・」

「瑠君・・・変な髪の色！目の色も！！何でそんな色してるの！？」「！！」

瑠は風という言葉聞いて固まった。

そうだ。この色は、他の人には見せちゃいけないんだ。

「ねえ！何で！？」

「っ・・・」

瑠は風に返すはずの言葉が見つからなかった。

だって、そんなこと自分にも分からない。

その時、芯が瑠のことを隠すようにして瑠の前に立った。

「風君の見間違えじゃないかな。瑠はそんな色してないよ」

「そんなはずない！！だって僕、見た！」

瑠は叫ぶようにしてそう言う風の声を聞いて、芯の後で震えていた。
・・・自分はいけないことをしてしまったんだ。

「瑠、帰るぞ」

「・・・」

芯は瑠の背中を軽く押した。

瑠は芯に促されるまま、彼の体の影に隠れるようにして車内へ入った。

まだ、風がこちらを見ているのが分かる。

「瑠君は化け物だ！！」

風が最後にそう叫んだ言葉が、瑠の耳から離れなかった。

「ちゃんと、お父さんの言いつけを守らなかったからそうなったんだ」

芯は車に乗っている途中、一言も口を開かなかった。そして、家に

つき、居間に入った途端にその言葉を言われた。

「ごめんなさい・・・」

瑠は俯いて、ずずつと鼻をすすする。既に、目は涙で潤んでいた。瑠は一番の友だち・・・風“化け物”と言われたことが、シヨツクでたまらなかった。

(何で・・・？僕は瑠だよ・・・。化けもの何かじゃない)

そして、芯に怒られたことによって、余計に自分の感情が抑えきれなくなっていた。

「いいか、瑠。約束はちゃんと守らなくちゃいけないんだ。いいな？」

「・・・お父さん・・・僕・・・化け物なんかじゃない・・・」

「瑠!!」

「!!!」

芯の大声が静かな居間に響き渡った。

瑠は驚いて、顔を上げる。

そこには、怒りに染まった芯の顔があった。髪の色も瞳の色も、元の色に戻ってしまっている。

「瑠・・・。お父さんの話を聞いてたか？」

「・・・」

「約束は守れ。そう言ったんだ」

「・・・分かったよ・・・」

もう、瑠の視界は涙で潤んで見えなくなっていた。

瑠はただ、芯に「お前は化け物なんかじゃない」と言ってもらいたかった。しかし、芯はその怒りの表情を崩そうとはしない。

(・・・でも、仕方ない。だって、僕はお父さんの話をちゃんと聞いてなかったんだから・・・)

「これからは・・・気をつけろ」

芯はその言葉を残して、居間から出て行ってしまった。

「・・・うっ・・・ずずっ・・・」

瑠はその場でしゃがみ込むと、大声で泣いた。

嫌だった、凧に嫌われてしまったことが。
嫌だった、芯を怒らせてしまったことが。

「溜！どうしたの？」

「！」

見るとそこには、溜の母。奈雪の姿があった。手には重そうな買い物袋がぶら下がっている。奈雪はそれを床に置き、溜の前まで駆け寄るとその場にしゃがみ込んだ。

溜は手で涙を拭いながら、奈雪に向かって言った。

「お母さん……。凧君が僕のこと……。化け物だって……。僕・
・化け物じゃないよっ……」

「！……」

一瞬、奈雪の表情が動いた。

溜はドキリとする。また、奈雪にも約束を破ったと怒られてしまうのだろうか。

「大丈夫。化けものなんかじゃないわ」

「！」

奈雪は呼吸が整わない溜の背中に手をまわし、そっとそれをさすってくれた。

「確かに、溜やお母さんは、変わった力と変わった色を持っているけど。」

鋭い牙もはえてないし、こわい二本の角もはえてないでしょ」

「……」

「それに“凧君”っていうお友達がいるんだから。化けものに、お友達がいるわけじゃないじゃない？」

奈雪は優しく微笑んでそう言うと、溜の頭にそっと手を置いた。

「う……ん」

溜は最後の涙を、必死に手で拭う。

「ほら！泣かないの！それぐらいのことで泣いてたら、これから先が心配だわー」

奈雪は、そう言うとう溜の頭をこつんと叩いて立ち上がった。

「もうすぐ夕食にするから、ちゃんと着替えて、手洗ってくるのよ」

瑠は奈雪の顔を見上げる。そして、こくんと頷いた。

奈雪はにっこりと笑うと、買いもの袋を持って台所のほうへ姿を消した。

瑠の心は、先ほどとは打って変わって、安心感で満たされていた。もちろん、その目からは涙は流れていない。

・・・自分は化けものじゃないんだ。

だって、鋭い牙もはえてないし、こわーい二本の角もはえてないんだから。

その日の夜・・・。

瑠はなかなか寝付けずにいた。

それは、心配ごとがあったからだ。

夕食のときの芯は、叱られたときよりは表情は穏やかになっていたが、いつもよりは明らかに口数が少なかった。しかも、こういうときに限って、ゼンは夕食のとき、姿を現さなかった。いつもなら一回ぐらいいは姿を現して、奈雪の手料理に文句の一つも言ってくるのに。

そのせいもあり、今日の夕食は楽しんで食べることができなかった。そして、凧のことも気がかりだった。

小学校へ入学しても、凧と離れることはない。

・・・次、会うとき、どんな顔をして会えばいいのだろう。

瑠は布団の中でごろんと寝返りをうった。

枕もとにある安っぽい目覚まし時計を手に取り、目の前に持つてくると、その針は11の数字を示そうとしている。

瑠は時計をもとの位置に戻すと、浅くため息をついた。

もう、この時刻になってしまったら、家いるのは瑠一人だ。父も母も仕事へ行ってしまったて、もう少したたないと帰ってこない。

「瑠、まだ起きてたのか？」

「！」

見るとそこには、手に等身大の白い鎌を持ったゼンの姿があった。

「ゼン兄ちゃん……。仕事は？」

瑠は布団から体を起こし、ゼンを見た。

「ああ……。今日は速く切り上げることにしたんだよ……」

ゼンは曖昧な笑みを浮かべながらそう言う。

「……」

「瑠、何か考え事してたろー！？こんな夜中まで考えごととしてると、スイマが仕事しにくくなるんだぞ」

「分ってるよ……」

そう、分かっている。でも、心配ごとは一人になったときにこそ、頭の中に流れ込んでくる……。だから、自分で解決しようとするんだけど、なかなかそれが出来ない。

「瑠……。あまり気にするなよ。ほら……。忪も、もう怒ってなかったからさ」

瑠は目を見開いた。

「怒ってなかったの！？」

「なかった、なかった」

ゼンは流すようにそう言って、その手から鎌を消すと、瑠の頭を枕の上に押し倒した。

「ほら！寝た寝た！」

「……」

ゼンは眉間にしわを寄せて、瑠の顔を覗き込んだ。

瑠はその顔が嫌で、ぱっと布団を頭からかぶる。

「……」

と、その時、ゼンの手の中に白色の鎌が音もなく現れた。

ゼンはそれで瑠の体を勢いよく切り裂いた。

それと同時に、キラキラと光る粒が次々と瑠の体から現れる。

「忪……。今日、瑠のこと怒っただろ？あの言い方はないじゃな

いか」

ゼンは、小さな寝息をたて始めた瑠のことを見下ろしてそう呟いた。その間にも、光の粒は次々とゼンの体へ吸い込まれるように消えていく。

「小さいうちにあれくらいのことは言っておいた方がいいんだ」

その言葉と同時に、芯がゼンの隣に音もなく現れた。

彼の姿はゼンとは違い、銀の髪に銀の瞳。夜の闇にはえている。

ゼンは芯の言葉に、浅くため息をついた。

「芯は厳しい父親だな。瑠はただでさえ、友だちに本来の姿を見られて落ち込んでいたんだぞ？」

「……ゼンは口出しするな。それに俺は、厳しい父親でいいんだよ」

芯の声には、苛立ちが混じっているように聞こえる。

「……はいはい。そうですか」

ゼンは、あんなに大泣きしてこんな時刻になるまで眠れないでいる瑠が、心配だった。しかし、芯はゼンと同じことは思っていないようだ。

父親とは皆、そういうものなのだろうか。

……子どもが落ち込んでるとき、慰めてあげる役目も、父親だとゼンは思ったのだが。

「俺は仕事に行くから。ゼンはここで見張ってろ」

「……わかったよ。まあ、それも俺の役目だし」

ゼンがそう呟いている間に、芯はその姿をかき消してしまった。

いや、正確には……瑠の意思の中へ侵入した。

芯は何もない空間に一人で立っていた。

上も下も真っ白な空間だ。この空間は“無の状態”と言ってもさほどおかしくない。

そしてその空間には、“鎖”がいたるところに絡まっている。空間に鎖が絡まるということは、現実にはありえない。

しかし、今、芯が立っている空間ではそれがありえている。

・・・あの鉛色の鎖たちは通称、“記憶の鎖”。あの鎖の一つ一つには、記憶が詰め込まれている。そして、全てが繋ぎ合わせてある。と、その時、芯の手の中に等身大の鎌が音もなく現れた。

その鎌は、スイマの鎌と違い、全身が闇色だ。

そしてもう一つ、ムマの鎌は、スイマの鎌と違ふところがある。

それは・・・“切り裂くもの”だ。

スイマは“人の気”を切り裂く。そして、ムマの鎌は“人の記憶”を切り裂くのだ。

芯はその鎌を両手で握ると、身軽にジャンプした。そして、鎖のところまで行くと、それを勢いよく切り裂く。しかし、切り裂くのは、さびた鎖だけだ。

さびた鎖は、古い記憶、または必要としていない記憶だ。ムマの瞳がそれを判断させる。

切り裂かれた鎖は、瞬く間に朽ち果て、粉々になり、そして消えた。その鎖が消えても、周りの鎖は何事もなかったかのように、また連結される。

芯はさびた鎖がなくなるまで、その作業を繰り返した。

そして・・・最後の鎖を切り裂いたとき、周りの景色が一気に変化した。

芯は今、真っ白の空間ではなく、自宅の居間に立っていた。

いや、正確には、ここは溜のみにている夢の中だ。

たった今、記憶が夢へと変わった。

とその時、居間のドアから誰かが入ってきた。彼らは、溜と溜の友だちの風だった。

「・・・」

芯は楽しそうに話している溜から、顔を背ける。

・・・夢の中で“暇つぶし”をする奴もいるようだが、自分はそんなことはしない。

芯はその手の中から、鎌を消した。そして、その場から自分の姿もかき消した。

第2話(3)

瑠は目を覚ました。

「……」

見慣れた天井が見える。既に、部屋の中は明るかった。

……何となく、幸せな夢をみた気がした。多分、凧と普通に楽しく話している夢だ。

瑠は寝返りを打って、また目を閉じる。そして、昨日、ゼンが言っていたことを思い出した。

“ 芯は怒っていなかった ” ということ。

瑠はその言葉を聞いて安心した。だから、寝ることができたらしい。それに、今日の夢。

自分は、凧と普通に話していた。もしかしたら凧は、もう自分のことは気にしていないのかもしれない。瑠の髪と瞳の色を、自分の見間違いだと思ったかもしれない。だって、普通に考えて銀の瞳と髪は、ありえないことだ。

それに、次に会うのは入学式の時。今日、すぐに会ってわけじゃないんだ。

そう思うと、気持ちが凄く楽になる。

瑠は起き上がると、布団からでた。

気持ちが軽い。昨日の夜の気持ちがまるで嘘のようだ。

これからは、この軽い気持ちのまま過ごしていけそうだと瑠は思った。

そして、入学式の前夜。

いよいよ今日から、ムマの仕事が始まる。

午後九時。

瑠と芯と奈雪は居間にいた。そして、そこは静寂に包まれている。ソファに座っている奈雪は、隣に深々と腰をおろしている芯に声をかけた。

「ゼンの妹さんは、どんな人かしら？」

「・・・」

芯はそれに答えようとせず、ただ相槌をうつ。

瑠はソファから、飛ぶように立ち上がると、奈雪の太ももに両手をついて、ニコツと笑った。

「きつといい人だよ！」

奈雪は「はいはい」と言いながら、瑠のことを自分から丁寧に引き離れた。しかし、彼女の口元には幸せそうな笑みが浮かんでいる。

「またせたな」

「！」

その声とほぼ同時に、ゼンが笑みを浮かべて瑠の隣に姿を現した。

（あっ・・・）

瑠の目に即座に飛び込んできたのは、ゼンの隣に立っている、彼よりやや年上に見える少女だ。

「こいつが俺の妹で、トイロっていうんだ」

ゼンはその少女トイロを一瞥してニコリと笑う。

トイロも、微かに頬を赤らめて微笑んだ。

「！・・・」

瑠は二人の姿を見て思い出した。

トイロは明らかにゼンより年上だが、ゼンの妹。

・・・だって、スイマの人はムマの人と契約した時点で、年をとらなくなるから。

そして、トイロの袖なしのワンピースからのぞく右腕には、肩から手首にかけて、ツタのような黒い印が刻み込まれている。

どうやら、この印は、スイマの人には誰でもついているらしい。

たしか、少し前、ゼンの腕にもその印があるのを見た（近頃は長袖を着ていたので、それが見えなかったのだ）。

そして、契約したムマの左腕にも、それと同じ印が刻み込まれている。

それは、スイマの契約した証拠だということを、昔、奈雪から聞いた。

「あら！可愛らしい子じゃない！」

トイロの姿を見て、始めに言葉を発したのは奈雪だった。

トイロは、丁度、肩に付くぐらいのしなやかな黒髪と、大きな黒い瞳を持った少女だ。

「あっ・・・ありがとうございます」

トイロは恥ずかしそうに微笑んでそう言うのと、軽く頭を下げる。

「トイロ。よかったなー。お前、第一印象が悪かったらどうしようって、心配してたもんなー」

「・・・うん」

トイロはゼンを見て、呟くような声でそう言った。

瑠も、トイロの姿を見て安心した。

トイロは思っていた以上に、可愛らしくて優しそうな人だった。

「・・・」

瑠は芯の反応が、どうしても気になって、彼の方に視線を移す。

「！・・・」

瑠の目に映った芯は、思った以上に穏やかな表情を浮かべていた。どうやら、その表情からして、トイロの第一印象は悪くないらしい。瑠は心の中で安堵のため息をついた。

もし、ここで芯がいかにも不服そうな表情を浮かべていたら、トイロと契約することを取り消しにされてしまったかもしれない。

「瑠・・・トイロに挨拶はどうした？」

「あっ・・・」

瑠は芯の言葉にはっとして、トイロの前にでると、ニッコリと笑った。

「西園寺 瑠だよ。よろしくね、トイロ！」

トイロは瑠の言葉に、少し驚きの表情を浮かべると、微笑んだ。そして、瑠の目線の高さに合わせて、その場にしゃがみ込むと、口を開いた。

「・・・こちらこそよろしくね。瑠・・・」

「トイロがいい人そうで、よかった！」

瑠は自分の本音をトイロに伝えたくて、笑顔のままそう言う。

「・・・私も、瑠みたいなのが、私のパートナーになってくれるなんて嬉しいよ」

トイロの声は、春に吹く風のように、温かくて優しいそれだった。

「瑠。トイロがパートナーでいいんだな？」

芯が、ソファに腰をおろしたまま、真剣みのある声で瑠に問いかけた。

瑠は肩越しに振り返り、芯を見ると「うん！」と頷く。

「トイロもいいよな？」

トイロもゼンの声を聞いて、立ち上がると頷いた。

「それじゃ、瑠」

芯はすくつとソファから立ち上がる。そして、大きな掌で瑠の背中を押し、瑠をトイロに一步近づけた。

「瑠。左手でトイロの手を握るんだ」

「！」

瑠は芯の言葉にドキリとした。

「・・・きつとこれから“契約”が始まるんだ。そして、トイロが正真正銘、自分のパートナーになる。」

トイロは、その白色の右手をゆっくりと瑠の目の前にさしだした。

瑠はその手をしっかりと確認してから、トイロの顔を一瞥する。

トイロの黒い瞳には、不安が入り混じっているように見える。

「・・・」

瑠はすぐさま、トイロの右手に視線を戻した。

そんな二人の様子を、ゼン、芯、奈雪が声を漏らすことなく見てい

る。

瑠は自分の小さな掌を、トイロの手の中まで持ってきた。そして、トイロの手をそっと握る。

トイロも、瑠の手を腫れ物に触るかのように優しく握り返す。

「契約成立・・・」

トイロがその言葉を呟くのとほぼ同時に、瑠とトイロの手の間から淡い光が漏れた。

「！！」

すると、トイロの右肩から手首に刻み込まれている黒いツタに似た模様が、静かに波打った。

「！」

そして、その先端部分が早送りしたかのように伸び始めた。

まるで、ツタの成長を早送りして見ているようだ。

そのツタは、みるみるうちにトイロの指の先端まで伸びて行き、そしてそれは、瑠の手の上にも伸びてきた。

「！」

瑠は気味悪さを覚えて、思わず手を離そうとする。

が、離れない。

まるで、そのツタがトイロと瑠のことを繋ぎとめてるかのようだ。

その黒いツタは、あっという間に瑠の腕半分のところまで伸びてきた。そして、瑠の肩まで伸びると、その動きはピタリと止まった。

今、トイロの右肩から瑠の左肩が、一本の黒いツタの模様で繋がっている。

「！」

途端、そのツタがトイロと瑠の手の境目ですっとちぎれた。ちぎれた部分は、瑠の手首までに収まるようにシュルルと縮む。

トイロのほうのツタも、同じようになった。

「・・・」

瑠は自分の腕をまじまじと見つめた。

確かにそこには、トイロと同じ、黒いツタのような模様が刻みこま

れていた。

瑠はその部分に、そっと手を乗せる。確かにそこには、自分の腕の実感がある。その模様は、瑠の肌の一部になっていた。

・・・今、自分はスイマとの契約が成立したんだ。

トイロは、手を瑠の手から離れた。

瑠もはっとして、トイロの手から自分の手を離す。

「瑠！おめでとう！これで瑠も、立派なムマね。トイロちゃんと仲よくするのよ」

瑠の隣にきた奈雪は、そう言って瑠の頭に手を乗せる。奈雪は、幸せそうな笑みを浮かべながら、瑠を見下ろしていた。

「・・・うん！」

芯はその光景を見て微笑んだ。トイロの隣に立っているゼンも、瑠の目の前のトイロも微笑んだ。

・・・ここにいてすべての者が、これから先の明るい未来を確かに信じていた・・・。

瑠は夜道をトイロと二人で歩いていた。

そう・・・これから、ムマの仕事に行くのだ。

向かうは風の家。

やっぱり初めのころは、知っている人のほうが“意思”の中に侵入しやすいらしい。本当は、顔が分かっていたれば相手の近くまで行く必要はないのだが、瑠にとってそのことはまだ不安だったので、ここまでできた。

「ついたよ」

瑠はトイロにそう言うと、風の家の前で歩みを止める。

トイロも、瑠の隣で歩みを止めた。

凧の家は、大通りに面した場所に建っている。しかし、ここからでは高めの塀に囲まれており家の中の様子は見ることができない。

「……」

溜は、家の二階を見上げた。

そこには窓がついている。……凧の部屋の窓だ。まだそこには灯りが燈っている。

他のスイマに、先をこされた様子はないようだ。

「まだ、他のスイマは来てないみたい」

トイロも、凧の部屋の窓を見上げてそう呟く。

「うん。よかった」

溜の口から、安堵のため息が漏れた。

「溜。……はいっ」

トイロは片方の手を溜に差し出して、その手を溜に握るように促した。

「……?」

溜は何事かと思いつながら、トイロの手を握った。すると、それと同時にトイロは地面を蹴る。

「!!」

トイロは溜の手を握ったまま、高々と飛び上がると塀の上に上手に着地した。

溜も、トイロに促されるまま塀の上に着地する。

トイロは、地球の重力なんて関係ないようだ。

その証拠に、トイロはまた高くジャンプすると、次は一階の屋根へスタツと着地した。

溜は慣れないことに戸惑いながらも、何とか転ばず屋根の上に着地することができた。

「これで、凧君の様子、見えるね」

トイロは手を溜から離し、こちらに振り返るとニコツと笑う。

「……うん!」

溜は笑みを返しながらそう言った。そして、視線をトイロから外す

と風の部屋の窓へ慎重に近づく。

・・・足元が不安定なので、足を滑らせないようにしなくては。

瑠はやつとの思いで窓の前まで来ると、窓の下から顔を半分だけだし、部屋の中の様子をそーっと窺う。

そこには、薄いカーテンがかかっているが、目を凝らすと何とか中の様子を見ることができた。

風は部屋の左側にあるベッドに寝転がりながら、DS^{ゲーム}をやっていた。・・・多分、“クルム”というゲームだ。クルムは、人気？1のRPG。

最近、そのゲームをやることにはまっていると、風は瑠に話してくれた。瑠も風の話を聞いて余計にやってみたくなったが、ゲーム機自体持っていないし、それに・・・

「私・・・行ってくるから。」

風君の“気”をとったら、中から窓の鍵、開けるね。そしたら瑠も入ってきて・・・？」

瑠はトイロの言葉にはっとして、彼女のことを見る。

「あっ・・・分かったよ」

トイロは頷くと、窓の棧に両手をかけた。そして、ふわりと飛び上がると、窓をすり抜け部屋の中に着地する。

・・・もちろん、風はその異変に気づく様子はない。

だってトイロは人間じゃない。だから、普通の人には姿も見えないし、声も聞こえない。

トイロは瑠に背を向けたまま、風に近づいて、そしてその手の中に白色の鎌を現した。

・・・あの鎌はゼン兄ちゃんが使っているのと同じ・・・スイマの鎌だ。

トイロはその鎌で、風の背中を何の躊躇いもなく大きく切り裂いた。するとそこから、数えきれないほどの光の粒が溢れだす。そしてそ

れらは、次々とトイレの体の中に吸い込まれるように消えていく。
と、凧が動いた。

凧は、大きな欠伸をしながらベッドから体を起こして、照明からぶら下がっている紐に手を伸ばす。そして、部屋の明かりを消すとベッドに潜り込んだ。

部屋はもう、真っ暗だ。凧は・・・眠ってしまった。

トイレはベッドで寝息をたて始めた凧のことを見届けると、安心した表情をこちらに向けた。

そして、手に鎌を持ったまま窓の方に近づくと、鍵を開け内側から窓を静かに開けた。

「・・・ありがとう」

瑠はトイレに小声でそう言った。

そして瑠は、窓の棧に両手をかけ何とか自分の体を持ち上げると、棧に片足をかける。そして、足に力をこめ一気に部屋へ飛び込み、床に足をついた（瑠はその時、自分が土足だったことに気づいた）。
瑠は急いで靴を脱ぐと、それを屋根の上に置いておく。

「瑠。私はここで待ってるね」

瑠が凧の前まで歩み寄ったとき、隣に立っているトイレがそう言った。

「・・・うん」

瑠は緊張気味に頷く。

（いよいよなんだ・・・）

と、その時、部屋の扉が開いた。外の光が部屋に差し込む。

「！！」

そこに立っていたのは、凧の母親だった。

彼女は、大きく目を見開きこちらを食い入るように見ている。

「え・・・？瑠君・・・？何で凧の部屋に・・・！？」

「っ・・・！！」

瑠は一瞬、目の前が真っ白になった気がした。

・・・自分はバカだ。ここは“ 凧の家族 ”の家なんだ。
またこの姿を見られてしまったなんて。しかも今度は“ 大人 ”に・
・。

「!!」

と、隣にいたトイロが凧の母親の前へ飛び出した。そして、彼女は大きな鎌を凧の母親に向かって振り下ろした。

凧の母親からは、先ほどより多くの光の粒が一気に溢れだす。そして凧の母親は、その場でしゃがみ込むとそのまま床に倒れるようにして眠ってしまった。

「どうしよう!!」

トイロは、今までにないヒステリックな声でそう叫んだ。

まだ凧の母親からは、光の粒が溢れだしている。

トイロはそんな彼女に背を向けると、溜のほうに振り返った。

「!・・・」

溜は驚いて声も出なかった。

トイロは泣いていた。

その顔は、決して穏やかではなく、絶望に歪んでいるように見える。

トイロは涙を流したまま、口を開いた。

「私・・・どうしようっ・・・!!」

この人・・・“ 条件 ”を満たしてないのに・・・私、“ 気 ”をとっちゃったっ・・・」

「えっ・・・!?!」

溜は、今の状況が理解できず、戸惑った。

ただ、今、理解できることは“ 絶望的な状況 ”だということだけだ。

トイロは鎌を手から離し、床にうずくまる。

その鎌は、トイロの手から離れると、まるで幻のようにその姿を消した。

溜は急いでトイロのもとへ駆け寄った。

「トイロ・・・一体どうしたのっ!?!」

トイロは顔を上げようとせず、整わない呼吸の中で言った。

「・・・条件を満たしてない相手の気をとることは、スイマの中で禁止されてることなのっ・・・。絶対にやっちゃいけないことなのっ・・・！」

でもっ・・・ムマの姿の瑠を・・・他の人に見られたら駄目だから・・・私っ・・・」

「・・・どうしてやっちゃいけないの!？」

トイロは悪いことなんてしてないよ! 気をとることなんて、トイロたちにとって当たり前のことなのにつ」

瑠も必死だった。

だってトイロは悪いことなんてしてない。なのに、こうも苦しそうに涙を流している。

「・・・あのねっ。瑠。“禁止されていること”は・・・どんなことがあっても、やっちゃいけない。」

もし・・・このことが、他のスイマの人にばれたら・・・私・・・」

「・・・」

瑠もトイロもその場で口を閉ざした。

瑠はスイマの人々が、決まりの中で生きていることを知った。自分たち（ムマ）と同じように。

そして瑠は、何とか冷静さを保ちながら口を開いた。

「大丈夫だよ! だって誰にもばれてないよ」

「・・・」

「・・・ずっと僕たちのなかで、秘密にしておけばいいんだよ」

「・・・」

トイロはその顔をゆっくりと上げ、瑠を見た。

・・・その顔には、安心とは程遠い表情が浮かんでいる。もちろん、瑠も“安心”はしていなかったが。

トイロは一端、目を伏せた。

そして、再び瑠の瞳を見据えると静かに口を開いた。

「・・・うん」

「・・・」

瑠の心に何かが勢いよく突き刺さった。

・・・トイロは全てを諦めてしまった表情だった。
きつと・・・トイロは、自分の望む未来を諦めしまったんだ。

瑠はそう思った。

トイロは目のふちに溜まった最後の涙を手で拭うと、ゆっくりと立ち上がる。

そして、重々しく口を開いた。

「瑠・・・あのね。彼女・・・風君のお母さん・・・何だけど、多分、彼女・・・瑠のその姿、見たと思うの・・・」

私は・・・眠らせることはできたけど、彼女はそれを忘れたわけじゃない・・・」

瑠・・・それでも大丈夫・・・？」

「！！」

瑠は言葉を失った。

そうだ。自分は風の母親にこの姿を見られてしまった。ほんの一瞬かもしれないけど。

それに、風にもこの姿を見られている。おそらく、風母親にそのことを話しただろう。

普通は信じがたいことだが、自分が実際にそれを見ると信じざるをおえなくなる。

つまり、風の母親が風の話を完全に信じることになってしまう、ということだ。そして風も、自分が見た光景を真実と確信する。

瑠は自分の心臓の音が今までになく、大きく聞こえるように感じた。
・・・このままではいけない。・・・きつと噂はすぐに広まってしまうだろう。

「っ・・・」

(どうしよう・・・)

一度の失敗は許される事はあっても、きつと二度目はないだろう。
・・・どちらとも自分の油断が原因なのだ。

「————」

俯いている瑠を、トイロが心配そうに見ているのが分かる。

「・・・もう・・・——いいや・・・」

瑠の自然と口にした言葉はそれだった。

瑠は、もうすべてがどうでもよくなった。どうせ、“許されない事”をしてしまったんだから、きつともう一つぐらい“許されない事”をしても大して変わらないだろう。

それにこの方法なら、“取り消し”に出来るかもしれない。

そして瑠は口を開いた。

「僕・・・が、風君のお母さんのその記憶・・・消せばいいんだよ。そして、風君の“あの記憶”も消しちゃえば・・・もう誰も見なかったことになるし」

「!!」

トイロの表情が大きく動いた。

「だっ・・・駄目だよ！だってそれは禁止されていることなんじゃないの？」

“必要としている記憶”を消しちゃうなんて・・・絶対にだめ！」

トイロの声には、焦りの感情しか混じっていないように聞こえる。

一方、瑠は落ち着き払った声で言った。

「分かってるよ。でも、もうどうでもよくなっちゃった」

「・・・どうでもって・・・」

瑠は、トイロの焦りの色の瞳をしっかりと見据えた。

「それに、トイロも禁止されていることをやったんだよ。

・・・そのこと内緒にしておくから・・・僕が今からやることも、誰にも言わないでくれる？」

トイロの瞳が苦しみに歪んだ。

・・・でも気にしない。だって、自分のやろうとしていることは、自分を守るための最後の手段なんだから。

「っ・・・だめだよ・・・」

トイロの声は消えてしまっそうだった。

「それじゃ、トイロのやったこと、ゼン兄ちゃんに言うから!!」

瑠はお構いなしにそう怒鳴る。

「…………言わないで!」

「……トイロが、僕のやることを誰にも言わなければ、僕もトイロのやったこと、誰にも言わない」

「…………」

「…………」

耳が痛くなるほどの長い沈黙。

そして……

「……分かった……」

トイロは一つ一つ言葉を選ぶようにして、そう言った。……確かにそう言った。

「約束だよ!絶対に!!」

「うん……」

トイロの声は呟くようだったが、その瞳はしっかりと瑠のことをとらえている。

(よかった……)

きっとトイロは、僕には嘘をつかないでくれるだろう。

瑠の心に安心感が芽生えた。

……しかしそれは、いつ壊れてボロボロになってしまうかも分からない……とても脆いものだった。

そんな二人の様子を、窓の外から静かに見据えている人影があった。

「大丈夫……。誰にも言わないから……」

彼女は、ふふっと笑うとその姿を闇に掻き消す。

もちろん、そのことは、瑠もトイロも気づくことはなかった。

瑠は風の意思の中にいた。

周りにあるのは、真っ白の空間。そして、そこに絡みついているの

は、おびただしい数の鎖。

既に瑠は、風の母親の“あの記憶”を消去した。そして、次は風の番だ。

「……」

瑠はその銀の瞳で、鎖たちに目を凝らした。鎖は皆、同じように見えるが、中に詰まっている記憶はすべて違う。

（……あった）

ひときは大きくて、ガッチリとした鎖。そこから、何個もの鎖が長く繋がれている。

……絶対に錆びることのなさそうな鎖だ。

瑠は手の中にある闇色の大きな鎌を、ギュッと握りしめた。

（……あれを壊しちゃえば、風君は僕のことを“化け物”になんか思わない……）

瑠は床を軽くけると、空中に浮き上がった。そして、また空間を蹴って上に飛び上がると、その鎖の前の空間にふわりと着地する。

「……」

瑠は鎌を高々と振り上げた。

……迷いなんてこれっぽっちも感じない。そして、その鎖を勢いよく切り裂いた。

鎖は一瞬にしてボロボロになり、そして、勢いよく弾けて……消えた。

「!!……」

途端、瑠は強い風によって、後ろへ吹き飛ばされる。

瑠は思わず目を閉じる。そして、何とか目をあけると空間に足をついた。

「……」

瑠は思わぬ出来事に内心、焦っていた。だってこんな強い風が起きるなんて、普通ではありえない。

……きつと、大き過ぎる記憶を消したせいだ。瑠はそう思った。

「!!……」

瑠は目の前の光景が目に入った途端、心臓が凍りつく思いがした。

・・・鎖が全てなくなっていた。

さっきの強い風のせいで、周りの鎖も全て吹き飛んでしまったのか・・・！？

そうしか考えられない。それほどまで“あの記憶”は風の意味にとって重要だったのだ。

「っ・・・」

瑠は息が詰まる思いを感じた。

一瞬にして、目のふちに涙がたまる。

・・・こんな事態、考えもしなかった。

風の今までの記憶は、全てなくなってしまった。

・・・自分が“あの記憶”を消してしまったせいで。

「！！」

すると、周りの景色が一気に変化した。

それと同時に、瑠の手の中の鎌も一瞬で消える。

・・・風の記憶が夢へと変わったのだ。

瑠は、夕焼け色に染まった教室に一人で立っていた。瑠のすぐ後ろには、窓がある。

「瑠君！帰ろ」

「！」

声の方を見ると、そこには風が立っていた。

背中には、真新しいランドセル。

「うん！」

瑠の目の前の机に座っていた“瑠”が、風の言葉に元気にそう答えた。瑠は、立ち上がると机の上に置いてあるランドセルを背負う。そして机と机の間をすり抜け、風のもとまで歩みよる。

そして二人は、楽しそうに話しながら教室の出口へと向かった。

「・・・」

銀色の髪の瑠は、その幸せな光景を目の前にして固まっていた。
(・・・いいな)

瑠は“夢の中の瑠”が羨ましかった。

あれが、ただの幻にすぎないことは分かっている。しかし、幻でも、彼らはしっかりとした意思があり、動いているように見えた。

瑠は静かに泣いた。

風のことを思っ泣いた。

自分のせいで風の“これから”を壊してしまった。なのに、夢の中はこんなにも居心地がいい。ずっとこの世界にいたかった。

(・・・これは・・・風君の一番望んでいることなの・・・?)

瑠の心の片隅では、そんな疑問がうまれた。

・・・そうだったらいいのに。

そうだったらいいのにな・・・。

だって瑠もそのことを望んでいる。

“風と一緒に小学校に通う”ということ。

瑠は、今まで“瑠”が座っていた席にそつと腰をおろした。

もう教室には瑠一人だけ。誰の声も聞こえない。

瑠は眩しすぎるオレンジ色の光に目を細める。・・・そして目を閉じた。

「・・・瑠！」

どのくらい時間がたっただろう。そう思った時に、自分の名前を呼ばれた。

瑠はゆっくりと目を開ける。

一瞬、目に入った景色はさっきまでと同じ、オレンジ色に染まった教室。

が、次の瞬間、その景色に何本もの大きな亀裂が入った。そしてその景色は、瞬く間にバラバラになり、ガラスの破片のようにそこらじゅうに散らばり始める。

「・・・」

(帰らなくちゃ・・・)

でないと、“この夢”が終わってしまう。

瑠は席から立ち上がると同時に、その姿を壊れゆく世界からかき消した。

瑠の足の裏に、床の感覚が伝わった。それと同時に、風の部屋に自分 は立っていた。

どうやら戻ってきたらしい。

風の部屋は夜の闇で包まれているのではなく、ほのかに明るい。

もうすぐで夜が明けるんだ。瑠はぼんやりとそう思った。

目の前にあるベッドの上には、風が小さな寝息をたてて眠っている。

「……」

瑠は静かに風の寝顔を見下ろした。いや……正確には“風だった人”を見下ろした。

このままずっと、目を覚まさないでいてくれればいいのに。そうすれば、ずっと“風”のままでいられるのに。

（ごめんね……風君）

全ては自分のせいだよ。そして、こんな苦しい思いをするのも、全て自分のせい。

だから許してくれるよね……？全てを自分のせいにするんだから。

「瑠……」

「！」

後に振り返ると、そこにはトイロの姿があった。

手に白い鎌は握られていなく、ただ心配そうに瑠のことを見据えていた。

「瑠……。どうしたの？ずっと帰ってこなかったから、心配してたんだよ……」

「……ごめんね。大丈夫だから！気にしないで」
「……」

トイロは瑠の言葉に、軽く頷いた。しかし、その表情には雲がかか

っているように見える。

瑠は、風の記憶を全て消してしまったことも黙っていたと思った。
「……もちろん、トイレにも。」

このことは自分しか知らない。だから、他人に話す必要なんてもち
ろんない。

ただ、自分の中で大切にそして嚴重にとどめておけばいいことの話
だ。

「……早く帰らなくちゃ。夜が明ける前に」

瑠はぼそりと言った。

「うん……」

トイレも弱々しい返事を返した。

第2話 (4)

瑠は、夜が明けるのとはほぼ同時に、家の玄関の戸を開いた。
家の中はひっそりとしている。

苺も奈雪も、おそらく寝ているのだろう。

・・・担当の時間帯はとうに過ぎている。

「瑠、ゆっくり休んだ方がいいよ・・・」

トイロが、靴を脱ぎ捨てている瑠に向かって心配そうに言った。

「うん」

瑠はトイロのことは見ようとせず、そのまま家にあがる。

・・・まだ心の整理がつかない。少しでも衝撃が加わったら、粉々に崩れてしまいそうだ。

「・・・」

瑠は、トイロの方には振り返らずそのまま階段まで行くと、重い足取りで二階へと上がった。

トイロは、瑠の姿が見えなくなるまで、そこに立ちつくしていることしか出来なかった。

(瑠・・・どうしたんだろ)

あんなに長い時間、相手の意思の中にいるなんて何か特別な理由があったのだろうか。

しかも、瑠の表情は決してよくなく、苦しいように見えた。
やはり、相手のあの記憶を消してしまったことを後悔しているのだろうか。

もしかしたら・・・自分とあんな約束なんてしなければよかった、
と思っているかもしれない。

「遅かったな」

「!・・・」

突然、ゼンがトイロの前に姿を現した。

ゼンは、玄関をあがったところの壁に寄りかかりこちらを見ている。
トイロはドキリとした。

・・・絶対に“あのこと”は口にしないようにしなければ。

「うん・・・。遅くなっちゃった」

「遅いにもほどがあるぞ!もう朝になるし」

「・・・うん。でも仕方ないよ・・・。私たち、仕事するの初めてだったし・・・」

トイロはドギマギしていた。

・・・自分の言葉に違和感はないだろうか。

「そんなに難しかったか？」

「うん。・・・ちょっとだけ。多分、瑠が手こずってたみたい」

トイロはとっさに瑠のことを口にした自分に少し後悔した。・・・でも、遅くなってしまった原因は、瑠にあるのは確かだ。

「瑠が?・・・そうか。確かに瑠はまだ小さいからな・・・」

「・・・うん」

「まあ、慣れるまでの辛抱だな」

トイロはゼンの言葉に曖昧に微笑んで頷いた。

トイロは辛かった。

・・・自分は、ずっとこの気持ちを抱いたまま、これから過ごさなくてはいけないのだ。

でも、仕方ない。それは瑠も同じ。

トイロは、このまま何事もなく、時が過ぎてくれるのを懸命に祈った。

「時間よ!瑠!」

「・・・」

瑠は奈雪の声で目を覚ました。

奈雪が、怒りの入り混じった顔で瑠のことを見下ろしてしる。

奈雪の背景に見える部屋の景色は、明るい。カーテンも全開に開かれていた。

おそらく、奈雪が開けたのだろう。

「……」

瑠はゆっくりと体を起こした。

「早くしたくしなさい。入学式に遅れちゃうわよ?」

「うん……」

そうだ。今日は入学式だったんだ……。なのに、全く嬉しい気持ちにはなれない。その理由は、嫌というほど分かっている。

瑠はベッドから立ち上がった。

奈雪は、瑠の背中を押して早く行動するように促す。

「で、どうだったの? 初仕事は?」

「!……」

奈雪の声は、明らかに瑠の答えに期待を膨らませているそれだ。

「……普通だよ!」

瑠は奈雪の方は見ずに、明るい声でそう言った。

「普通って……? それじゃ、分からないじゃない?」

「……」

瑠はその声を耳に入れながら、階段を勢いよく駆け降りました。

……今の瑠にとって、奈雪の姿を見ることがさえ辛いことだった。

瑠と芯と奈雪は、小学校へ向かうため、芯の車へ乗り込んだ。

芯が運転、奈雪が助手席、瑠が後部座席だ。

そして車は走りだす。

「……」

ふと、サイドミラーに映った自分の姿が目に入った。

そこには、黒髪と黒色の瞳を持った自分が映っている。

瑠はすぐさま、そこから目を離した。

それは偽りの姿・・・偽りの姿しか、他人に見せてはいけなかった。

偽りを隠すことは、以外に難しく、辛いことだと瑠は改めて実感していた。

「お父さん、やっぱりこの色じゃなくて、グレーのほうが良かったかしら？」

「・・・今更戻るわけにはいかないだろう。出かける前に、さんざん迷ってたじゃないか。・・・今日は、その色でいけ！」

どうやら奈雪は、まだ服装のことで迷っているらしい。

今日の奈雪は、化粧も髪型もいつもにもまわってきまっている。

（当たり前か・・・今日、入学式だしね）

入学式の主役は、自分たちのはずなのだが、自分以上に気合いが入っているのは母親のようだ。

・・・それは、卒園式でも同じようだった気がする。

「瑠ー、お母さんの格好、ちょっとおばさんぽくない？」

奈雪が、肩越しに振り返って瑠にそう問いかけた。

「・・・大丈夫だよ！」

瑠はなるべく笑顔でそう言った。

「・・・そう？」

「うん！」

奈雪は安心したように微笑むと、前に向き直る。

「・・・」

そして瑠は、気を紛らわすため、外の景色に目を移した。

桜の花びらが舞い散る中、歩きで入学式に向かう親子の姿がところどころに見られる。

その姿は皆、幸せそうだ。

「っ・・・」

瑠は泣きたくなった。

何で自分は、こうも辛い思いをしなくてはいけないのだろう。

前までは、仕事をするのが楽しみで仕方なかったのに。
今、自分の心を支配するのは、不安と恐怖。それ以外、何もない。
凧がない入学式なんて行きたくない、瑠はそう思った。

瑠は、他の新入生と一緒に体育館に入場した後、指定された自分の席へと着席した。

新入生の人数は、そう多くない。そのせいで、体育館がより広く感じられる。

やはり、凧の姿はなかった。

・・・当たり前だ。

凧の座るはずの席だけが、ぽっかりと空いており、その光景が目に入るたび心がズキズキと痛んだ。

「瑠君ー。凧君ってお休みなの？」

隣に座っていた同じ幼稚園の子が、話しかけてきた。

「・・・そうみたい」

「何で？」

「・・・」

瑠は口を閉ざした。

これ以上は何も言いたくない。嘘をつくのはもうんざりだ。

「これから、〇〇年度、桜ヶ丘小学校の入学式を開催いたします」
司会者の人が、マイク越しにそう言った。

そして、入学式は始まった・・・。

「瑠、こっちにおいで」

「！」

声の方を見ると、そこには奈雪のパートナーのスイマ・・・ミゾレの姿があった。

瑠は眉を寄せた。

瑠はミズレとほとんど話したことがない。

当たり前だ。だってミズレは、ほとんど自分たちの前には姿を現さないのだ。

ミズレは、ゼンと同じぐらいの容姿を持った女性だ。そしてミズレは、その容姿には似合わない大人びた表情を常に持ち合せている。

「・・・駄目だよ。今、入学式の途中だし・・・」

瑠は呟くような声で言った。

周りから見ても、一人で話しているように見えることを瑠は知っている。

普通的时候でも、そのような状況を怪しまれるのに、こんな入学式のときに話しかけるなんてもってのほかだ。

話している人と言え、ステージの上になってマイクを握っているおじさんぐらいだ。

ミズレは瑠の言葉を気にする様子なく、瑠に一步步近づくと瑠の手をとった。

「！」

「いいの？秘密がばれちゃっても。私が、秘密の上手な隠し方、教えてあげるのに」

「・・・え！？」

瑠の心臓が一気に高鳴った。

「ふふ。私、瑠とトイレの秘密、知っちゃったんだ。

あの日の夜の二人の会話、私、聞いてたんだよ。でも、瑠とトイレは私がいたことに気づかなかったみたいね」

「！！」

「でも、安心して？奈雪さんたちにはまだ言っていないから」
「・・・」

ミズレは、瑠の表情とは対照的に、それをふんわりと和らげる。

「私は、瑠とトイレの味方よ。決して誰にも言ったりしないから」

瑠は、ミズレの言葉を聞くとゆっくりと椅子から立ち上がった。そして、それと同時に呟いた。

「外で話そう・・・」

ミズレが、瑠の言葉に微笑んだのが見えた。

そして、瑠はそのまま早足で体育館の出口へと向かう。

保護者席の横を通り過ぎるとき、芯と奈雪の姿が目に入った。二人とも、出口へ向かう瑠の姿を目にして何事かとこちらを見ている。

「・・・」

瑠は二人には気づかないふりをして、そのまま体育館の出口へと向かった。

瑠が体育館を出たのと同時に、ミズレが隣に姿を現した。

しかし瑠は、ミズレの姿には見抜きもせず、その歩みを止めようと思わない。

「ミズレお姉ちゃん・・・。この建物からでしょうか？そっちのほうが安全だし」

瑠は黙々と歩きながら、隣を歩いているミズレにそう言った。

「そうね」

ミズレは、そのポニーテールに結わえた髪を踊らせて、こちらに振り向くと微笑みながらそう言う。

瑠とミズレは、短い廊下を抜けると、げた箱の横を通り過ぎて外へと出た。

人気はない。

学校にいるほとんどの人が入学式に参加しているようだった。

（・・・どこに行けばいいんだろ）

瑠は戸惑いながらも、渡り廊下を通って校舎の入口の重い扉とゆっくりと開けた。

ミズレは、扉を当たり前のようすり抜けて、瑠の後に続く。

瑠は教室がある廊下にでると、辺りをきょろきょろと見渡した。

（あそこがいいかも・・・）

瑠の目は、廊下の端にある教室に留まった。

その教室のドアの上についているプレートには、なんの文字も書かれていない。

普通なら、1年1組とか1年2組とかって書かれているはずなのに。・・・おそらく、今は誰にも使われていない教室だろう。

瑠はその教室の前まで、早足で近寄った。そして、ドアの前で歩みを止めると、それをゆっくりと開く。

「・・・」

教室の中には何もなく、ガランとしていた。ただ、端っこのほうに、使われていない机や椅子が並べて置かれているだけだ。

カーテンのついていない窓からは、太陽の陽ざしがさんさんと降り注ぎ、何もない教室の床を明るい色で染め上げている。

「いいんじゃない。ここ。誰も入って来なさそうだしね」

いつの間にか教室の中にいたミズレがそう言って、瑠に笑いかける。
「・・・」

瑠は、沈黙を守って教室に入ると、しっかりと入ってきたドアを閉めた。そして、ミズレの前に歩み寄ると、彼女と少しの距離を置いて立ち止まった。

「ミズレお姉ちゃん・・・。ミズレお姉ちゃんは、僕たちの味方なんだよね?・・・誰にも“あのこと”言ったりしないよね?」

「もちろん」

ミズレは、雲りのない漆黒の瞳で瑠のことを見据えた。

「・・・瑠。私に、偽りの姿なんて見せないで?私の前では、“本当の姿”でいて」

瑠はミズレの言葉にドキリとした。

「・・・嫌だよ。」

僕、学校ではこの姿でいる。万が一のことも・・・あるし」
もう二度と、同じ過ちを繰り返したくない、瑠はそう思った。

「私は“本当のあなた”に話したいの」

ミズレはそう言うと、瑠の腕を掴んで自分の方に引き寄せた。そして、その掌を瑠の両眼にそっと押しあてた。

「!」

瑠は瞳に違和感をもった。

恐らく、瞳の色がもとの色に戻ったのだろう。

「やめてよ!」

瑠はミズレの手を払いのける。

それとほぼ同時に、頭にかぶっていた黒髪のカツラもミズレの手によって外された。

「!」

瑠がミズレの方を見ると、彼女の手の上でその黒髪のカツラは灰になっていた。

「瑠にはその姿が一番よ」

ミズレは愛おしそうにそう言うと、瑠の銀の髪にそっと触れる。

瑠は目の前の光景が信じられなかった。

ミズレがこんなことをする人なんて、思いもしなかったからだ。

「何でっ・・・!?!」

「誤解しないで。瑠」

ミズレは、驚くほど落ち着いた表情でそう言った。

ミズレは、手の上にある灰を床に落とす。それらは床に落ちる前に、幻のように消えてしまった。

「・・・嘘を隠すには・・・嘘がいいと思わない?」

ミズレは微笑む。

一方、瑠は必死だった。

「意味・・・分からないよ!」

「分かるはずないじゃない。・・・だから私が教えてあげる」

今の瑠には、怒りの感情しか湧き上がってこなかった。教えることは当たり前だ。

もし、それがいい方法じゃなかったら僕は・・・。

「“本当の姿の自分を、偽りの姿”だと言えはいいのよ。・・・ね? そうしたら、本当のことは2つの偽りに隠れて見えなくなる」

「!・・・」

「だから、黒髪のカツラもいらなくなるってわけ」

瑠はその場で固まった。

(・・・そんなことできるわけない)

「瑠。・・・今日は帰ろう？」

「!」

振り返ると、そこにはトイレの姿があった。

「・・・トイレ」

「突然、そんなこと言われてもできるわけないよ・・・」

トイレは呟くようにそう言った。

トイレの歪んだ瞳は、瑠ばかりをみつめており、ミズレのことは見ようとしていない。

「私は瑠のことを思ってやったの。トイレには口出ししてほしくないな」

トイレは、ミズレの言葉に俯いた。

どうやら、トイレとミズレは初対面ではないらしい。

「・・・ごめんね。でも・・・」

「トイレ、帰ろう」

瑠が強めの口調でそう言うと、トイレの表情が一気に柔らかくなる。

瑠はそのままミズレの顔は見ずに、出口へ向かった。

瑠はミズレの考えが、まったく理解できなかった。

ミズレは本気でそう言ったのだろうか。それとも・・・。

「・・・」

どちらにしても、瑠の心に、また大きなもやが増えたことは確かだった。

瑠は、家に向かう車の中にいた。

トイレが上手く理由をつけて誤魔化して、芯のことを呼んでくれたのだ(ちなみに奈雪は、式の後に保護者の集まりがあるらしいので学校に残っている)。

「瑠、具合はもう大丈夫か？」

「・・・うん」

どうやら、入学式の途中に具合が悪くなった、ということになって
いるらしい。

「その上、トイレに間違っってカツラを流すなんて災難だったな。・

・この機会に、髪の色も変える練習、してみたらどうだ？」

「うーん・・・」

瑠は芯の発言に内心焦っていた。

トイレの説明の仕方が上手かったのか、どうやら芯はその理由で納
得したらしい。

「これから毎日、学校に通うんだし、早いうちに変えられるように
していた方がいいぞ」

「そうだね・・・」

確かにその通りだ。

そっちの方が、体育のときも安全だし。

「・・・」

いつの間にか芯の運転する車は、自宅の前の通りまで来ていた。

・・・もうすぐで“安全な”家へと帰れる。

瑠は、自室に入るとそのままベッドに倒れ込んだ。

(もう・・・いやだよ)

瑠は目を固く閉じた。そして、ギュッと唇を噛みしめる。

いつ、あの秘密はばれてしまうのだろう。

もしかしたら、ミゾレが自分の思いどうりにならなかったことに怒
って、秘密をばらしてしまうかもしれない。

瑠は秘密を隠し通す自信はあった。それにトイレも、自分から秘密
をばらすことは絶対にしない。

問題はミゾレだ。

「・・・」

瑠はミゾレが、自分を裏切らないことをただ心の底から祈るしかできなかった。

「!・・・」

瑠は目を覚ました。

いつの間にか眠ってしまったようだ。

既に、部屋の中は薄暗い。

瑠は慌てて飛び起きると、枕もとに置いてある目覚まし時計に目をやった。

午後7・・・43

(速くしないと・・・)

仕事の時間になってしまう。

瑠はタンスの奥にしまっておりある適当な洋服とズボンを引っ張りだして、それに着替えた(入学式の服装のまま眠ってしまったのだ)。

そして、慌てて部屋から飛び出すと、階段をドタバタと駆け降りた。

「瑠!はやくしなさい」

階段の下で待ち受けていた奈雪がそう怒鳴る。

「うん」

瑠は流すようにそう言うと、そのまま玄関へ向かった。

そして、いつもの運動靴を履いていると、奈雪が手にジャンパーを持ってやってきた。

「今日は、冷え込んでるみたいだからこれ着て行きなさい」

「・・・うん」

瑠は、奈雪からジャンパーを受け取った。そして、黙ってそれに腕を通す。

「いってらっしゃい。気をつけるのよ。夜道は危ないんだから」

奈雪のほうを見ると、彼女は柔らかな表情で瑠のことを見ていた。

「うん・・・いってきます」

瑠は呟くようにそう言うと、奈雪に背を向け明るい玄関を後にした。

「瑠、今日は・・・誰の家に行くの・・・？」

大通りを曲がって裏の小道に入ったところで姿を現したトイロが、瑠にそう問いかけた。

「・・・」

「また凧君の家、行く・・・？」

瑠はトイロの言葉に、彼女から視線を外す。

本当は「うん」と言いたい。

けど・・・言えるはずがない。

だって、凧の記憶はすべて自分が消してしまったのだから。

トイロは、そのことを知らないからそんなことが言えるんだ。

トイロは瑠の無言の答えに、戸惑いの表情を浮かべた。そして、少しの沈黙の後、口を開いた。

「どうする・・・？ 凧君の家で大丈夫？」

「凧君の家なんて行けるわけないよ！！」

瑠は、気づいたらそう叫んでいた。

トイロはそれと同時に、大きく目を見開く。そしてその表情は、みるみるうちに苦しみの表情へと歪んだ。

「ごめんね・・・。確かにそうだよ。もう、あんな失敗したくないもんね」

トイロの声は、最後のほうにはほとんど呟くようになっていた。

「・・・」

瑠は自分が嫌になった。

間違いなく、さっきの言葉はトイロのことを傷つけてしまったんだ。

「トイロ・・・ごめ・・・」

瑠は、次に続けるはずの言葉を言うことができなかった。

言いたくても・・・言えない。

だって、次から次へと涙が溢れてくる。

それに、胸が苦しくて苦しくて、張り裂けてしまいそうだ。

「瑠！どうしたのっ・・・!？」

トイロが、驚きと不安が入り混じった表情でこちらを見ているのが分かる。

瑠は、トイロのことは見ようとせず、ただ次から次へと流れてくる涙で自分の頬を濡らしていた。

「トイロ・・・僕っ・・・もう嫌だよっ・・・」

瑠は整わない呼吸の中で、その言葉を口にすることで精一杯だった。トイロはただ、不安げな表情でこちらを見据えている。そしてトイロは、呟くように言った。

「私も・・・嫌だよ・・・」

「僕はもっと嫌なんだよ!!！」

瑠の叫び声に、トイロの表情が大きく動く。

・・・また言ってしまった。

瑠の口をついででる言葉は、自分自身にもとめられなかった。すべてを話して楽になりたい。この心にたまり続けている重い鉛を、全て吐き出してしまえたらどんなに楽だろう。

「・・・トイロ・・・僕・・・凧君の記憶、全部消しちゃったんだ・・・。あの記憶はとても大きくて、その大きな記憶を消しちゃったら・・・他の記憶も全部、消えちゃったんだ・・・」

不思議とその言葉は、なんの抵抗もなく、瑠の口から出てきた。

トイロにも話さない。自分だけの秘密にしていようって思っていたはずなのに。

トイロは一瞬、驚いたように目を見開いた。

「そうか・・・」

その言葉を口にしたトイロの表情は、以外にも落ち着いており穏やかだった。

「僕っ・・・もう嫌だ。ずっと隠すことなんて嫌だっ・・・もうやだよ・・・」

瑠は、その場に蹲った。

涙が止まらない。視界が潤んで何も見えない。

「溜・・・泣かないで・・・」

トイロは戸惑い気味にそう言うと、溜の隣にゆっくりとしゃがみ込んだ。そして、その掌で、溜の背中にそっと触れる。

それでも溜は、嗚咽を漏らしてその涙を止めようとはしない。

トイロはそんな溜の姿を見て、胸が苦しくなった。

溜は自分以上に苦しんでいる。まだこんなにも小さいのに。

それなのに自分は、溜を安心させてあげる言葉さえも言えやしない。言おうとしてもその言葉は、口に出す寸前で止まってしまう。

「っ・・・」

トイロは眼がしらが熱くなるのを感じながら、立ち上がった。

泣いてはいけない。

トイロは手に白い鎌をしっかりと握りしめていた。そして、その鎌で溜の背中を大きく切り裂く。

溜の嗚咽は、だんだんと小さくなり、そして消えた。

キラキラした粒がトイロの体へと消えていく。

「・・・！」

トイロは、溜の体が地面に倒れるまえに、彼のことを両腕で抱きかかえた。

溜は穏やかとは言えない表情を浮かべ、小さな寝息を立てている。

トイロは、一時的にでも溜に辛い思いを忘れてほしいと思った。

今の溜を救う方法と言えば、こうするしかない。もう“掟”のことはほとんど頭の隅のほうにあった。

溜がたくさん苦しんでいるのだから、自分の苦しみが少し増えたぐらい我慢できる、そう思った。

「・・・」

トイロは溜の顔を静かに見下ろした。そして、彼の顔を濡らしている涙をそっと手で拭う。

そして・・・トイロは、“ある事”を決心することができた。

瑠はゆっくりと目を開いた。

目に映ったのは、見慣れた公園。ただ、いつもと違うことは、夜だということ、雨が降っているということだ。

瑠は、そんな公園の休憩場所のベンチに深く腰掛けて眠っていたようだ。

「瑠、大丈夫？」

「！・・・」

横に振り向くと、そこには不安げな表情でこちらを見ているトイロの姿があった。

トイロの顔を見た途端、全てのことが瑠の頭の中に舞い戻ってきた。

「・・・トイロが僕のこと・・・眠らせたの？」

「うん・・・でね・・・雨、降ってきたから雨宿りできるところに来たの」

トイロは悲しそうに微笑んでいる。

瑠はトイロから視線を外し、俯いた。

心の鉛は・・・まだとれそうにない。

「・・・ぜんぶ、話しちゃわない？」

「！」

瑠はトイロの言葉に、バツと顔を上げた。

「・・・何を？」

トイロは少しの沈黙の後、瑠のことをしっかりと見据え言った。

「私たちの秘密にしていること・・・」

「！！」

瑠はトイロの口から発せられた言葉が信じられなく、大きく目を見開く。

トイロはそんな瑠とは対照的に、その穏やかな表情を崩そうとはしない。

「・・・そうしたら、この苦しみから解放されるよ・・・？」
「！・・・」

「私も・・・こんな辛い・・・もう嫌なの」
瑠の心の中で、何かがパチンと弾けた気がした。

そうか・・・。トイロも“辛い”んだ。トイロも・・・“嫌”なんだ。

分かっていたつもりだったのに・・・トイロの静かなその声は、初めて知ったことのようにじんわりと瑠の心にしみ込んできた。

トイロは続けて口を開く。

「私・・・瑠の苦しむ姿、もう見たくない。だから・・・お願い。
一緒に“苦しみ”から逃げよう」

「・・・」

（逃げて・・・いいの？トイロも一緒に逃げてくれるの・・・？）
「大丈夫。瑠には私がついてるし、私には・・・瑠がついてくれるから」

トイロは弱弱しく微笑んだ後、その瞳を伏せる。

「うん・・・」

瑠は頷いた。

・・・頷くことができた。

きつと大丈夫だ。だって隣にはトイロがいてくれるんだ。こんなにも自分のことを大切に思ってくれているトイロが・・・。

とても弱くて不器用な答えかもしれないけど、これがトイロの出した答え。自分のことを思ってたしてくれた答えだ。

・・・そして、瑠自身の出した答えなんだ。

瑠とトイロは、小雨の降る中、自宅へと向かった。

今日は、いつもより肌寒い気がする。瑠が家を出る前、奈雪がジャンパーを持ってきてくれたことに改めて感謝した。

ところどころにひっそりと建つ街灯の明かりが、小雨を鮮明に映

し出している。

どうやら、小雨であっても降り方は強いようだ。

瑠は傘の代わりに、ジャンパーのフードを頭にすっぽりと被った。

「・・・トイロ・・・濡れちゃわない？」

「あっ・・・私は大丈夫」

「・・・」

それっきり、二人の会話は途絶えた。

ただ、夜の街に二人の足音だけが静かに響いている。

瑠はふと、自分の足元に視線を落とした。

そこには、街灯に映し出された自分の真黒い影がコンクリートに映っているが見える。しかし、トイロの足元には影がなかった。

・・・そうか。トイロは“このせかい”の人じゃないから、雨が降っても肌寒くても関係ないんだ。

・・・そう思っているうちに、自宅の前についたようだ。

「・・・」

心臓の鼓動が瞬く間に早くなる。

瑠はギュッと拳を握った。

(ちゃんと言わなくちゃ・・・)

するとトイロが瑠の傍らに立ち、呟いた。

「瑠・・・行こう」

「・・・うん」

と、その時、ミズレが二人の前に姿を現した。

「こんばんは。瑠、トイロ」

ミズレはにっこりと笑う。

「・・・」

瑠は一気に気が抜けた。が、まだ早鐘のような心臓の音は完全にはおさまらない。

「ミズレ、どうしたの？」

トイロは控えめな声で言った。

「私、重要なことに気付いたから・・・二人にお知らせしようと思

って」

「!・・・」

瑠はドキリとした。

重大なことって・・・一体なんだろう。

今まで自分たちが気付かなかったこと？

それとも、ミゾレしか知らないこと？

しかし・・・どちらにしてもあまりいいお知らせとは思えない。

「お知らせって・・・何？」

瑠はしっかりとミゾレの瞳を見据えた。

ミゾレも、瑠の不安が入り混じっているであろう瞳を見据える。

「ふふ。人間の使う道具は凄くなって思っ。・・・例えば“テレビ”とか」

「!」

「だって、テレビにはいつも新しい情報がながれているみたいだし。・・・ほんと驚いた。だって瑠の友だちの子が、両親の顔も名前も覚えていないんだって。そのことも、奈雪さんと芯さんが見ているテレビでながれてた。ほんと・・・驚いた!」

「!・・・」

一瞬の沈黙。

ミゾレは言葉を続ける。

「それ、今日の朝の出来事よ。たしか・・・その前の夜、瑠たちってその子のところに仕事に行ったんだよね？」

「・・・」

「おかしい事件よね。・・・まるで寝ている間に、全部の記憶が無くなっちゃったみたいに」

瑠はミゾレの言葉が言い終わらないうちに、玄関へ向かって走り出していた。

ドアノブに手をかける。

・・・何度ドアノブを回しても、それは開かない。それに、いつもならドアの下から漏れている中の光が今日は見えない。

「これ、郵便受けに入ってた手紙よ」

隣りに姿を現したミズレが、瑠の手を取りその手に手紙を握らせた。

「!!・・・」

ミズレは微笑む。そして呟くように言った。

「さようなら。瑠」

ミズレは姿をかき消した。

瑠は震えていた。

・・・寒さのせいではない。“恐怖”で。

そして瑠は、震えの止まらない指先で手紙の封をきると、中の手紙を取り出しそれを広げた。

そこには、自分にも読めるような全てが平仮名で書かれた文が書いてあった。

りゅう。おまえはムマしっかくだ。

きまりごとをまもることのできないおまえは、このいえにかえってくるな。

とても短い文章だ。

しかし、それらの文字は、今、瑠が陥っている状況を的確に表していた。

「っ・・・」

震えは止まった。しかし、その瞬間、瑠の心は暗闇に染まった。

瑠はその手紙をゆっくりと折りたたんで、ドアの前の床に落とす。

そして隣に立っているトイロには目もくれず、方向転換するとその場から駆け出した。

・・・自分の考えが甘かったんだ。人一人の一生・・・それも、風の一生をめちゃくちゃにしておいて、ただで済むはずがない。

「瑠!!どこ行くの!?!」

トイロの叫び声が背後から聞こえた。

瑠はトイロの声なんて気にしなかった。

「!!」

と、歩道に出たところで、誰かに手首を掴まれた。弾かれたように振り返ると、そこにはトイロの顔がある。

「っ……!! 離せっ!」

瑠はトイロの手を乱暴に振りほどいた。

「瑠……」

トイロの黒い瞳には、今にも溢れだしそうなほどの涙が溜まっていた。

「……雨が強くなったようだ。

被ったはずのジャンパーのフードもいつの間にか外れており、冷たい雨が、瑠の頭や頬へ激しく当たる。

そのせいで、瑠の銀の髪も銀の瞳にも雲がかかったように暗い色に見えた。

「トイロはいいよね!! スイマだからっ! “こっちのせかい”のこんなんで気にする必要ないし!!」

「りゅ……」

「僕、スイマになりたかった! ムマなんてもう嫌だ。何で僕だけ……なの!? 何で……っ」

トイロの歪んだ表情が瑠の瞳に映った。

今のトイロは、口を開こうとせず、その瞳で瑠のことを見据えている。

と、その時トイロが何かを呟いた。

しかしその言葉は、激しく降る雨のせいで聞き取ることができない。

瑠は構わず叫び続ける。

「皆、ずるいよ!!! いつも僕だけ不幸だっ……。僕っ……。しにた……」

「それじゃ、スイマになる?」

「!」

瑠はトイロの落ち着き払った声に、大きく目を見開いた。

そして、次の瞬間、トイロが瑠の目の前から姿をかき消した。

「!!」

背後から人の気配がした。

そして、それとほぼ同時に瑠の首元に何かを突きつけられる。

・・・それは間違いなく、スイマの鎌だった。

「私・・・ムマが死んだら、スイマになるって話を聞いたことがあるの」

トイロの呟くような声が、背後から聞こえる。

トイロはより一層、鎌の刃先を瑠の首筋に近づけた。

「・・・私が望めば、この鎌は“人を傷つける”こともできるんだよ・・・？」

瑠は身動きがとれなかった。

だって、少しでも動いたらこの刃が瑠の喉を切り裂いてしまうかもしれない。

「っ・・・嫌だよっ・・・僕やっぱり、スイマになんてなりたくないっ・・・死にたくないよっ・・・!!」

瑠は泣いていた。

トイロまで僕のことを裏切るの・・・？

これじゃ僕は一人ぼっちだ。

と、首もとの鎌が音もなく消えた。

「・・・ひっく・・・ひっく・・・ひっぐ・・・」

雨の音に混じり、誰かの鳴き声が聞こえてくる。

瑠は、涙と雨で頬を濡らしたまま、後ろに振り返った。

「ごめんねっ・・・嘘なの。私の鎌で、人を傷つけることなんてできない・・・。私っ・・・瑠のこと、傷つけないよ・・・!」

トイロは次々と流れてくる涙を手で拭いながら、必死にそう言った。

「・・・」

瑠は地面に倒れた。

もう、何もかもが限界だった・・・。

トイロは倒れた瑠の傍らにしゃがみ込み、膝を抱えて蹲る。

・・・瑠に死にたいなんて言っただけじゃなかった。

瑠は、生きる喜びも死の哀しみもまだ理解していない小さな小さな子だ。

そう思うと、自然と体が動き口を継いで出た言葉は、瑠を傷つけるものでしかなかったのだ。

・・・たとえばそれが嘘でも、自分は瑠を傷つけてしまった。

自分は本当に、瑠のパートナーになって正しかったのだろうか。そう考えずにはいられなかった。

もし、他の誰かが瑠のパートナーになっていたら、瑠はこうも苦しまなくて済んだかもしれない。

雨は止まない。

冷たい雨はトイロの体を通り過ぎ、地面に激しく打ち付ける。

冷たい雨は瑠の体に激しく打ちつけ、彼の体をより一層冷たくさせる。

トイロは瑠のことを救ってあげたかった。

しかし、“本当の冷たさ”を理解できない自分には、それは無理かもしれない・・・そう思った。

第2話 (5)

瑠は目を開いた。

瑠は病院のベッドの上に横になっていた。そして瑠は、夜の闇に包まれた病室内で、一人ゆっくりと体を起こす。

静かな病室内に、雨音だけが響いた。

(どうしてこんなところにいるんだろ・・・)

自分は雨の中の公園にいたはずなのに・・・。トイレと一緒に。

「っ・・・」

頭がズキンズキンと痛む。それに吐き気もした。

瑠は病室内に響く雨音が嫌だった。

瑠は素足のままベッドから降りると、その場から逃げるようにして病室を後にした。

薄暗い廊下をしばらく歩くと、ひらけた場所にでた。

どうやらそこは、小さなロビーらしい。

ソファが何個か並べて置いてあり、その向かいに小さな本棚がある。

そしてそのスペースだけ、明かりが灯っていた。

「・・・」

瑠は光が目に入って、少しばかり安心する。そして、ソファの端っこにゆっくりと腰をおろした。

「やればできるじゃない」

「！」

いつの間にか瑠の隣に座っていたミズレが、そう呟いた。

ミズレは表情を失った瑠に微笑みかける。そして彼女は、すっと立ち上がると瑠の手を引いた。

瑠はされるがままによろよると立ち上がる。

ミズレは窓の前まで行くと、手を離し窓のカーテンをサッと開いた。

「!・・・」

窓ガラスには、黒髪の自分と黒い瞳の自分が映っていた。

「トイロが病院に連絡してくれたみたいよ。で・・・病院の人が来た時には、瑠はその姿になってみたい」

「・・・」

ミズレはカーテンを元にもどす。

瑠はその姿になった覚えは全くなかった。・・・無意識のうちにやったとしか考えられない。

「瑠には才能があるのよ。あの大きな記憶を消すなんて、普通はできないし」

ミズレは瑠の気持ちを知ってか知らずか、淡々とそう言う。

瑠はこの場から消えたかった。

頭も痛いし、ミズレの話なんて聞きたくない。

「・・・瑠のお父さんとお母さん、もう瑠に会いたく・・・」

「もういいよ!!・・・そんなのもういい!!」

瑠は必死にそう叫んだ。

頭が割れてしまいそうだ。

吐き気と頭痛で目の前の景色が歪む。

「・・・そう」

ミズレは少しの沈黙の後、そう呟いた。

瑠は気分の悪さに我慢できず、その場にしゃがみ込む。

「・・・病人はちゃんとベッドで寝てなくちゃだめよ?」

ミズレのその声が聞こえた後、彼女の気配は瑠の隣から消えた。

瑠は一週間ほどその病院で過ごした後、施設に入ることになった。・・・両親はいない、と嘘をついた。本当のことを言ったとしても、結果的には自分が傷つくことになる、そう思った。

瑠は施設に入居してからも、両親のことは考えないように努めていた。そして、その空白は施設にいる先生たちが上手に埋めてくれた。

しかし、時々、隙間から冷たい風が入り込む。いや、時々ではない。ほぼ毎日だ。

きっとその原因は芯と奈雪との思い出だろう。

瑠はいつの間にか、二人の温もりを思い出のなかでしか考えられなくなっていた。

そして、今の瑠の感情は“怒り”だった。

・・・いつか見返してやりたい。

瑠は、施設の先生や仲間にあ想像を振りまきながら、そのことばかりを考えるようになっていた。

そんな日のこと・・・

「今日は新しいお友だちを紹介しますよ」

朝食をとるため、皆が食堂に集まったときだ。先生が前に立って、笑顔でそう言った。

「!？」

瑠は一瞬、目の前の光景を疑った。

先生の隣に立っている人・・・その人は風だったのだ。

「新しいお友だちの、田嶋 風くんです。皆、仲良くしましょうね
!」

『はい』

皆は元気よく返事をする。

風も、あの時とさほど変わりなく、恥ずかしそうに微笑んでいた。

一方、瑠は固まっていた。

（凧君・・・元氣そうだ）

しかし、凧がここにいるということは決していいことではない。

・・・両親と一緒に暮らせる状況ではなくなったということだ。

「ここ座ってもいいーい？」

「！」

ドキリとして声の方を見上げると、そこにはいつの間にか凧が立っていた。

「う・・・ん」

瑠は視線を泳がせながら、何とかそう言うことができた。

凧は椅子を引くと、そこに腰をおろす。

「ねえ・・・凧君。僕と凧君って会うの初めてだよな？」

瑠は思わずそう言ってしまった。そして、次の瞬間には言ってしまったことを後悔した。

・・・答えなんて分かっているはずなのに。

そして、凧は言った。

「えっ・・・うん」

「・・・っ・・・」

凧は瑠の質問に驚いたようだった。

当たり前だ。なのに、こうも胸が締め付けられる。

「名前・・・何ていうの？」

瑠が視線を下に落としていると、凧がそう質問してきた。

瑠は目の淵にたまった涙を拭きとってから、呟くように言った。

「・・・りゅ・・・う」

その日の夜・・・。

瑠は、銀の瞳と髪を夜闇の中に輝かせて、一人で部屋に立っていた。同室の瑠と同じ歳の子たちは皆、すやすやと眠っている。

—そう、瑠は仕事を終えた。

「溜・・・おつかれさま」

白く輝く鎌を持ったトイロが、溜の前に姿を現した。

「うん」

溜は微笑む。

最近の溜にとって、仕事の時間が一日の中で最も楽しみな時間だった。

―皆のみる夢の中にいれば、幸せを味わうことができる。たとえばそれが幻でも、溜にとってはそれが心の支えだった。

「溜・・・廊下に誰かいるみたい」

「！」

溜はトイロの言葉にどきりとして髪色と瞳の色を黒にする。

「・・・」

溜は耳を澄ました。確かに廊下から誰かのいる気配がする。

溜はそっとドアに近づくと、それを少しだけ開いて廊下の様子を窺う。

トイロも一緒に、ドアの隙間から廊下の様子を窺っていた。

「！・・・」

そこにいたのは施設の先生だった。

しかし、彼女は溜とほとんど関わりのない先生だった（この先生は、もっと年齢が上の人を担当している）。

彼女は、急いだ様子でエプロンを外し、それを手持ちのバッグに詰め込んでいる最中のようなのだ。

（なんでそんなに急いでるんだろ・・・）

溜がその理由を聞こうと、彼女の前に姿を現そうとしたその時・・・

溜はその動きをぴたりと止めた。

―彼女の黒髪が、みるみるうちに金色に染まっていく。そして、横顔から見える彼女の瞳までもが、金色に染められたのを溜は確かに見た。

次に、彼女の肩から手首までに刻み込まれたツタの模様が溜の目に留まった。

「先生・・・ムマだったんだ」

瑠は知らぬ間にそう呟いた。

「施設に、瑠以外のムマがいたなんて・・・」

トイレも驚いた様子でそう呟く。

先生はその間にも用事を済ませ、早足でこの場を去ってしまった。

「っ・・・」

瑠はドアを開いた。

そして瑠の心には、嬉しさの感情が芽生えていた。

・・・先生も自分と同じように、偽りの姿で生活してるんだ。

瑠はその先生の家の前に立っていた。

瑠は先生の行き先と、急ぎの理由が知りたかった。だから、先生の後をこっそりとつけ、行き着いたのが先生の家の前だったというわけだ。

「瑠。どうする？あの人・・・家の中入っちゃった」

瑠の隣に姿を現したトイレが、家の玄関先を見ながら言った。

「・・・」

瑠はふと、二階の窓を見上げた。

明るい部屋の中に、数人の人影が見える。

「トイレ、あそこ・・・連れてって」

「・・・うん」

瑠は、一階の屋根の上を指差した。

トイレは、差し出された瑠の手を握り締めると、地面を足でける。

たちまち、瑠とトイレは屋根の上にスタツと着地した。

瑠はトイレの手を離すと、はやる気持ちを抑えてそっと窓から中の様子を窺った。

「・・・」

その部屋にあるベッドには、金髪の女の子が眠っていた。

彼女は、見た目的に瑠と同じぐらいの年齢に見える。

そして、そのベッドの横に膝をつき、心配そうに女の子の顔を覗き込んでるのはあの先生だった。

先生は女の子の額に、そっと掌を乗せる。そして、先生は安心したように微笑んだ。

「っ——・・・」

瑠の心に何かがグサリと突き刺さった。そして、たちまちその部分は、ズキズキと痛みを帯び始める。

先生の笑顔が、自分の母——奈雪のそれと似すぎていた。

今思えば、あの先生は何となく奈雪の雰囲気と似ているところがあった。

しかも、今の先生の姿——金の髪に金の瞳の姿だと、ますます奈雪に似ている気がする。

今、奈雪は何をしているのだろう。

きっと、自分のことなんて、これっぽっちも思ってくれていないかもしれない。

・・・いや、自分のことなんてこれっぽっちも思っていないはずだ。だって、あの時から数ヶ月も過ぎた。それなのに、連絡の一つもないんだから。

「トイロ・・・先生の“気”って」

「えっ・・・」

トイロは弾かれたように、こちらに振り向く。

「僕たちは・・・掟を破ることなんてもう怖くない。そう思わない・・・？」

「——・・・」

瑠は表情を歪ませたトイロから視線を外すと、ギュッと唇を噛みしめた。

あの笑顔を自分の目の前から、消し去ってやりたい。みんな不幸にしてやりたい。

——・・・自分と同じように。

先生は自分と同じ“ムマ”だが、自分とは全く違っていた。自分と

は正反対の世界を生きている人だと瑠は思った。

だから瑠は、余計に怒りが募っていた。

母に似たあの微笑みを、この世から消してやろう・・・そう思った。

そのことは見返したことになることを瑠は知っている。

しかし、瑠には今の感情を抑えることができなかった。

トイロは瑠の顔を一瞥すると、その目をふせる。そして「分かった」と呟くと、壁をすり抜け部屋の中に入って行った。

先生は、突然部屋に入ってきたトイロの姿を見て、驚いたようだ。そして先生は、トイロに何かを言ったようだが、ここからではそれを聞き取れなかった。

するとトイロは、手の中に白い鎌を現した。そして、それで先生の体を勢いよく切り裂く。

多くの光の粒が現れたのと同時に、先生はベッドに上半身を倒して動かなくなった。

「・・・」

トイロはその光景を静かに見届けた後、窓の鍵を内側から開けてくれた。

それと同時に、トイロの苦しみに歪んだ顔が瑠の目に映る。

「・・・」

瑠はトイロの顔からすぐさま顔を背けた。

瑠は窓を開けると、靴を脱ぎすて部屋に入る。そして、先生と女の子が眠っているベッドにゆっくりと近づいた。

瑠はベッドの横まで歩みよると、そこで動きを止めた。

「・・・」

瑠は先生の寝顔を一瞥した後、女の子の顔を見下ろした。

女の子の顔は微かに赤くなっており、彼女には微熱があるらしかった。

（この子もムマなの・・・？）

自分と同じぐらいの歳のムマに、瑠は会ったことがなかった。

髪の色はそうだが、この状態では瞳の色までは確認できない。

「・・・」

瑠は女の子にかけてある薄い布団を、少しだけ捲ってみる。

・・・女の子の腕には、契約したムマの証――ツタの模様は刻み込まれていなかった。

「・・・」

瑠は布団を元の位置に戻す。

そして、先生の方に視線を移した。

しかし、瑠の頭に浮かんでいるのは施設に来た凧の顔だ。自分が、先生の記憶を消せばこの親子は凧の親子のように一緒に暮らすことは無理になるだろう。

瑠はそれでも構わなかった。むしろ・・・そのことを望んでいた。
「・・・」

瑠は先生の顔をじっと見下ろし、その髪と瞳を銀色に染め上げる。
瑠の後方には、目の淵に今にも溢れだしそうな涙をためたトイレがたたずむ。

瑠はそんなトイレには振り返ることなく・・・この場から姿を？き消した。

瑠は真白の空間に立っていた。

空間に絡みつくのは、大量の鎖。

そして、瑠の手の中には闇色の鎌。

錆びている鎖には目もくれない。目的は、必要としている鎖。

（そうだ。家族との記憶だけを消してやろう）

そうしたらきっと、あの微笑みは・・・もう生れない。

瑠は鎌を両手でぎゅっと握りしめると、空間を足で蹴り飛び上がった。そして、鎖の前にふわりと着地する。

瑠は目の前にある鎖をしっかりと見据えると、鎌を大きく振り上げた。

・・・そして、切り裂いた。

鎖にはたちまち亀裂が入り、粉々になって・・・消えた。

瑠はそれを見夢中で繰り返した。

罪を感じることもさえ、少しもしなかった。

——・・・ただ、必死だった。

と、周りの景色が一変した。

瑠の足がついている空間は、いつの間にかフローリングの床になっており、周りを見渡すと、部屋の中のようなだった。

左側にある大きな窓からは、そのカーテン越しに淡いオレンジ色の光が差し込んでいる。そして、テレビにテーブルにソファ。ここは、誰かの家の居間なのだろうか。しんと静まり返っており、人のいる気配はしない。

「！」

瑠はどきりとした。

人はいないと思っていたが、そこに人がいた。彼女は、部屋の隅に膝を抱えて蹲っている。

（お母さん・・・？）

瑠は一瞬、そう思った。なぜなら彼女は、美しい金色の髪を持っていたからだ。しかし、その考えはすぐに打ち消された。

だってここは、先生の意思のなかだ。先生の夢の中に奈雪がいるはずない。

彼女が自分の膝を抱えて蹲っているせいで、瑠は彼女の顔を確認することができなかった。

（先生かな・・・？）

瑠は一步步、彼女に近づく。

「・・・」

瑠は、心の片隅で思わずにはいられなかった。

金色の髪を持った彼女は、もしかしたら自分の母かもしれない。

「ごめんなさい・・・」

突然、彼女が消えてしまいそうな声でそう呟いた。

瑠はドキリとした。

（もしかしたら・・・）

彼女は瑠に謝っているのだろうか。

「本当にごめんね・・・」

彼女がまた呟く。

・・・彼女はもしかしたら、瑠に謝っているのかもしれない。

“瑠を見捨てた”ということ。

「っ——・・・」

瑠は拳をギュッと握って、首を左右に振る。

（この人は・・・お母さんのはずなのに・・・）

そして、瑠は気づいてしまった。・・・自分の本当の気持ちを。

自分は、彼女が奈雪であることを望んでいる。・・・奈雪が、彼女のように自分のことを思っ泣いてくれていることを望んでいるんだ。

瑠は、彼女のことを静かに見下ろしていた。

そして、彼女がまた呟く。

「お母さんね・・・ずっと貴方と一緒にいたかったのに・・・」

「！・・・」

瑠はいつの間にか口を開いていた。

「お母さんなの・・・！？」

「——・・・本当にごめんね。朝菜」

「！」

いつの間にか、彼女の腕の中には、金髪の女の子の姿があった。

彼女は、ぎゅっと女の子のことを抱き締める。

「っ——・・・」

（お母さんじゃなかった・・・）

なぜ自分はそのこと望んだのだろう。

幻だということは、分かっていたはずなのに。

お母さんじゃないということは、分かっていたはずなのに。

それなのに・・・泣きたくなる。

やっぱり望みは叶わなかった。自分は何も分かっていなかったんだ。

瑠はその光景から顔を背け、唇を強く噛みしめた。
そして、この場から姿を？き消した。

瑠はもといた部屋に立っていた。

目の前にあるベッドには、先生と女の子が先ほどと同じように眠っている。

「・・・消したの？」

瑠のとなりに立っているトイレが、そう聞いてきた。

彼女の瞳は何かを望んでいるように、微かに歪んでいる。

「うん。消したよ」

瑠は流すようにそう答えた。そして、すぐさま先生たちに背を向けた。

「・・・早く帰ろう」

と、その時部屋のドアが開いた。

「朝菜ー！おかゆ持ってきたぞー！今日は、お父さんが作ったおかゆだから・・・」

瑠は、突然部屋に入ってきた黒髪の男の子を見て固まった。

一方、男の子も瑠たちの姿を見て固まる。

「っ・・・——！」

（どうしようっ・・・。またこの姿、見られちゃった・・・）

一気に冷や汗が滲んだ。

・・・そうだ。記憶を消しちゃえばいいんだよ。・・・そうしたら無かったことになるし。

「トイレ、早くっ・・・」

「へー！そんな年で、もうママの仕事してんだ。すごいな！」
「!?・・・」

男の子は当たり前のようにそう言うと、近くにあった本棚の上に

手に持っていたおかゆを置く。そして、その場から部屋の外に向かって叫んだ。

「お父さーん！ムマの人たちが来てるー！」

瑠は、茫然とその光景を眺めていることしかできなかった。

（何で？普通の人なのに・・・）

すると、トイレが眩いた。

「あの子・・・スイマだよ。今は、長袖着てて印は見えないけど・・・」

「！！」

「うちんちに、他のムマとスイマが来るなんて珍しいな。って言うか・・・もう仕事終わったんだ」

男の子は、ベッドで寝ている二人のことを一瞥するとそう言う。

「・・・」

すると、一人の男性が部屋の中に入ってきた。

「翼、朝菜の調子はどうだ？」

「今は寝てるよ」

その男性は、瑠たちの姿を見ると微笑んで軽く頭を下げる。

「お父さん！すごくね？あの子、朝菜と同じぐらいの年なのにもう仕事してるよ！」

その男の子―翼は、その男性に向かって興奮気味の声でそう言った。

「そうだな」

男性は頷きながらそう言うと、ベッドで寝ている二人に視線を移した。

すると、男性の表情が一変する。そして彼は眩くように言った。

「・・・翼。朝菜を下に連れてってくれ」

「・・・？分かったよ」

その男性の表情は、今までとは違い引きつっていた。そして彼は、ベッドから女の子を抱き上げる。

瑠は嫌な予感がした。

（もしかしたら・・・）

心臓の鼓動が一気に早くなるのを感じる。

翼は眠ったままの女の子を、男性から受け取ると、瑠たちの方を気にしながら部屋から出て行った。

「・・・どうして私たちの家に仕事に来たんだ？」

男性は、翼と女の子が出て行った後ろのドアをゆっくりと閉めると、瑠にそう問いかけた。

「・・・」

「教えてくれないか？」

「・・・特に理由なんてない」

瑠は男性の顔は見ずにそう呟く。

「・・・そうか」

「・・・」

「それなら・・・夏枝の“気”を無理やりにとった理由なら聞かせてくれるか？」

男性はトイロの方に視線を移す。

「っ・・・」

トイロは男性の質問に口を開かない。・・・いや、開けない。

瑠の頭の中では、いろいろな考えが渦を巻いていた。

・・・もしかしたら彼は、今、ベッドで眠っている女性―夏枝が、記憶まで失ったということは気づいていないのかもしれない。

それなら気づく前に・・・

「トイロ！早く帰ろう！」

瑠は男性に背を向けた。

「待ちなさい！！」

男性の声が部屋に響く。

瑠はドキリとして動きを止めた。そして、男性のほうに振り返った。

「！」

瑠の目の前には、白い鎌を持った男性の姿があった。

男性はその黒い瞳で、瑠のことをしっかりと見据える。

「君も夏枝と同じように、無理やり眠らされるか？」

「……」

「スイマだけに関係あることじゃない。……パートナーの君も一緒にここにいるんだ」

男性は瑠の瞳を見たまま、そう言った。そして、言い終えるとその手から鎌をかき消す。

すると、ベッドに上半身を倒して眠っていた夏枝がゆっくりと体を起こした。

「……あ……れ……？」

夏枝は辺りをきょろきょろと見渡し、こちらに振り向く。

「ごめん……！私、明の家で寝ちゃうなんて」

夏枝は驚いたようにそう言くと、ゆっくりと立ち上がった。

夏枝の言葉に、明の目が大きく開かれる。

「夏枝……？何言ってるんだ。ここは私たち家族の家だろう」

「え？家族って……明こそ、変なことを言うのね」

夏枝は、困ったように口元を緩めた。

沈黙……。

「あれ。この子たち……」

夏枝は瑠たちの方を見る。

「夏枝……—私たちの関係は何だ？」

明は、一歩夏枝に近づいて消えてしまいそうな声でそう言った。

「……えっ。私はムマで明はスイマ。仕事のパートナーよ」

「……他には？」

「他につて……—」

と、その時、部屋のドアが勢いよく開いた。

「お母さん！！俺たちのこと、忘れちゃったの!？」

翼の声は震えている。おそらく、二人の会話を部屋の外で聞いていたのだろう。

夏枝は翼の言葉に、困ったように微笑んだ。

「翼くん……。私は翼くんのお母さんじゃないよ？」

「っ——……。！どうしたんだよ……。？」

翼の瞳には、今にも溢れだしそうなほどの涙が溜まっていた。そして突然、その瞳は溜のほうに向けられる。

「あのムマがつ……。お母さんの記憶を消したんだ！！」

翼はそう叫ぶと、溜に向かって駆け出した。そして、溜の頬を拳で殴り飛ばす。

「っ……。！」

溜は突然の衝撃に、思わず床に尻もちをついた。

「溜……。！」

トイロも慌てた様子で溜の隣にしゃがみ込み、彼を心配そうに見つめる。

「……。！」

溜はずきずきと痛む右頬を自分の掌で庇い、ぎゅっと唇を噛みしめた。

「今すぐお母さんの記憶をもとに戻せ！！」

声の方を見上げると、すぐそこには怒りの色で染められた翼の顔があった。

溜は翼から顔を背ける。

「もう無理だよ！！消しちゃったんだから！！」

「！！」

「それにいいじゃん。お父さんがいるんだし」

溜は翼の瞳をしっかりと見据え、そう言った。

溜はその言葉の後、ほとんど間を空けずゆっくりと立ち上がった。そして、トイロに視線を移す。

「トイロ……。帰ろう」

しゃがんだままのトイロはこちらを見て、そしてまた目をそらす。

「……。う……。ん」

そして、溜とトイロは光が溢れる部屋を後にした。

（いいんだよ……。これで）

瑠は振り返らなかった。

そして、何処かにいる自分の両親のことを思っていた。

．．．あの時のように、自分のお父さんとお母さんが自分のことを思って泣いてくれていたらしいのに．．．そうしたら、許すことができるのに．．．――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0062u/>

白い鎌と夢物語

2011年12月17日22時51分発行